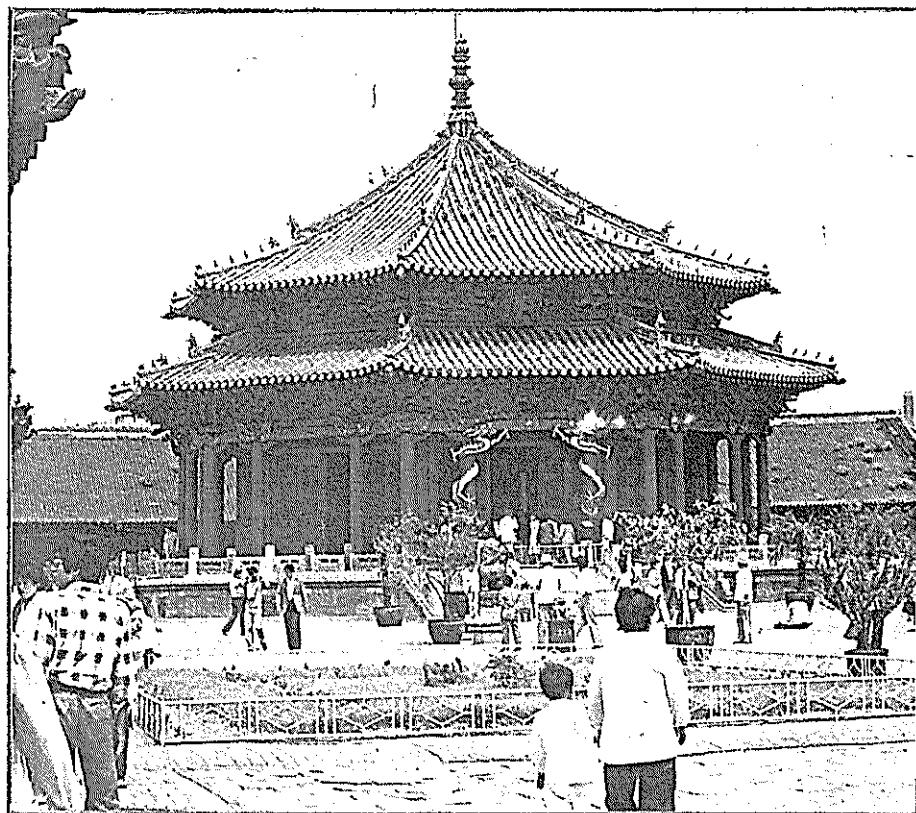


52年目の満州紀行と 北京郊外独り旅

下は瀋陽（奉天）の故宮



平成2年6月14日～23日

寺 前 信 次

「52年目の満州紀行と北京郊外独り旅」目次

はじめに	1	偽皇宮	4
6月14日	6	長白山賓館と長白山	4
大連に着陸できず北京へ	6	6月19日	5
6月15日	6	長春映画撮影所	5
北京～大連	6	甘粕大尉	5
大連の概要	7	南湖公園、清真寺	5
大連市内観光	8	関東軍司令部跡等	5
日清戦争	11	関東軍	5
日露戦争	13	長春～哈爾浜	5
満州の名称の由来と満州族	16	6月20日	5
6月16日	17	哈爾浜の概要	5
大連～瀋陽（奉天）	17	スターリン公園と松花江遊覧	5
奉天会戦	20	キタイスカヤの散策	6
瀋陽（奉天）	21	6月21日	6
瀋陽（奉天）の概要	22	第731部隊（細菌）の跡	6
北陵	22	黒竜江省博物館と張学良	6
6月17日	25	児童公園	6
故宮（奉天）	25	金国の概要	6
張学良旧居	27	哈爾浜空港と満州開拓農民	6
皇姑屯駅と張作霖爆死の鉄橋	29	6月22日	7
張作霖の生い立ちから北京入城	30	北京郊外独り旅	7
北伐と張作霖爆死事件	32	宛平県城	7
柳条溝と北大營の跡	35	盧溝橋	7
柳条溝爆破事件	37	盧溝橋事件の経過の概要	7
満州事変	40	香山公園・碧雲寺	7
東陵	41	居庸関	7
ヌルハチ	42	雍和宮	8
6月18日	45	北京の旅は終る	8
瀋陽～長春	45	6月23日	8
長春（新京）	46	北京～成田	8
長春の概要	46	あとがき	8

はじめに

「遠美近醜」という言葉がある。血まみれた歴史も千年単位で遠望すると、一大口マンということになる。百年以内から中望すると正か邪か、そして責任の所在が問われる。身近な毎日はどうであろうか。自己主張のぶつかり合いは今も昔も地獄の様相を呈し、少しも変わりはないようである。

歴史を動かしているのは一体何であろうか。生存の恐怖、或は恐怖に対する自己防衛の衝動と言い切れば、偏見独断の誹りを受けるかも知れない。しかし否定もしきれないのではないだろうか。

何故そうなるのか。自我妄執の凡夫の集りだからだと聖徳太子や親鸞も言っている。つまり、歴史の先端にいる今の自分も、よかれあしかれ自業自得として甘受するしかないのである。

戦争責任論も大いに結構。政治家や軍人、国民の責任は大いに論すべきである。但し己の脚下を忘れ、己の生活実態から跳ね上がった批判は、嘗てのファッショや人民裁判に通じるから要注意だ。「我れ必ずしも聖なるに非ず、彼れ必ずしも愚なるに非ず、共に凡夫である」ということを忘れてはならない。

このようなことを考えている時、私の友人は戦争の悲惨な傷跡を遺すニューギニアへ慰靈に旅立った。一方の私には風車を廻わす風が北方から吹いてきた。4月のトルコの旅から日ならずして彷徨の旅先を満州に拝んだ。風車の回転が早くなつたのも年老いた証拠でせあろう。

私は昭和13年に初めて満州に渡り、齊齊哈爾（チチハル）に駐屯していた札幌・歩兵第25聯隊に赴任した。其の後、15年に北支那の黄河戦線の第一線に駒を進め、終戦はビルマの白骨の修羅場で迎えた。

人類5000年の歴史を繙くと戦争の歴史であった。人類が求めた平和は戦争と戦争の合間の一時に過ぎない。何故に血を流し、若者が何故に欣然として死地に赴いたのか。永久の平和は人類が死に絶えた地球にしか来ないのであろうか。

歴史書を読み、自らも戦史を書き、満州から支那戦線へ、引き続き最新近代装備の米英支軍と戦って此の世の地獄を見た。約4年間の戦陣生活を通じて辿り着いたものは、「戦争とは一体何だったのであろうか」と言う疑問である。

常に日本軍の戦場となつた満州の紀行文を書く前に、日清・日露戦争から満州・支那・大東亜戦争の流れと経過の概要を先ず記載して、懐旧することにする。

『戦争の流れと経緯の概要』

近代帝国主義華やかな世界情勢の流れの中で、日本は明治維新を迎えた。日本が漸く近代国家へ脱皮しようとしていた時代は、欧州列強の極東進出の末期であった。

ロシア帝国及び清国は当時、世界屈指の陸軍国であり英國は最強の海軍国であった。明治17年、帝政ロシアは極東に不凍港を求めて満州を経て韓国沿岸に南下し、英國は韓国南端の巨文島を租借しようとしていた。

明治27年、日本は清国と北朝鮮及び満州南端で戦い、明治37年にはロシアと南満州で戦った。日露戦争の時は英國は日本の同盟国であり、米国は日本を強力に支援した。日露戦争の勝利によって日本は講和条約により、ロシオが満州に持っていた権益を獲得した。

日清・日露戦争の本質は、日本の安全にとって絶対不可欠な朝鮮半島の安定勢力の存在が、清・露両国によって侵略されようとしたのを阻止するためと、明治維新以来急激に人口の膨張した日本民族の活路を、接壤地域の大陸に求めたものである。このことは大正6年石井・ランシング（威尔ソン大統領の国務長官）協定によって、米国も同意していたのであった。

大正3年夏（1914）歐州に第一次大戦が勃発、その秋、日本は連合国の一員としてドイツを敵として戦い、ドイツが支那の山東半島に持っていた海軍基地・青島を占領した。そして第一次大戦はドイツの敗戦によって終わった。

このとき取り決められたベルサイユ条約は、第二次大戦発生の要因を包蔵していたが、世界は其の事に気付いていなかった。そして翌年国際連盟が成立した。

日本は漸く列強の仲間入りしたが、此の頃の支那の内政は定まらず、国乱れて華北一帯は満州軍閥の雄・張作霖によって制せられていた。昭和2年、関内（長城線内）統一を目指す蒋介石は張軍閥打倒のため北伐に向かったが、7月徐州に戦って大敗して野に下った。翌年総統に返り咲いた蒋介石は再び北伐を開始した。

今度は遂に張作霖軍を北平（北京）に破った。日本政府は戦火の満州に及ぶのを防止するため、張作霖に対して満州に撤去すべきを勧告し、蒋介石に対しては山海關を越えて満州に進入しないように警告した。

張作霖及び蒋介石は日本の要請及び警告を受け入れた。日本政府は満蒙の治安並びに経済性を重視し、満蒙における権益の確保は陸軍の一貫した不動の念願でもあった。だから満州に戦火の及ぶのを防止したのである。

帰満の途についた張作霖の搭乗した列車が爆破されて張作霖が爆死したのは、列車が奉天駅に着く6月4日未明の出来事であった。（この事件は後記する）そして全満州の地盤は張作霖の長子・張学良が継承した。

張学良は反共、反日的であり、満州に進出しているロシア及び日本の勢力を満州から一掃しようとして昭和4年7月、北満州でソ連軍と戦ったが9月、形勢不利となり其の年の12月、ソ連に和を請い軍を収めた。ソ連軍を北満州から追い出すことが出来なかった張学良は、反日の態度を鮮明にした。

昭和6年9月18日夜、柳条溝の満州鉄道爆破に端をして関東軍は張学良軍と交戦、関東軍は奉天を制し張学良を満州から追い出して熱河省（首都は承德で現在の河北省東北部）に封じ始めた。翌年3月に満州國が誕生し、日本政府は9月6日に満州國を承認して日満一体の関係を樹立した。（この項は詳しく後記する）

満州國の建国は支那人に根強い反満反日の感情をさせ、その後満州國の承認問題は日支外交の最大の問題となり、日本の運命を左右することになった。

満州事変は第一次大戦後、列強が採ってきたように日本が大陸に活路を求めたことが原因である。これを阻止しようとする対日圧迫が折から盛んになり、支那の国権回復運動が専ら排日運動に転化集中したが、必然的結果として起ったものである。

支那事変の直接の原因は北支那の盧溝橋事件であるが、その禍根は満州事変にあると言っても過言ではない。（この項も後記する）

日本にとっては満州は、極東ソ連軍に対する日本本土防衛上不可欠な外郭防衛線であり、日満ブロックの構成は経済的な日本の生命線とみなされた。しかし支那側から見れば日本による主権の侵犯と見られるものであった。

満州事変以来、ソ連は恐るべき勢いをもって極東の戦備を増強した。昭和12年にに入るや極東ソ連軍の兵力、戦備は日本の国力、資源的にみて対ソ作戦遂行は至難と考えられるまでに強化された。

ソ連は外蒙との結束を強化した。それは日本と満州との関係と同位に置かれたものであった。外蒙（現モンゴル）はソ連の対日満作戦、対支那作戦における戦略的な要域である。極東ソ連軍は満州包囲の態勢を固め、支那は対日戦争を目標として昭和9年頃から大規模な防禦陣地の構築に入っていた。

このような情勢に加えて、日本勢力を支那大陸より駆逐しようとする外圧が強まつた。長年親日的であつた米国は援支抑日の政策を執り、日米友好関係は次第に悪化した。英國及び仏国は親支的であり、ドイツもまた親支的であった。

諸外国の対支対日政策は基本的には自国の国益に立脚するものであり、日本の対支政策もまた日本の国益に出るもので、両者が相容れられる筈はなかった。

日本は満州の背後の安全を確保するためには、華北（北支那）の安定と蒙疆（内蒙古とこれに接する北支那）に対する施策の強化を必要とした。昭和10年、内蒙古に徳王を首班とする親日的な内蒙古自治政府が出来たことで、満州国西南方の緩衝地帯となつたが、内蒙古を我が領土とする支那と日本との関係は、不安定なものとなつた。

様々な要因が重なり合つて日支関係は急速に悪化した。北支那を舞台にして、モスクに本拠を置くコミニンテルン及び支那共産党の動きが活発化していた。

盧溝橋事件はそのような状況の中で発生した。（この項も後記する）対ソ戦備を最優先にする日本政府は事件の不拡大と、現地軍による事変の收拾に努めた。対支、対ソニ正面作戦に発展することを最も警戒したからである。

だが日本の不拡大方針は日本的一方的な願望に過ぎなかつた。支那国民政府は8月、本格的な対日全面戦争を宣言し、9月、支那共産党と正式に合作して対日全面戦争に突入して、事変は拡大した。

北支那方面に於いては長城線を越えて察哈尔省に及び、西は山西省、南は黄河を越えて山東省から江蘇省に及んでいた。日本軍が上海、南京を攻略したことによって日本政府の不拡大方針は崩壊し、徐州会戦によって陸軍統帥部が考えていた戦面不拡大方針さえ吹き飛んで仕舞つたのである。

僅か一年を出ないうちに事変は更に漢口攻略作戦、廣東作戦へと飛躍的に発展した。戦争指導部は、武力によって支那事変を解決出来ると考えていたのであらうか。日本は対ソ対支の二正面作戦に陥らないために、支那事変を早期に解決しなければならなかつた。

これに対して支那は、事変が更に拡大して日本がソ連と戦うことを考え、英米の介入の動機を作り出し、支那事変が世界大戦の中に組み込まれることを願望していた。

支那は自国の軍備の立ち遅れを長期持久戦法によって補い、守勢消耗戦によって日本を弱らせて、世界大戦の中で最後の勝利を得ようと目論んだ。

それは嘗てロシアが広大な領土と無限の人的要素によって守勢防禦の持久戦法を編み出したように、支那もまた其の広大な領土と巨大な人的資源を動員することによって、勝因を掴もうとしていたのである。

長期持久戦法は国土の荒廃と多くの人命を消尽する戦法で、戦術的には最良の方法とは言えないが、国土の破壊や人命の犠牲を敢えて覚悟するならば有利な戦法である。

現在、ソ連はかつて戦備が整わない時代に採用した持久消耗の守勢作戦を放棄して、敵に勝る絶対的な優勢な兵力、火力、戦闘資材を投入する、大規模かつ果敢な攻勢作戦主義に転じている。戦理としてはこの大規模な攻勢作戦が守勢防禦よりも有利であるからである。

日本は国土の狭小、人的要素の不足、資源を海外に求め、その国力は劣弱である。経済大国と云われる現在でも日本の基本的なこれらの条件は変わってはいない。

支那事変が発生してから一年、既に日本は人的には若者が不足して、予備役及び後備役の老兵を以って兵員を補充しなければならず、国力もやがて下降線を辿るだろうと推測されるに至った。

人々、長期戦は日本に不向きな戦法である。だから日本は即戦即決を戦闘指導の基本方針としていたのであった。

要するに支那事変の本質は、既得権益や計画の維持確保を世界政策とする列強が、日本孤立化、世界経済の独占、支那の門戸開放を要求する政策の展開であった。

それに加えて支那の排日運動の激化と、これを利用した国共合作による国内統一運動が相乗的に作用し、益々満州国の接壤地域で紛争を頻発させることになり、遂に事変にまで発展したものである。

事変発生後の我が国の平和への努力は悉く画餅に帰し、戦線は拡大の一途を辿り、この間米英との対立はいよいよ深刻化した。米国の対日破棄から経済圧迫に発展し、事変は長期化の道を進んで大東亜戦争へと進展したのであった。

『シナは地名、中国は国名』

文章の中で中国のことを支那と書いた。それは終戦までは支那という言葉が使われ、今回の旅でも懐かしい支那や満州という昔の呼び名で記載することにした。

今から二千二百年ばかり昔、シナに秦帝国が興った。これは周王朝後半の春秋・戦国時代の乱世を統一して出来た帝国で、当時としては正しく空前とも云うべき世界国家であった。

大秦帝国建設の英主は自ら始皇帝と称し、封建制を群県制に改めるなど、相当な革新政策を打ち出した。同時に万里の長城を始め宮殿や陵などの大土木工事を起し、その威名は遠く四方に伝わった。

その秦という語が訛って大体、黄河流域の一帯をシナと呼ぶようになったと言われている。即ちシナというのは、国威四隣に振るった時の栄光の形見の言葉である。この日本語のシナに相当するのが、英語ではチャイナであり、露語ではキタイ（これは^{シナ}契丹からきているという）である。印度あたりではシノと発音していると聞く。

ところが今日、このシナという由緒ある言葉を我国では殆ど使用せず、シナという地名の代わりに總て中国という国名を使用している。地名と国名とは全く概念を異にするのである。

若しシナという言葉を一切使用してならないと言うなら、世界地図上から印度シナ半島、シナ本部、東シナ海、南シナ海等の名称を削除するばかりでなく、英語のチャイナも露語のキタイも然るべき改めなければならない。

次ぎに中国という名称だが、これは中華民国とか、中華人民共和国の略称と私は解釈している。中国といい、中華と呼ぶそれ自身の中に、自分の国を万国の中心に据え、その周辺の諸国は東夷・西戎・北狄・南蕃の後進国であると見る優越観念と差別思想

を含義していることは明白である。中国人自身がそう思い、そのように呼ぶことは自由だが、四隣の国が中国と呼ばずにシナと呼んでも支障はないのではないか。

今回の旅行地の満州に於いても、彼等自身が満州と盛んに呼んでいたことを考えると、懐かしい言葉のシナと発音したい。勿論シナという言葉は決して彼等を侮辱するものではないからである。

昭和6年9月18日、柳条溝で発生した事変は満州事変であり、昭和12年7月7日、盧溝橋で日支が衝突した事変は北支事変である。それが逐次拡大して支那事変となり、更に大東亜戦争へと進展した。

日本には満州事変、支那事変などはあったが、日中戦争などという名称の戦争はない。若し、孫文革命以前の大清國が中国であるならば、明治時代に行われた日清戦争を日中戦争と云わなければならぬ。

シナ五千年の歴史はあるが、中国五千年の歴史などというものはない。中華思想そのものは太古の昔から存在したが、中国（中華民国）という名の国が出来たのは80年前の辛亥革命からであった。

戦後、毛沢東を主導者とする共産革命によって中華人民共和国、略して中国が生まれた。孫文革命以前は満州族の清國であり、その前は漢族の明國、そのまた前は蒙古族の支配した元国であった。

一体、元国や清國が中国であろうか。シナ五千年の歴史を繙けば、史記にはじまり、漢書、晋書、隋書、唐書、宋史、金史、元史、明史などと多いが、中国史などという史書は見当らない。

何れ中華民国史や中華人民共和国史もできるだろうが、それはシナ五千年の歴史の中のほんの一小部分に過ぎない。

アメリカ大陸は地名の米州であり、アメリカ合衆国は国名の米国である。米州と米国は違うのである。朝鮮半島というのは地名であって韓国というのは国名である。

同様に気象情報などで言う場合には、シナ大陸、満州、蒙古、朝鮮、東シナ海などと地名を用い、国名として中華民国とか中華人民共和国を使用する必要のあるときは、当然その略称である中国を使用すべきである。

歴史を完全に認識するために、敢えて支那（シナ）の解釈を述べてみたのである。



6月14日 (木) 大連に着陸できず北京へ

成田発17・00 C A 952便（大連経由北京行）の出発は2時間延と告げられた。去る4月13日からのトルコ・パキスタンの旅は、遅延のために成田に一泊する羽目に遭い、二の舞かと意気消沈していたところ、漸く19・00に鵬翼は浮揚した。

飛行途中の機の振動は激しく、挙げ句の果ては大連の気象状態が悪く着陸できないとのアナウンスだ。旅程は狂って23・10に北京空港に着陸し、空港近くの華誼賓館に旅装を解いたのは翌日の午前1時であった。誠に不運の連続である。

6月15日 (金) 快晴 北京～大連

目覚めた朝は心機壯快、大陸の空気は乾燥していた。洋々とした懷古の夢を抱いて9時にホテルを後にし、見馴れた松と楊柳の街道を眺めて新築中の空港に入った。見れば昨日の同乗者ばかりである。その中の杖をついたご老体の姿が眼に映ると、未だ未だ私も希望が持てると思を強くした。

鮮満国境の白頭山附近で苦労した開拓移民団の一一行は慰靈祭のための渡溝で、殆どの人達は満州に關係を持つ者ばかりである。長年の願望の旅であろう。

白頭山附近で馬賊の跳梁に怯えながら開拓に従事していた一人は、私に金日成について語ってくれた。彼は鮮満国境で馬賊の頭目だったと信じていたが、実は彼の親爺が頭領であり、現在の金日成はモスクの大学を出てから襲名し、戦後、ソ連から送られて來た子息だという。

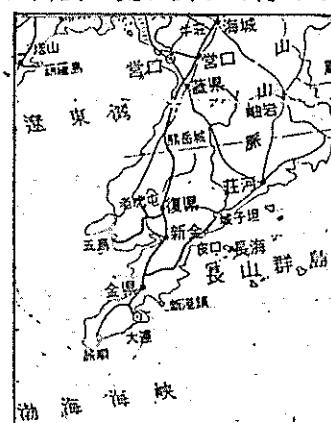
しかし我なりに調査してみると、1912年（大正元年）生まれの彼は1930年に中共に入党し、32年の満州事変後にゲリラ戦で抗日闘争に活躍、長白山の虎として有名であった。（白頭山は長白山脈の最高峰）34年に中共人民革命軍に統合して東北抗日連合軍司令になっている。そして終戦後に朝鮮民主主義共和国の主席になった筈だが、何れが真実であろうか。

大連行の国内便は10・30に滑走を始め、陸地から海岸線に沿って飛翔した。渤海湾の紺碧の海原は船舶の孤影も見えない波静かで、時折、白雲が流れ去って行くのみであった。（下図は遼東半島の地図）

離陸後、約1時間を経過した頃より再び陸地が見え始め、地図と対照してみると遼東半島上を南下中であった。空から眺める遼東半島、それは日本が世界へ眼を開いた歴史的な回顧の地である。

宙に眼をすえて黙然としている時、懷古の旅の夢を乗せて羽撃く翼下に、金州（現在の金県）が瞰下されてきた。今は石油基地と変化してしまった金州は日清・日露の古戦場、未だ先輩の靈が眠っている。

突然、私の脳裏に閃いた。それは乃木大将の金州城下の詩であった。懐かしく思い出される詩を唄んで記載する。



山川草木転荒涼 山川草木うたた荒涼 十里風腥新戦場 十里風なまぐさし新戦場
征馬不前人不語 征馬進まず人語らず 金州城外斜陽立 金州城外斜陽に立つ

金州城は遼東半島の要衝の地。日清戦争では日本軍は大連東方に上陸して先ず最初に金州城を攻撃。日露戦争に於いても奥第2軍は先ず金州と南山を攻撃し、激戦が展開された古戦場である。(乃木大将は日清戦争では旅団長・少将として金州城を攻撃している)

三国志の項羽は劉邦の激しい追撃を受けた時、自分に言い聞かせるように言った言葉だが、乃木大将の「何の顔あってか父母に見えんや」と戦後に詠んだ詩は、我々も骨の髓まで教訓として学ばなければならない。

戦争を回想しているうちに搭乗機は、遼東半島の最南端にある「北海の真珠」と呼ばれる海浜都市・大連空港に、12・30に漸く着陸した。気温は20度、北京の30度に比較して非常に涼しく、市内までの30分の街道はアカシア並木が続き爽快であった。

昔の赤煉瓦造りの建物、戦後のコンクリート造りの建物とは明瞭に区別されていた。ロータリーを中心とした放射線状に伸びる道路は都市計画された街らしく、スターリン広場から堂々とした市役所・裁判所が陣取る中央公園を通過した。

車窓から一瞥する街は旅人の心を捉える魅力に溢れ、旧日本のトキワ台小学校は今も小学校として使用されて、嬉々として子供が戯れていた。

日本の租借地・関東州の中心都市であった大連、満州の海の玄関として40年間にわたって殷賑を極めた大連、それは今も繁栄を謳歌して大躍進を続ける大連であった。

万水を越えて訪れた大連は流石に美しい。数々の由緒ある町並みに眼を遣りながら、旧満鉄病院前に聳える豪華なホリディイン・ホテル(大連九州仮日飯店)に到着した。

その時、一行の中の一老女が初めて妹と涙の対面をするシーンを眼の当たりにした。我々も貴い涙で目頭を熱くさせられたのであった。会話のできない二人の胸中は如何ばかりであろうか。痛ましい戦争の傷跡、やはり満州の実感が身に染みたのである。

大連の概要

ロシア名をダリニーという。開放後の1950年、嘗ての旅順、大連、金州が合併して旅大市となったが、1981年4月から市民の要望により再び大連市と改名した。市内人口は162万、郊外を合わせた人口は760万という大都市である。

日清戦争後、三国干渉によって日本に遼東半島を返還させた帝政ロシアは、清国を懐柔して関東州を租借し、旅順軍港と共に大連湾に一大商港を建設しようと、一寒村に過ぎなかった「青泥窪」を選定した。そして埠頭建設の権威であったサハロフを市長に任命し、新都市創設の全権を委ねた。

都市計画は人口4万人収容を目標とし、パリに模して中央広場と七つの小広場を中心同心円状の街路で囲み、港湾計画は年間500万トンの貨物の出入を目指とした。

着工後2年、漸く官庁区域と繫船広場が出来上がったころ日露戦争が始まり、日本は殆ど無傷のまま大連を占領し、翌年附近の灣名をとって大連と命名した。

日露講和のポースマス条約によってロシアの租借権を受け継ぎ、ほぼロシアの建設計画を踏襲して完成に乗り出した。特に大連港を自由貿易港とし、満鉄本社を大連に

置いて市の発展に多大の貢献をした。

占領当時3万5千だった人口は満州事変前には20万を越え、第2次大戦の終戦時には83万（日本人は22万）に達していたという。

大正時代の工業は満州大豆を原料とした製油業、満鉄を背景とした車両機械工業、附近に埋蔵される石灰石等を原料とするセメント、ガラス工業のほか、製麻、製糖、煉瓦金属工業などであった。

満州事変後は化学工業、機械工業の進出が目覚ましく、ソーダ工業、油脂工業、硫安工業、原油精製業、鞍山の昭和製鋼所をひかえた造船、機械、その他綿花工業が盛んとなり、沿岸漁業の中心地でもあった。

1976年には約60キロ北東部に大連新港が完成し、大慶油田の原油積み出し港となり、更に大窯湾では日本の協力によって新港の建設設計画が進行中である。

ロシアと日本が権利をめぐって争うほど、大連港は不凍港の良港として魅力があり、上海と並ぶ中国屈指の貿易港である。中国経済の発展と共に大連の将来は洋々たるものがあるだろう。

我々の最も関心の深い旅順は中国の海軍基地となっており、残念ながら外国人には開放されていない。日露戦争の旅順攻撃で犠牲となられた遺族にとっては、祖父や曾祖父の古戦場に墓参できないことは悔やまれてならない。

大連市内観光

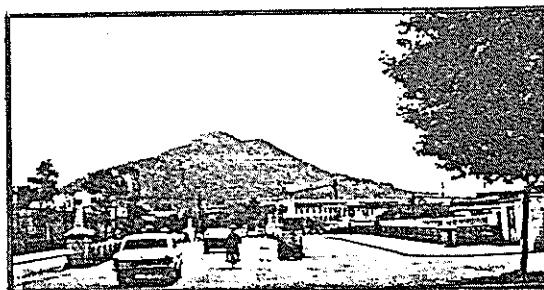
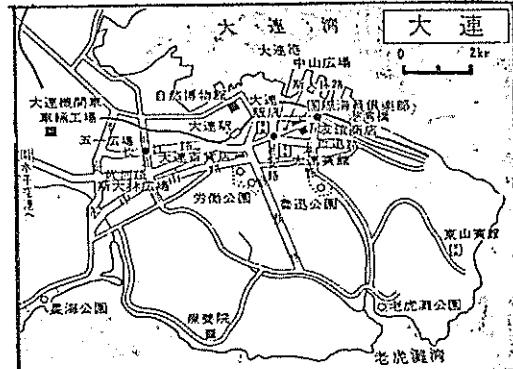
ホテルで昼食を終えた一行21名は満州の玄関口・大連の観光に出掛け、先ず最初に「星海公園」に向かった。

市役所と裁判所のある中央公園から放射線状に伸びる道路を進み、旧ヤマト・ホテルを眺めて一直線に南下した。

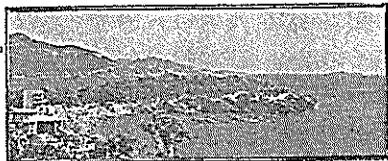
自動車道路を縦で清掃している光景は珍しく、目線を遠くにうつすと「大連富士」の秀麗な形姿が、フロントガラスを通して写っていた（上の写真）。往時の同胞は扶桑の母国を偲び命名したのであろう。憧憬の的であった大連富士、今も尚、古里に通じる心の支えのような感じがしていた。

水力発電所の水煙が立ち昇る反対側には、大連スポーツセンターの近代建築が建ち（旧競馬場跡）、市内電車も海岸に向かって走っていた。この附近から霧が立ち籠めて視界は悪くなり、昨夜大連空港に着陸できなかった原因が判明した。輻射冷却現象が起って地面に接する気層が冷されるのだから仕方のないことである。

数棟のキリスト教会に隣接した所が「星海公園」の玄関口であった。青々とした松林が続く中を進み、あずま屋や花壇が美しく配置された小高い丘を降りると、霧の晴れ間から純白の砂浜が一面に展開していた。



星海公園は大連第一の海水浴場で名高く、200mも遠浅が続くため子供達の絶好の遊び場となっている。遠浅の沖には幾つかの小島が散見され、素晴らしい景観に魅せられた昔のロシア人や日本人は、好んで高級住宅や別荘を建てた所である。又、日本人にとっては桜の名所として親しまれていた所でもあった。（上の写真は星海公園の一部）



伝説によると、空から落ちてきた星（隕石）が小島になったと云われている。旧名を星ヶ浦と呼んだのも其のためであり、今は橋がかかって散歩コースになっている。

海水浴には未だ早いようだ。肌寒い海中に泳ぐこともなく浸かっている数人の青年、水浴を諦めてボートを漕ぐ若者達、大連人の生活の余裕の現われであろうか。

昭和14年頃、彼の有名な甘粕大尉が此の海にモーター艇を走らせ、魚釣りをして遊んだという記事を思い出し、更に懐かしさが込み上げて来るのであった。

星海公園の続きに旅順があると思うと自然に眼は西を注視し、爾靈山（203高地）や東鷄冠山の真紅に染まった血潮の香りが、ほのかな浜風に流されて伝わってくるような感じがしいてた。

薄い霧は海岸線から遠ざかるにつれて消え去り、旧日本人街を行っている中に「パチンコ」と片仮名で書いた看板が眼に止った。パチンコが中国大陸までも進出して国際化したことは驚きだ。それにしても政府が許可した点は特筆すべき事柄だ。

聖德街を通り抜けて「貝殻細工工場」に案内された。大連は中国の貝殻細工の搖籃の地である。若い娘達が丸鋸を上手に使って貝殻を削り、何十種類の貝殻を一つの図柄に纏める技術は曲芸のようである。

川や湖、海などから採れる貝を半浮き彫りにして作った絵、それは活き活きとした人間像となり、美しい花鳥の絵となって、芸の細やかさは中国ならではの独特の芸術である。（右写真は貝殻で出来た絵）



貝殻細工工場通りの横町は、昔のショートル市場（泥棒した物を売る所）だったらしく、工場を抜け出して早速写真に収めたところ、一部が現地人相手の木賃宿となっている外は、一般住宅になっていた。

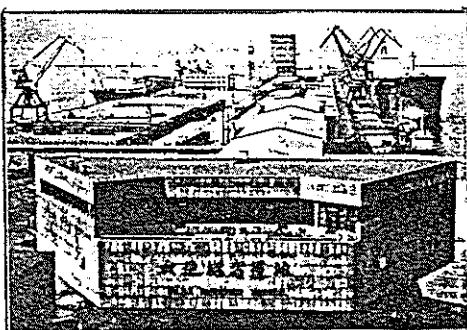
ここを去って中山路を通り、中ソ友好記念碑（ソ連兵の像を彫刻した塔）の建つスターリン広場を車窓から眺め、再び中央公園を通過して「大連埠頭」に向かった。

上海と肩を並べる大連港は84年に経済技術開発区に指定され、対外貿易の窓口として重要な役割を果たしている。

埠頭数は23、港湾労働者は約2万人で、5千～1万トン級の船舶が同時に停泊できる。

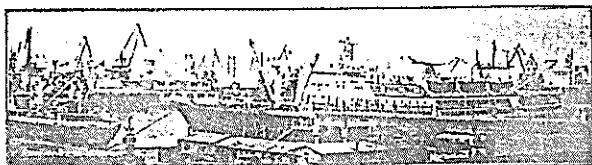
入港する外国船は年間700隻以上で、そのうち日本船が最も多く全体の3分の1を占め、貿易量全体の半分を占めている。本当に日本様々である。（右は客船埠頭）

桟橋の丸いゲートは今も変わらず、中を歩いてみると延々と伸びて何百mあるだろうか。



埠頭の監視人が警備に当っていたが、私の顔を見て入場OKのサインで応じてくれた。日本船のお陰だと感謝しているのかも知れない。

(右の写真は埠頭に停泊する船舶)



待合所の建っている南側の大連港管理委員会の建物は、曾ての満鉄埠頭事務所である。この半円形の堂々とした6階建ての屋上へエレベータで昇り、見渡す限りの埠頭に所狭しと浮かぶ船舶群の俯瞰は、流石に大連港の盛況ぶりを誇示していた。

6頁に記載した金州に1975年に建設された大連新港は、石油タンカーの専用港となつていて、哈爾濱西方の大慶油田から1200キロのパイプラインを通って送られて来るというから、国土の広大は羨望の限りである。

観光資源の少ない大連では、観光名所の一つになっている埠頭の見学も終わり、次ぎは遼東半島東南端の「老虎灘公園」へ向かった。老虎という言葉が鼓膜に響いた瞬間、明治27年12月、日露戦争の第3軍（乃木軍）が攻撃した爾靈山の東側、老虎溝山の激戦が想起されてきた。

公園内に一歩立ち入ると其処に花は繚乱と咲き誇り、静寂の海辺に響く松籟の音は自然の美しい音楽のようである。

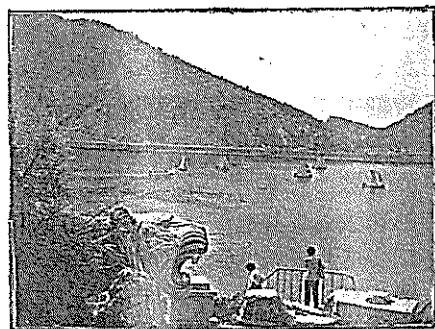
黄海に突き出た天地自然の岬は優美な景観を現わし、静かに吹き渡る風の色、水の中の雲の影、眺めている我々は天地の一大文章に接している感じであった。（右写真）



山の囲繞する海岸は断崖の入り江といった様相で、岬の突端に「老虎灘」の碑が立っている。幸運に恵まれたのか、中国の女優かモデル娘が碑を背景にした撮影時に出会い、間髪を入れずシャッターを押していた。

老虎灘の名称の由来は、湾を隔てた岬が虎の形をしているからだと謂れている。伝説によると、この辺の海に一匹の虎が棲んでいて漁民を苦しめていた。虎が海に棲んでいることは不思議だが、その虎を一人の青年が倒し、自分も傷を負って命を落としてしまった。（石の虎と岬）

その倒れた虎が頭を半分に割られて海に横たわり、前に見えるような岬となったのだと言う。



中国人の形容は誇大妄想の傾向が強く、牽強付会というか自分の都合の良いようにこじつけ、白髮三千丈式で私の眼には如何しても虎の寝姿には見えない。そのことは天の神に委ね、大連の人達に幸福の到来を祈るばかりだ。

不思議にも公園内に看護婦の姿が彼方此方に見受けられた。松林の中に見え隠れしている中国風の建物は、矢張り労働者用の療養所であった。1952年に創設した慢性病治療のための針治療やりハビリの施設であり、将来は立派なリゾート地として発展するには適地であろう。

昨夜の着陸不能が祟って観光時間が削られ、陽が西に傾きかける中を走り、洗練さ

れた美しい町並みに戻り着いた。

ホテルに帰る途中、帝政ロシア時代の市庁舎、日本の占領時代は満蒙資源館として開放されていた古い木造建築を見学した。現在は海洋生物や鉱物などの自然資源が、凡そ2700種類も展示される大連自然博物館となっている。入館時間が過ぎて内部の見学はできず甚だ惜しい極みであった。

(右の写真は大連自然博物館の古い建物)



ソ連の赤色革命、支那の民族運動の革命（孫文の辛亥革命）そして日本の満州への飛び出し革命の三革命の合流点の満州、その満州の玄関口の大連の観光も愈々千秋楽となつた。

晚餐は大連自慢の海鮮料理であった。一般に御馳走のことを支那では酒池肉林と形容したが、豪奢な魚料理のことを酒池魚林とは云えないだろうか。料理は五感で味わうものである。盛り付けから給仕接待まで心を配り、器も吟味されていて、10回に及ぶ中国紀行の中では筆頭の料理だと賞賛したい。

添乗員に其のことを告げたところL.O.O.Kは旅費が高価だからと答えていた。動物的人間の私にとって健康長寿の海鮮料理を賞味したことは、ストレス解消の最高の手段であり、一種の開放感にうたれて旅の一日を締め括ったと云えるだろう。

部屋に戻って真珠の街の美景に見惚れていた。しかし一方では戦跡のことが全身の血の流れの中に浮かんでいた。一将功成って万骨枯ると言われた旅順攻撃、日清・日露の役から満州事変、支那事変へと走馬燈のように回想されるのであった。

東洋民族の骨肉相喰む不幸な戦争は、戦わざるを得なかつたのであろうか。侵略者には勿論責任の重大さが問われるが、しかし侵略される側にも責任のあることは歴史が証明している。

ここでもう一度、過去の戦争を回顧することは無意味なことではなく、日清戦争、三国干渉、日露戦争の概要を記載することにした。（満州事変は瀋陽の項に譲る）又、満州は清祖の地である関係から、満州族に就いても付記しておきたい。

(前記した「はじめに」と重複する点は致し方ない)

日清戦争 (1894~95)

結論的には漸く近代化されつつあった日本と、近代化の遅れた清国との戦いで、朝鮮半島をめぐる日清両国の相克によるものであった。

当時の極東における英・露の対立、資本主義世界が帝国主義段階に移行しようとしていたと言う世界史的条件にも強く影響されている。日本は欧米諸国から不平等条約を押し付けられ、圧迫されていた状態であった。

1876年、日本は朝鮮と修好条約を結ぶことに成功し、その第1条に「朝鮮は自主の邦にして日本國と平等の権を保有せり」と規定された。しかし之は清国との朝鮮に対する宗主権を否認したもので、日清戦争の最初の火種がつくられた。

この後日本は政治的にも経済的にも朝鮮に着々と進出した結果、朝鮮の保守派や民衆の反日感情も起り、1882年7月、京城で反日暴動が起った（壬午の変）。

清国は大兵を派遣してこれを鎮圧し反日の勢力を政権につけ、これと条約を結び、朝鮮は清国の属邦と規定し、政治・外交・軍事及び貿易上の幾つかの特権を得た。

日本はこれに対抗し武力を背景に朝鮮政府に迫り、7月事件の賠償、公使館護衛のためという口実で、軍隊を京城に置く権利を得た。この際日本は清国の宗主権を一掃する戦争を考慮したが、兵力財力ともに不足のため暫く自重し、他日に備えて軍備の拡張を始めた。

この後朝鮮支配層にも親日派と親清派の対立が生じ、1884年12月、親日派のクーデタが行われたが、3日間で清国の軍隊に破られた（甲申の変）。

壬午の変、甲申の変を合わせて京城事件と云い、このときから日清開戦の危機が生じたが両国とも自重し、85年4月に天津条約が結ばれ、日清両国とも朝鮮から撤兵し、今後出兵の際は互いに通知することを約した。

当時極東では英・露が激しく対立しており、英国は日本を対露抗争に利用しようとして、日本の朝鮮進出を励ましていた。ことに91年春、ロシアがシベリア鉄道建設に着手したことは、英國の対日利用政策を促進した。

英國は日本の要求に応じて治外法権を撤廃する改正条約に調印した。これは日本政府に対清戦争の際、英國の支持を受けてロシアの対日干渉をはねのけると云う確信を与えた（事実その通りになった）。

清国の政権内部には複雑な封建的派閥対立があり、国力の結集は妨げられていた。皇帝と政府は対日主戦論であったが、戦争のための実際的な用意は何もせず、北洋大臣の李鴻章はあくまで戦争を避け、ロシアの干渉で日本を抑えようとしていた。

94年春、南朝鮮で東学党という農民の宗教の衣をつけた革命的叛乱が起ったが、朝鮮政府は自力でこれを鎮圧できず、清国に出兵を依頼した。清国はこれ幸いと大軍を出兵し、日本にその旨を通知してくるや否や、日本も亦かねての準備にもとづいて七千の軍隊を派遣した。

日本は朝鮮が清国の属邦であることを認めないと主張し、朝鮮政府に内政の改革を要求した。その結果、日英新条約が調印されたが、その9日後の7月25日、日本海軍は豊島沖で清国船隊を攻撃し、2日後に日本陸軍は京城南方の清国軍を攻撃してこれを撃破した。これが日清戦争の開始となつたのである。

10月下旬、平壤附近で清軍を破った第一軍は鶴綠江を渡って南満州に進撃、第二軍は遼東半島に上陸して11月中旬に旅順と大連を占領した。海軍は9月17日の黄海の決戦で大勝して制海権を確保し、これで清国の敗戦は決定的となった。

平壤の陸戦と黄海の海戦の後から英國は既に日清間の講和を図ったが、ロシアの妨害で失敗し、11月米国が新たに和平の仲介に乗り出し、95年4月17日、日本の下関で日清講和条約が調印された。

その条件は（1）朝鮮の完全独立、即ち清国の宗主権を認めない。（2）戦費賠償。（3）遼東半島、台湾、澎湖諸島の割譲。（4）欧米諸国が清国に有すると同等の通商上の特権の承認であった。

ここで最大の利益を得たのは英國であった。日清戦争は結果的には英國の支那に対する帝国主義敵進出の大道を開いてものである。

日清戦争では日本軍は悪疫疾病に悩まされたが、戦争そのものは日本軍の楽勝であった。日本軍の戦死約1万3千の大半は病死で、戦死は1千4百に過ぎなかった。

三国干渉

日清戦争が日本の勝利で終わり、1895年（明治28年）4月18日、講和条約が調印されたが、その後わずか6日後の4月23日、ロシア、フランス、ドイツの3国の公使が相前後して日本外務省を訪れ、講和条約によって日本が清国から割譲を受けることになっていた、遼東半島の領有権を放棄することを勧告してきた。この事件を三国干渉という。

この干渉の主導的地位にあったロシアは、日本の此の方面における進出によって大きな脅威を受ける立場にあり、最も積極的であった。

フランスは1891年8月にロシアとの間に同盟を結んでいた関係上、ロシアに引きずられて干渉に参加した。またドイツは、ロシアとフランスの鉾先が自国に向かうのを、東洋に転向させる政略のもとに干渉に賛成した。

ただ英國だけは、日本が軍事的に強化されることは、それだけロシアの南下を阻止する防壁となり、英國の清国に於ける権益の保護に有利であるとの見解に立ち、参加を拒絶した。

こうしてドイツ、フランス艦隊を含むロシア艦隊は、日清講和条約の交渉地であった芝罘（チーフ、山東半島の渤海側）沖に終結し、露骨な示威運動を展開した。

日本は米英伊などに三国を牽制させようと図った。しかし其の苦心は報われず、局面は好転しなかった。しかも清国からは三国干渉を口実に、条約批准交換の延期を提議してくるという事態も起った。

そこで閣議は、講和条約を実現させるためにも三国の勧告を容認することに決意し、5月5日、遼東半島の放棄を三国に通告、更に10日詔勅が発せられた。

日本の議会と新聞は政府の外交の失敗と不手際を猛烈に攻撃したが、政府は臥薪嘗胆のスローガンを掲げ、民心をロシアに対する敵愾心によって結集することに努めた。

一方この三国干渉は歐州列強が清国を分割する端緒を開いたのであった。また98年（明治31年）3月、ドイツ軍の膠州湾（山東半島）上陸を契機として、列強は清国各地を租借したが、中でもロシアは同月、当の遼東半島を租借し、6月には東清鉄道の南満支線の敷設権まで獲得した。これらが後日の日露戦争の原因となった。

日露戦争

20世紀初め朝鮮と滿州の支配権を争い、日本と帝政ロシアとの間で戦った戦争は、世界史的には帝国主義的時代の到来を意味している。帝政ロシアにとっては1905年の革命を生み、危機を深めたものとして大きな意義がある。

日清戦争後、旅順・大連の経営、東清鉄道（東支鉄道）の建設を進めていたロシアは、1900年の「義和団事件」（別称は北清事変で後記）に際して滿州を占領し、事件解決後も撤兵せず、軍事支配を続けた。

『義和団（団匪、拳匪集団）は白蓮教系の宗教秘密結社で排外心が強く、扶清滅洋を標榜して1899年に山東省で暴動を起した。外人とくにキリスト教徒を迫害し、清朝もこれを扇動して1900年には北京の列国公使館を攻囲した。それで日・独・露などの8ヶ国の連合軍がこれを破り、1901年9月に和議が成立した』

このことは門戸開放を主張する米英の利害と対立をはげしくし、英國は1902年日英同盟を結んでロシアと対抗した。ロシアの極東經營の背後にはフランス金融資本があり、ドイツもその世界政策上ロシアの東方進出を支持したから、日・英・米対ロシア・ドイツ・フランスという国際的な対立が生まれた。（右は南満州地図）

日清戦争の結果獲得した遼東半島を三国干渉によって失った日本は、戦後ただちに大陸で再戦をめざして産業の発展と軍備の充実に努め、臥薪嘗胆を相言葉として対露戦争に備えていた。

ロシアの満州占領と朝鮮に対する脅威の増大は、日本にとってもロシアとの軍事的対決を必至とした。日英同盟の締結によって英米の支持を確保したことと、日清戦争後に計画された陸海軍の充実が03年ころに完成したことなどが、日本の対露戦争への決意を固めさせた。

03年8月以来、日露両国間に満州と朝鮮の問題について交渉が開始されたが、両国の主張は全く対立し、開戦は避けられない情勢となった。このとき日本の国内では戦争への準備はほぼ整えられていた。

これに反してロシアでは戦争への本格的な準備は整わず、宮廷は強硬政策をとりながら、脅しによって日本を屈服させることが可能だと信じ、真剣な戦争準備を行わなかつた。国内では反動政策に対する民衆の不満が高まり革命寸前の情勢であった。

1904年2月8日、日本海軍は旅順のロシア艦隊を奇襲し、陸軍の先遣隊は朝鮮の仁川に上陸して京城に向つた。9日ロシアが、10日に日本がそれぞれ宣戦を布告したが、緒戦に於いてロシアは不意をつかれ、黄海方面での制海権を失つた。

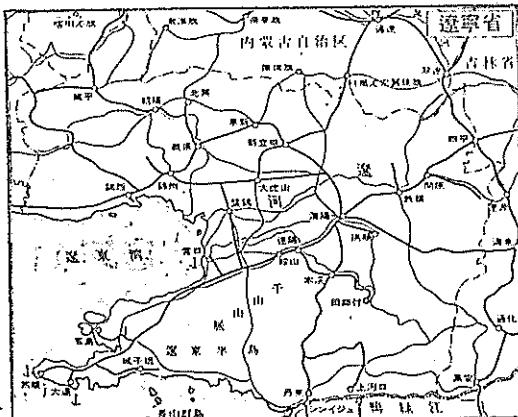
その結果ロシアは、朝鮮の日本軍による制圧と南満州への上陸作戦を傍観しなければならなかつた。その上極東のロシア海軍は旅順とウラジオストックに2分され、更に主力はヨーロッパにあり、各個撃破を受ける運命にあつた。

陸軍も満州方面には素質不良の一部があるだけで、主力はヨーロッパからシベリア鉄道で輸送しなければならなかつた。これに対し日本は初めから全力を挙げて、緒戦の勝利と地の利から、有利な戦略態勢の確立を目指すことが出来たのであつた。

4月下旬、朝鮮に上陸して北進した黒木第一軍と、ロシアの東部支隊とが鴨緑江で衝突して日本軍が勝利を獲得した。次いで5月、遼東半島に上陸した奥第二軍は南山を占領して旅順を孤立させた。

この間、乃木第三軍は旅順要塞の攻囲をすすめた。8月下旬には遼陽附近に於いて、クロバトキンの率いるロシア軍と、大山巖元帥の率いる日本軍とは、最初の大規模な会戦を戦い、激戦の末日本軍は遼陽を占領した。しかし追撃する余力がなく停止し、両軍は沙河をはさんで対陣した。

一方の旅順要塞の攻撃は強攻によって膨大な損害を出したが、1905年1月に漸く陥落させた。日本軍はこのとき初めて近代戦の洗礼を受けたのであつた。旅順要塞



の永久築城は、ロシアを支援するフランスの軍事技術の粹を集めて造ったもので、その堅固さと火網構成に於いても、また防禦施設の完璧と構造の巨大さに於いても將に難攻不落であった。

旅順の陥落によって増強された日本軍と、ヨーロッパからの増援を得たロシア軍とは05年3月、奉天（現在の瀋陽）附近で会戦したが、再び兵力でやや劣る日本軍が勝利を収める結果となった。

日露戦争の陸軍の勝利は戦場を南満州に限定したからだと思われる。当時の日本の人口は4000万の貧乏国で、引き続いで北満州に駒を進めることは危険な賭であった。この点は軍指導者の卓見と言わなければならない。

一方、戦勢挽回のためヨーロッパから回航されたロシアのバルチック（バルト）艦隊は、5月27、8日の対馬沖海戦で、東郷元帥の率いる連合艦隊のために全滅的打撃を受け、海軍の戦闘も日本の大勝利に終わった。

ロシアは本国の精銳部隊を革命に備えて残置せねばならず、満州に送られた部隊は素質も悪く士気も退廃していた。反対に日本軍は士気と素質に於いて優っていた。

しかし日本の戦力は05年になると底をつき、戦費調達のための増税と国債は勿論、米英の外債も限界に達した。戦線が北に伸びるに従って補給は困難になり、ロシアの兵力増加に逆比例して日本軍の戦力は低下し始めていた。

ロシアでは05年1月の血の日曜日をきっかけとして国内の革命運動が激化し、労働者のストライキ、農民蜂起、軍隊の叛乱が相次いで起り、革命の脅威から戦争継続の能力を失っていた。このことは日本にとって幸運と言わねばならない。

05年6月、米国は日本とロシア両国に講和を勧告した。日本は戦力の枯渇から、ロシアは戦場での敗北と国内の革命により、ともに戦争を続けることを恐れて受諾し、8月からポーツマスに於いて講和会議が開かれた。

この条約で、日本は樺太（現在のサハリン）の南半分の領土と、旅順・大連の租借権、南満州鉄道を獲得し、9月5日調印、16日に休戦が成立した。

戦争による損害は日本は戦病死者12万、艦船の喪失91隻、直接戦費15億円、ロシアは死者11万5千、艦船の喪失98隻、軍費約22億円である。

ロシアでは1905～06年の革命が戦争の直接の結果として起り、ツァーの崩壊が早められ、日本の朝鮮に対する支配が決定的になった。南満州も日本の独占的な支配地域となり、ここから日本・米国の対立が新たに生まれたと考えられるだろう。

日露戦争から教訓として取り上げなければならない点は多く、3点を指摘したい。

①ロシア軍の装備は嘗ての清軍とは格段の差があり、兵器の性能、数、弾薬数に於いて數段優秀であった。日本軍には実用化されていなかった機関銃まで装備していた。

②日本軍はこの戦闘方式の変化を汲み取ることもなく、むしろ逆に損害を意とせず、肉弾突撃を敢行する攻撃精神こそ勝利の要素だと信じた。軍首脳部は将兵の軍人精神、攻撃精神こそ勝利の原因だと公式見解をとり、生命を鴻毛の軽きに比し、忠君愛國の精神が物質的威力に優ると信じた。

③この教訓のもとに昭和となり、満州・支那事変・大東亜戦争へと移行した。私も参加した戦闘の体験から、万歳突撃がどれだけ効果があったか甚だ疑問であるばかりか、人命軽視の最たるもので無鉄砲と言うべきだ。十年一日の如く兵器の進歩も戦法の変化もなく、日露戦争の教訓を活かし切れなかった点は憤慨に耐えない。

満州の名称の由来と満州族

満州族は金国（1115～1234）や清国（1616～1912）をきずき支那の支配層となった種族で、トゥンガース族に属している。支那の歴史に現われた肅慎・勿吉・靺鞨・高句麗・女真などは、その前身あるいは同じ系統の種族である。

満州という名称の由来については種々の異説があるが、文殊菩薩の文殊の音の転化という説が有力である。

明代の女真人（満州族の前身）の首長の中には文殊（満住）と名乗った者が少なくなかったが、16世紀末から女真人が急速に発展し、17世紀初期に大陸の支配者になると、それまでの女真という種族名を「満州」と改め、また金（後金）という国号を以ってこれに変えた。

国号はやがて清と変わったが、種族名としての満州は其の後も使われ、さらに「地名の名称」にも使われるに至った。

女真人は嘗て高句麗・渤海・金などの大国を建設したことがあるが、それらの国が滅びた後には、其の度に女真族の社会は未開発状態に戻った。又その段階から出直して成長発展し、次ぎの国家を造るという歴史を繰り返した。

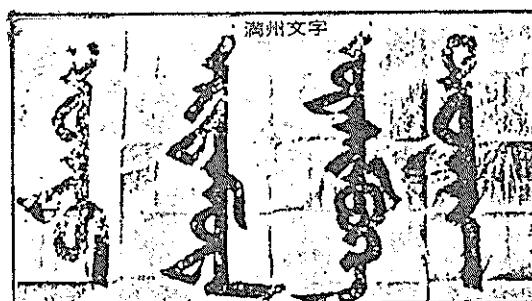
満州族が台頭する前の時代、即ち明代に於いても彼等は石器・土器・骨角器を使う半狩猟・半農耕の低い生活をなし、其の社会は氏族制度で組織されていた。このような女真族が16世紀末から急速に発展し、短時日の間に清国という大帝国を造った。このことは瀋陽の東陵のヌルハチの項で記載する。

清朝成立後、満州民族の殆ど全部は故郷の満州を離れて支那本土に移住し、支那の支配者になった。当時彼等の数は約10万人であったが、この少数の満州族は總て軍団（八旗）に編成されていた。

北京を始め全国の主要地点に集団的（屯田兵式）に散在居住し、軍・政の支配権を握り、また全土に広大な旗地を設けて経済的な地盤を固めた。しかし遙かに高い文化水準と圧倒的多数の人口をもつ漢民族の中で生活するうちに、満州族の生活様式は漢民族に同化され、風俗習慣だけでなく言語まで固有のものを失った。

漢民族の反満運動は清朝初期からあったが、19世紀後期以降とくに激化し、遂に辛亥革命で満州族の支配権は倒れた。その後も支那には満州族の子孫は残っているが、生活様式は漢民族と変わらず完全な支那人となっている。

満州事変後、日本は旧清朝の王室を担いで満州國を造ったが、漢民族に対抗する満州民族の優秀な人は多く存在しなかったようだ。ただ同系統の者が満州の奥地で小さな集団をつくり、狩猟をしていただけのようであった。



6月16日 (土) 快晴 大連～瀋陽 (奉天)

眼を覚ますと光の薄れていく暁の星を幾つか残す東の空は、今日の晴れを知らせるように茜色に染まっていた。

9・00に出発した列車内では同氣相求める一行21名の親交は深まり、他のツアーメンバーと共に和氣藹々としていた。

殆ど的人は満州に關係のある人達で、大牧場を經營していた人、満鉄に勤務していた人、それに開拓団や少年義勇隊の人が最も多いようであった。戦後の満州での悲惨な過去を回想する会話は尽きることはない。17歳の時から渡満し、22歳まで暮らしたという金沢出身の人が私を訪ねてくれ、懐かしい齊々哈爾（チチハル）の状況を聞かせてくれた。北満の大都市ながら依然として往時のままらしく、地の利の悪さであろうか。

不運と云うべきか、昭和20年8月、終戦の翌日の16日に招集になって齊々哈爾に入隊し、そのままシベリアに抑留された人もいたのである。戦闘ではビルマの死闘を戦った私達の苦しみには及ばないにしても、戦後の阿鼻叫喚の惨状を耳にすると、ソ連のあくどい仕打ちに対し怨み骨髓に徹するばかりであった。

虎がか弱い鹿に襲いかかったようなソ連、悪魔の如く暴れ狂ったソ連、それらの胸を衝くような苦しみは表現する術を知らない。酸鼻な体験をした人達の中で私だけが其の体験がなく、のんびりと懐古の旅をすることに引け目を感じていた。

静岡から参加した4人組の壮年諸君は戦争を知らない。しかし彼等は急須まで持参して特産の新茶のサービスを振る舞ってくれた。旅先まで地元の特色を溶けこました習慣は誠に情緒があり、強い印象を残したのである。

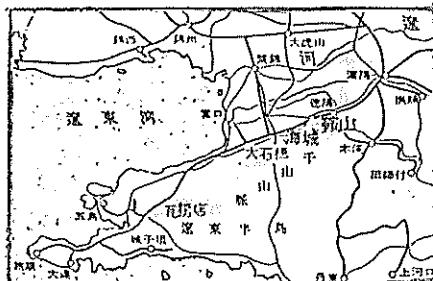
旅心は様々だと感じているうちに列車は「瓦房店」を通過した。（上図参照）植林された丘陵地帯は林檎の林、これが有名な大連林檎であった。葡萄園も整然と拡がって大連ワインを宣伝している。高粱が50cmほどに伸びている一方では、水田も耕作されて裕福そうな田園風景が展開していた。

明治37年5月14日、第二軍は遼東半島南部に上陸し、瓦房店の鉄道爆破に成功して露軍の陸路による補給線を遮断して、爾後の作戦を有利に導いた地点だ。早速地図を開いて位置を確認し、先輩の偉勲を偲んだのであった。

古戦場は自然に私を感傷的にする。沿線の緑は誰のために色を新たにしているのだろうか。ゆったりとした農村の中に物は変って星は移り、あの時から幾度の夏を迎えるとしているのか。私の眼は焔々として光っていた。

瓦房店の駅を通過すると、整理された用水路の一部がローマ水道橋のようになっていた。アカシア並木の一角では養蜂家の巣箱が整然と並び、老人が数十頭の赤牛を放牧している光景は流石に満州、慢々的な景観を楽しませていた。

日本の気候に似ているのか（大連の緯度は酒田）、馬鈴薯は今が盛りと花を付け、黒豚と鳥が仲良く餌をあさって其の間を子供が走り廻っている。旧態然としたこの光景は今も昔も変わらず、実に懐かしい眺めであった。



水田が一面に広がる中では田植え時期を迎えて、手植え作業の見える向うに、渺々とした海原が明るく輝いていた。洋々とそれに流れる渾河を注視していると、列車は「**大石橋**」に停車した。ここは遼陽と營口方面に岐れる交通の要衝で、明治37年7月、本格的な戦闘が行われた。（前頁地図参照）

日本軍は第二軍の5万6千、これに対する露軍は4万9千、東西30キロに及ぶ大規模な戦闘は、日本軍の優勢を知った露軍が北方に退却し、日本軍の追撃戦で呆気なく終っている。

私の微かな記憶では満州事変勃発に際し、関東軍が朝鮮軍に派兵を依頼した地点が大石橋であった。日清戦争でも激戦地の一つに数えられ、それだけ軍事戦略上の要衝だ。又、河口の營口は満州皇帝となった溥儀が天津から海路を通って上陸した港、地図を見つめて過去の戦跡を想起するのも、旅を興奮させる楽しみである。

正午になって列車の食堂で昼食となる。蕩々として広がっていた満州の曠野はすっかり変貌し、全く見透しがきかなくなっている。道路という道路にはポプラ並木が植えられてしまった。何処まで続くか判らなかった茫漠とした無限の広野、赤い夕日の満州はイメージを一変させてしまった。

まもなく列車は日清戦争の古戦場「**海城**」を通過した。山海關より進撃してきた清軍が、幾度となく海城奪還を目指したが其の都度撃退され、戦況を有利に導けなかつた要衝の地であった。

「**華安**」に13・00に停車。何十本の煙突が林立し、武漢・包頭と並ぶ中国最大の鉄鋼コンビナートの威容が延々と続いている。附近に豊富な鉄鋼石が埋蔵し、製鉄の他に火力発電所や化学工場、トラック工場等が盛んで、昔も今も変わらない活気を呈していた。（前頁地図参照）

使用する燃料は北方の撫順（瀋陽東方）から産出される豊富な石炭で、東北最大の工業地帯を形成している。1918年、満鉄の鞍山製鉄所として創立し、1933年には昭和製鋼所へと満鉄から分離吸収された。製鉄の起源は遠く漢の武帝（前141～前87）の頃から始まり、唐代に盛んになったという二千年の歴史を持っている。

1945年の終戦とともにソ連軍は主要施設を持ち去り、終戦時の能力の70～80%を喪失した。1949年の中共が成立後に大規模な再建課程に入り、現在は12万人に及ぶマンモス工場に発展したが、ソ連の火事場泥棒に対して中共が激怒したのも当然である。

「**遼寧**」に着いたのは13・30であった。一瞥すると紡績工場が盛んなようで、その外周は水田が限りなくつづき、夏々として馬蹄が響いた古戦場だったと思われない光景だ。

太子河畔の遼陽は漢代以来の重鎮の地、營口の港に通じる船便も就航し、東南に本溪炭田や製鉄所を有して今日も躍進している。女真族のヌルハチが清国の基礎を築き、1625年に遼陽から瀋陽（奉天）に遷都するまで都として栄え、満州民族にとって忘れられない土地である。

日清戦争の時に、遼陽の清軍を攻撃せんとした日本軍が、大本営に許可を申請したところ、補給の困難から却下され、鞍山を無血占領しただけで終止符を打っている。

日露戦争では一大会戦が展開された有名な古戦場だ。明治37年8月、日本軍の奥第二軍と野津第四軍は南方の海城附近を占領し、遼陽平野に迫って鞍山へと進んだ。

露軍総司令官クロバトキン大将はシベリアからの増援を得て、遼陽で一大決戦をする決意で此処を固めた。戦闘は激戦に次ぐ激戦が展開され、日本軍の猛烈果敢な攻撃によって、露軍は遂に奉天に後退した。

日本軍の兵力は13万4千、対する露軍は22万4千、その大軍の攻防戦の結果、日本軍の損害は戦死傷合計2万3千5百、露軍は約2万という死闘であった。

私が戦史を学んだ時代に最も印象深く感じたことは、世界の戦史上にも名高い遼陽会戦の「弓張嶺の夜襲」の成功であった。周到な準備のもとに実施された戦闘経過を回顧すると、私が大隊を指揮し、自らも瀕死の重傷を負ったビルマ・ナンパッカの夜襲と比較して、悔やむばかりである。

全く攻撃準備する時間的余裕もなく夜襲の強行を命じられた結果、41名の戦死者を出しながら失敗に帰した。その時の断腸の思いは脳裏から消えることはない。上級指揮官に対する怨みは今尚骨髓に徹し、戦史の研究の重大さを力説しておきたい。

遼陽会戦で想起される他の一つは、橋中佐の奮戦そして戦死である。我々が歌った軍歌の数節を掲げて軍神を偲ぶことにする。

1	遼陽城頭、夜は闇けて 霧立ちこむる高梁の 目ざめ勝ちなる敵兵の	有明け月の影すごく 中なる塹壕、声絶えて 胆おどろかす秋の風
2	わが精銳の三軍を 思い定めて敵将が 防禦いたらぬ限もなく	邀撃せんと健気にも 集めし兵は20万 決戦するぞと聞えたる
3	時は8月、未つ方 総攻撃の命下り 敗軍の将、いかでかは	わが籌略は定まりて 三軍の意氣、天を衝く 正義に敵する勇あらん
19	屍ふみ分け壕を飛び ようやく下る折りも折り またも中佐の背を貫きて	刀を杖に岩を越え 虚空を摩して一弾は 内田の胸を破りけり

橋中佐を祀る橋神社は長崎県小浜温泉にあり、私も参拝したことがある。今この遼陽を目にすると、古里の野山に響いた悲しみの挽歌が聞こえるようであった。

激戦の山野だけが弧影を悄然と遺す中を、列車は瀋陽へと出発した。今は死の嗅いは微塵もしない曠野は、野火の拡がるように続くものの、過去の血腥い跡は何処までも私の心の中を追っていた。

瀋陽（奉天）に接近するにつれて張作霖爆死事件、柳条溝爆破に端を発した満州事変、遠い昔の日露・奉天会戦などが懐古されてきた。蒼茫とした大陸の広野は往時と変わらず、無心の雲は清い流れに其の彩りを写し、胸の高鳴りは激しさを増していた。

相好をくずして一行の人達と懐古談に耽っていると、擦れちがう列車の音は軍馬のいななきのようにも聞こえ、狼に似た野犬の吠え声のようにも聞こえていた。ここで奉天会戦に就いて回顧してみたい。



奉天会戦

明治38年1月、満州派遣軍総司令官大山元帥のもとに、旅順を陥落させた乃木第三軍と、新たに編成された川村大将の指揮する鶴綠江軍が加わった。解氷期に先だって満州派遣軍の総力を結集し、奉天方面の露軍に決戦を挑む方針が決定された。

一方の露軍総司令官クロバトキン大将も亦、今次奉天会戦では決して退却することを許さずと厳命し、この会戦を最後の雌雄を決する決戦と決め付けた。

戦闘経過は省略するが、3月1日に攻撃開始した日本軍は3月5日夜現在の状況では、右図のような包囲態勢を整えていた。

その結果、3月10日（後の陸軍記念日）に奉天城を完全に占領し、戦闘は終止符をうった。

奉天会戦の日本軍の兵力は約25万で7万の死傷者を出している。一方の露軍の兵力は約31万で死傷者は6万、失踪者は2万9千、捕虜は2万1千人以上に及んでいる。

京都市の訓導（小学校教諭）、校長、市会議員を勤めた「直下飛泉」氏作の「戦友」の数節を掲げ、当時の悲惨な戦闘を偲んでみたい。

- ① ここは御国の何百理 離れて遠き満州の 赤い夕日に照らされて 戦友は野末の石の下 ② 思えば悲し昨日まで 真っ先駆けて突進し 敵を散々懲らしたる 勇士は此處に眠れるか ③ ああ戦いの最中に 隣りに居った戦友の俄かにハタと倒れしを われは思わず駆け寄って ④ 軍律きびしき中なれどこれが見捨てて置かりようか 「確かりせよ」と抱き起し 仮包帯も弾丸のなか ⑤ 折りから起る突貫に 友は、ようよう顔あげて 「御国のために、 かまわずに 遅れて呉れな」と目に涙 ⑥ あとに心は残れども 残しゃならぬこの身体 「それじや行くよ」と別れたが 永の訣れと、なったのか

沿線の古戦場を回看しながら、漸く列車は瀋陽駅構内を徐行していた。

ここで過去の戦争を振り返って感じることは、2000年の長い歴史のなかで、日本ほど戦争と内乱の少なかった国は珍しいと云うことであった。

近代国家が出来た此の500年間、イギリスは78回、フランスは71回、ドイツは23回も対外戦争を行った。日本は僅か9回しか経験していない。それも殆ど明治になってからで、ヨーロッパ列強に習って国造りに邁進した結果であろう。

内乱に至っては戦国時代だけがヨーロッパ諸国に匹敵している。日本では大変な時代だったから戦国時代と名付けた。最も内乱の多かった支那を除くヨーロッパでは、若し戦国時代と命名すると、全時代が戦国時代であったと云わなければならない。

歐米諸国は日本を指差して好戦国民と非難したことは我々も随分と耳にした。然し歴史は歴然とこれを否定している。本当に人間の唱える歴史は魔物だと言うべきだ。



瀋陽（奉天）

昭和13年に初めて渡満した頃は春秋に富み、胸を弾ませて将来に夢を馳せていた時代であった。春秋高くなった現在では過去を回想するだけに過ぎない。

高粱の繁った中に隠れると海の底に潜ったのと同様、影も形も見えなかつた沃野であったが、今はすっかり変貌してしまっていた。

無聊を慰めてくれた大連～瀋陽の列車の旅は終わった。14時に瀋陽のプラットホームに顔を紅潮させて下車し、古呆けた地下道を通って外人待合所に入った。

懐かしい想い出に胸を膨らませて駅前に立った。希望の時代から忘却の時代に生きてきた私、時は無常の歲月を刻んで胸騒ぎを覚えざるをえない。

あの時から52年を経過して昭和の御代も歴史の彼方へと去った。駅前広場は僅かに昔の面影を残し、赤煉瓦の駅舎だけは往時の姿で迎えてくれた。

人生は夢の如し。人生意気に感じた当時の黒髪は雪のように白くなり、志ならず遂に生涯を風の吹くままに転がって来た私にとっては、人生は夢のまた夢だと懐古しながら四周に眼を遣っていた。

駅を中心にして放射状に伸びる懐かしい道路、そこでチョコレートを売っていた白系ロシア人たち、その消息はと満目を開いて眼を向けると、万感こもごも到って胸に迫る思いがする。

悲劇の運命から無駄としか言いようのない人生を送り、人生は魔物であろうか、奇妙な偶然から温故知新の旅に出て、一瞬の華を咲かせたような感じがしていた。

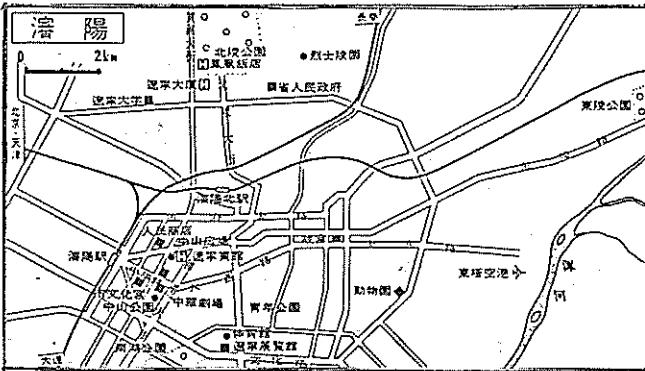
馬車（マーチョ）や洋車（ヤンチョ）の影を消した街を、バスは中山路（旧ナニワ通り）を進んで中山広場に出た。ロータリー一周辺に建ち並ぶ煉瓦造りの建物は殆ど満州国時代のもので、旧ヤマト・ホテルは遼寧賓館と名称を変えていた。

銀行、商社、学校の建っている街を足早に通過して南京街から北に進み、鬱蒼とした街路樹が続く黄河大街に入った。この先が北陵に通じる北陵大街である。

一行が2日間宿泊するホテルは北陵公園の一角を占める鳳凰飯店であった。素晴らしい名前だ。「梧桐に棲み竹実を喰い醴泉に飲み、羽毛は五色で声は五音と云う瑞鳥の鳳凰」、その名は我々を天子にさせるようだ。（地図参照）

新市街に聳える13階建ての鳳凰飯店は、近くに満州事変の発火点の「柳条溝」があり、旧満鉄本社も遼寧省人民政府に衣替えして威容を誇り、濃い緑に囲まれて絶好の環境であった。

ここで先ず瀋陽の概況を記載する。



瀋陽（奉天）の概要

東北最大の都市として政治・文化の中心、上海・北京・天津に次ぐ全国四番目の大都市で、人口は500万（市内人口は300万）である。市内には漢族、滿州族、回族、朝鮮族、蒙古族、錫泊（シボ）族など24の民族が居住している。

瀋陽の地は戦国時代に燕（首都は北京）の領土となり、それ以降は東北の中心都市となっていた。「瀋陽」と呼ばれるようになったのは元代で、瀋水（現在の渾河）の北岸にあるから其の名が付けられた。（支那では北を陽、南を陰という）

滿州族の清朝の前期までは東北一帯はステップの遊牧地帯であったが、太祖ヌルハチが清國を築き1625年に遼陽から此の地に遷都し、第二代皇帝「皇太極」の時に都を「盛京」と呼んだ。盛京とは滿州語でモクドン、隆盛の意である。

1644年（清朝第三代世祖の順治元年）、都を北京に遷してから陪都となり、1657年（順治14年）に奉天府が設けられられて、以降は「奉天」の名で呼ばれた。

その後、滿州の平野は封禁を解かれて牧地の開墾が許され、主として河北、山東省から漢民族が往来するようになり、奉天は其の中心として発達した。

清朝末期、ロシアは東清鉄道（長春～大連）を建設して旅順を固め、後日、日露戦争を引き起こした。奉天会戦（1905年3月）は日本軍の勝利となり、南満州鉄道の経営を中心とする日本の進出が見られた。奉天に於いても満鉄付属地の建設が此の時期に開始された。

清朝滅亡後、国民党による全国統一により瀋陽の名に戻った。しかし満州は地方軍閥の支配下に入り、その頭目である張作霖が爆死し、次いで柳条溝の鉄道爆破から満州事変の火蓋が切られた。その発火点が奉天近郊（現市内）である。

1931年の満州事変で日本軍の支配下に入った瀋陽は再び「奉天」となり、満州国の建設によって政治の中心は長春（新京）に定められた。しかし産業は奉天を中心として重工業や商工業の発展は一層著しくなり、人口は80万に達して日本人も多く居住し、満州第一の都市となった。

第二次大戦後、満州国は崩壊し、1948年9月の「遼瀋戦争」で勝利を収めた中共は、再度「瀋陽」の名に戻した。

以上は瀋陽の変遷の概要だが、私が初めて奉天に足跡を残した時から見れば、市内の様相は一変している。即ち後刻、訪れた故宮を中心にした奉天城が威容を誇っていた姿は消え去り、今では都市の建設と交通上の問題から城壁は除去された。

城内は元は内外二重の城壁に囲まれ、内城は一辺1.5kmの正方形で、高さは10m余、厚さは5m余の城壁であった。その内部は井字形の大街に貫かれて中央に故宮が巍然と建っていた。誠に残念である。

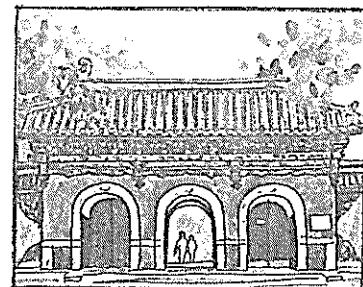
城壁の撤去は支那全土に及んでいるが、古代文化遺産を破壊した文化大革命は、実際に口惜しいことと云わなければならない。

北 陵

ホテルで小休止をとった後、瀋陽最初の観光は鳳凰飯店の指呼の間にある北陵であった。正式名は「昭陵」と称し、市の北部にあるから通商を北陵と呼んでいる。清朝

第二代皇帝の太宗・皇太極（ホンタイジ）と皇后のボアルジットを祀る陸墓で、1643年に着工して8年後の51年に造営された。北陵公園の入口で下車して玉砂利を踏みしめ、旅は運命の出会いだと鶴飛するような気持で歩を進めた。

至れり尽くせりの公園はよく整備され、満々と水を湛えた人造湖、それを取り巻く松や柏の濃い緑、その樹影が湖面に写る景観は陸墓公園に相応しい眺めだ。



ひっそりと足音だけが鼓膜に響き、ときおり耳に聞こえる松籟は心地よく、その静寂さは神気に満ちて自ずから襟を正させた。眼のとどく限りの眺望には際限がなく、陸墓公園の敷地面積は450万m²だという。

陵の正面には支那らしい石門が仰々しく立っており、広大な公園の各所から三々五々と参詣者が門をくぐつていた。石門の後方にある石段を登ると朱塗りの正門がどっしりと構え、其の内部は威風堂々とした厳肅な神域となっている。（上は正門）

参道は一直線に延々として伸びて、年数を経た松柏が蒼翠として繁り、参道の両側にはキリン、カイチ、ラクダ、馬、像、獅子の6対の石獸が墓守りのように並び、皇帝を表わす竜塔も立っていた。（右は石獸の像）



石獸の中のカイチは人間に代わって理非を裁く神獸だと云われている。石獸の様子や建物の配置は、唐の高崇と則天武后を祀る乾陵や明の十三陵とよく似ている。このことは滿州族である清朝が早くから漢民族化していたことが窺える。

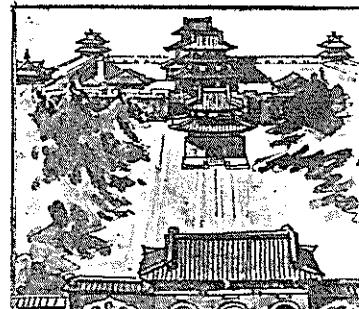
東西に向かって二枚の下馬碑が立てられ、満、漢、蒙の三文字で「親王以下の諸官吏、これより先は下馬のこと」と書いてある。一方ここにも皇帝を意味する龍を刻んだ塔があり、龍は特に画龍点睛というべきであろう。

石獸群を過ぎると二層の碑亭があり、その内部には石で造形した大亀の上に石碑が建っている。細かい字の碑文は不明だが、多分、皇太極夫妻の功績を称えたものであろう。

碑亭の後方は正紅門となつていて、門の上に朱塗り三層の「大明樓」の殿宇が燐然と聳え、他を睥睨するようにして境内の中心をなしていた。

正紅門の両側から高さ7mの城壁が其の奥を囲むように方城をなしている。禁内といふか禁中といふか、ここが所謂、最も神聖な禁裏である。

方城の最奥の城壁上には祭事が行われる主殿（隆恩殿）が建っている。この殿堂は神秘の中に神気が溢れて神廟は立入禁止となつてゐる。君主の統治権は神から授けられたもので、神聖侵すべからずと云うのであらう。（上は手前から正門、碑亭、大明樓、隆恩殿）



隆恩殿の後方、方城の外側が「宝頂」と呼ばれる「皇陵」となっていて、この小山のような陸陵の下に遺体が安置されている。

先祖や皇帝を祀る心は日本人の遠く及ばない支那民衆だが、不思議なことにも鉄条網を張り巡らしただけで、日本の天皇陵と違い、誰でも自由に周囲を散歩して参観が許されている。

陸陵の外周を歩き廻るうちに清朝創建時代の歴史が脳裏に浮かび、過ぎ去った歴史は夢のようである。累々とした墓丘は手入れもしない草木が雑然と繁り、ただ大きな嘆息を残すのみであった。

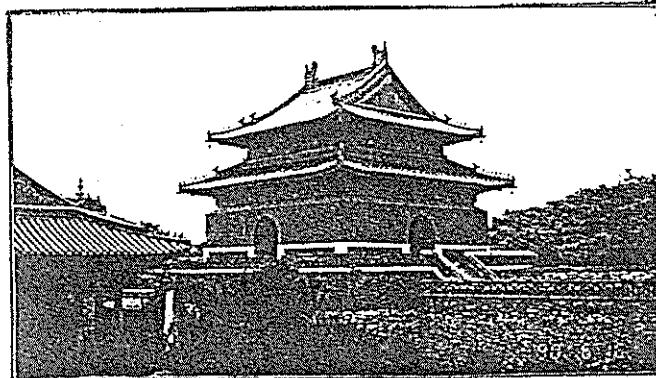
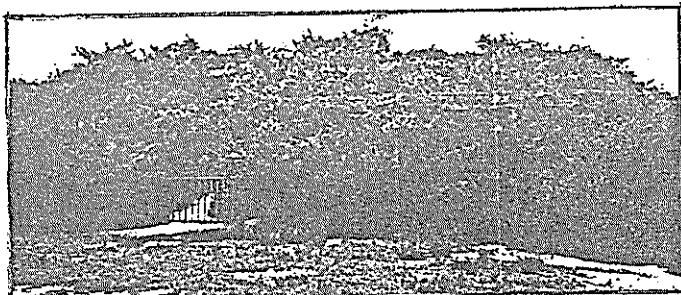
支那民衆の皇帝に対する心理は、我が国とは歴然と異なっていることは確かである。今日無名の人物であった者が、明日は忽ちにして中原に霸を称えることが出来る國柄、荒れに荒れた幽堂の墳墓は当然と云わんばかりで、我々の眼からすると実に痛ましい姿であった。（上は皇太極夫妻の御陵）

満州事変の発端となった柳条溝や北大營は、北陵とは指呼の間にある。太宗・皇太極は清朝発祥の淨域を戦火で侵され、どんなに杞憂したことであろうか。このような感想を抱きながら墓陵を去って公園に出た。

珍しく、よちよちと歩く纏足の老婆の足が眼に留まった。私の神経が麻痺しているのではないかと疑うほどだ。矛盾と葛藤の時代の遺物であった纏足、今では完全に此の世から無くなつたと信じていた私には驚きであつた。

小さい足が美人の条件とされて南宋の頃から流行した纏足は、清朝の初めに禁止令が出されたが効果がなかった。20世紀に入って旧習打破の運動と、婦人の自覚によって廃れた筈である。私の在満在支時代の老婆の中には未だ見られたが、半世紀も過ぎた現在、暗黒時代の悲劇な悪習が残っていたとは不可解である。

帰路、周恩来が宿泊したこともある古風な建物、「遊劇場」という飯店で夕食をとり、その日暮らしの路傍商人が煙草や落花生を、街角で売っている光景を眺めながら帰館した。（下は隆恩殿と墓陵）



6月17日 (日) 快晴 故宮

9・00にホテルを発ち故宮に向かった。(故=古の意)
旧日本人街であった春日町、旧満人町であった旧城内も日曜日とあって殷賑を極め、歩く群衆の数は世界的である。

市の中心部にある故宮は学生を始め、各種団体の参観者の波が押し寄せ、乾燥した大陸の空気の中を歩いていると、額に軽い汗を覚えるほど陽光は照り付けていた。何処の国でも同じように子供は嬉々として跳び回っている。

金城湯池を誇った奉天城の中心だった故宮は、清朝初代皇帝の太祖ヌルハチ(努爾哈齊)と、第二代皇帝の太宗ホンダイジ(皇太極)が1625年に着工し、1637年に完成させた皇宮である。清朝が北京へ遷都後、満州王朝の支配者が祖先の墓参の時、宿舎として使用された。

同じ清朝の皇城であった北京の故宮(明時代に着工)に比べると、敷地面積は12分の1と小さいが、北京の故宮を思わせる造りである。70以上の建物と300以上の部屋があり、黄色い瑠璃瓦の壮大な建築群は故宮に相応しい。

格調高い雄渾な正面玄関の崇政殿には、満蒙語で書いた古びた「崇政殿」の掲額があり、巡らされた欄間の各所には龍を彫刻し、流石に宮廷建築を表徴している。

(上の写真は絢爛豪華な崇政殿と掲額)

朱色と緑色の二色で彩られた色彩が、満州族と蒙古族を表現した初期清朝の建築様式ということであった。

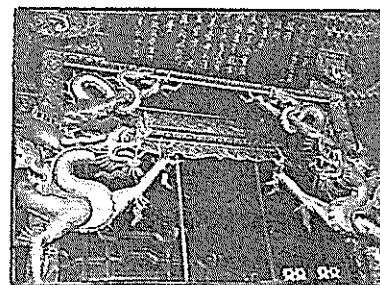
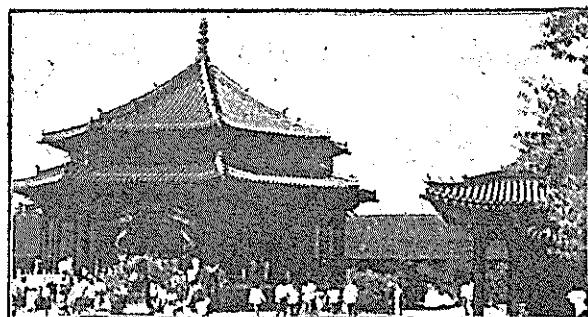
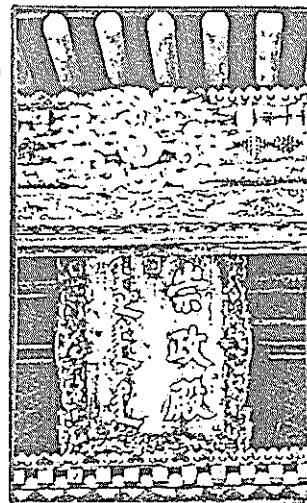
崇政殿を潜った中の景観は純清朝風の雰囲気が漂い、不思議な魅力が肌に感じてくる。広々とした宮廷園の中央に、八角形の二重庇の「大内殿闕」が、宇宙の中心来形容するよう建っている。ここが即ち皇帝の政務を執った殿堂であった。

(右が莊厳な大内殿闕と正面の龍)

数十本の朱塗りの柱が回廊をめぐらし、その正面中央の柱には実に見事な龍が巻き付いている。それは皇帝の威信を最高度に象徴し、内部の玉座もまた龍で埋めつくされて、正に竜堂と云うべきであろう。

【古い支那では鯉のことを六六と言っていた。その訳は鯉の背中にある鱗が36枚あり、66~36枚であるからである。

その鯉に対し竜は81枚の鱗があったと謂れ、そのために竜を九九と言っていた。九という数字は極致とか最高を意味している。



支那には「六六変じて九九となる」という諺がある。この諺の由来は黄河上流に龍門という急流があり、ここは流れが激しく、どんな魚でも激流を遡ることはできない。しかし優秀な鯉は此の龍門の急流を登り切り、その鯉が龍になったと伝えられてきた。

龍は貴を表わして其の最高が皇帝である。そのため龍は皇帝を表わすものに利用され、皇帝の旗、玉座の彫刻、衣服、飾りなどに龍を表わしたものが多い。又皇帝以外は龍を使用することが出来なかった。

清祖ヌルハチは長白山麓の馬賊の出身で、無名の英雄ながら女真族を統一して忽ち満州を支配し、其の子孫が明朝を破って天下に霸を称えた。このことから鯉が変じて龍になった人物と云えるのだろう。

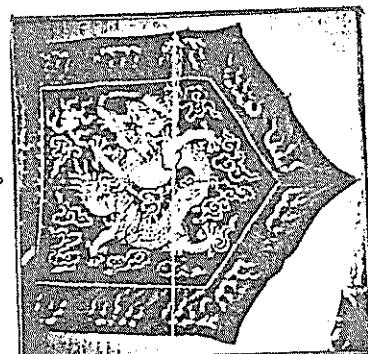
大内殿閣を中心にして東側には式典を行った「大政殿」が数棟ならび、現在は博物館として清朝の宮廷文物が展示されている。（右は大内殿閣の龍の柱）



満州の騎馬民族の軍服から、満州八旗の色鮮やかな各軍旗、皇帝が使用した宝印など、珍しい物ばかりだ。

1旗は7500人というから8旗で合計6万人、それがヌルハチの親兵だったのだから、当時としては威大な戦力で壯觀さが想像される。（右は軍旗の一つ）

大政殿の後方は皇后及び数人の妃の住居となっている。豪華な調度品から絢爛とした格天井など他に類を見ない見事な物ばかりである。



続く後方には宴会等に使用した三層の「鳳凰殿」の大樓が建ち、黃金色の「紫氣東來」の掲額が光彩を放っていた。紫は「幸」を意味して満州族の意気を高揚し、東方の騎馬民族の彼等が天下を制したことを誇っているようであった。

大内殿閣の西側には乾隆帝が増築した、歴代の重要書「四庫全書」を収めた「文瀨閣」が建ちならび、現在は売店等に使用されていた。

黄瑠璃瓦の各宮殿は万金を惜しまず投じたもので、雄渾壮大さは勿論のこと、総てが富貴榮華を極め尽くしている。然し乍ら、「満つれば欠く」ことは世の習いである。満州民族には英雄不滅の信仰が厚かったものの清朝も永遠ではなく、300年に満たずして崩壊した。ヌルハチの心中如何ばかりであろうか。

支那各地の故宮と異なっていることは、黄瑠璃瓦の先端が緑色であることだ。緑は蒙古の大草原を表現している。満州民族の祖先は蒙古族であるという証拠で、彼等自身もそれを自認しているのであった。これは温故知新の新知識である。

鳳凰殿の直ぐ横手に一本の棒が立っていて、その天辺に餌台が乗っていた。通訳の説明によると、ヌルハチが危険に曝された時、一羽の鳥が飛んで来て彼を助けたから、それ以来、毎日彼は鳥に餌を与えたと云う。神武天皇の金鶴の伝説と同じく、天命を知る英雄は凡人の我々とは何か違った点があるのだろうか。

一方、私の得ていた知識では、「愛新覺羅（清朝の姓）の祖先は長白山の東に棲んでいた。その傍の池で三人の天女が水浴をしていたところ、鳥が果を運んできて其の衣の上に置いた。天女はこの果を食べ、妊娠して子供を生んだところ、その子は生まれた瞬間に口を開き、自分で愛新覺羅と名乗った」という事であった。

何れが本当か判らないが、上手に伝説にしたり作り話にしたような気がする。古今東西の偉人や英雄は無知な民百姓に対し、自分が神のように見せ掛ける一手段であったに違いない。

故宮は往時、宮女が花のように溢れていたことだろう。時は移って世が変わり、今では美しくもない鳥が屋根に羽根を休めていた。絶世の美人も死ねば黄土となるだけで、将に世は無常だと感じながら故宮を後にした。

張学良旧居

故宮の樹木は年々昔ながらの縁に萌え、創業は安しと云われるが、並大抵の事ではなかったと思いつつ、遼寧省博物館に案内された。意外にも博物館とは張学良の旧居であり、彼に関する写真が展示されるだけであった。先ず彼の概略を述べてみる。

『張学良に就いて』

彼は張作霖が23歳の時、第一夫人との長男として1898年（光緒24、明治31）に生まれた。蒋介石の北伐によって北京を追われた張作霖は、昭和3年6月4日（1928）満州に帰る途中、奉天附近で日本軍のために爆死した。そして蒋介石の国民革命軍は北京に入城し、北伐は完了した。

国民政府は今までに列国との間に結んだ不平等条約の破棄を宣言したが、これは次第に高まる排日運動を背景に、国民政府が示した対日攻勢の一つであった。

このような状況下の北伐完了後の満州では、誰が何のように国民政府との関係に於いて、張作霖の後継者になるかという問題でゴタついていた。張作霖の御曹司の張学良は候補者の最右翼であった。しかし他にも有力者が存在し、学良はこれらを謀反罪の名で銃殺した。

この時の形勢を見た学良は、この際は日本と提携することが満州の王者としての地位を確保し、同時に長城線まで迫ってきた蒋介石の勢力から、満州を守る唯一の道だと考えた。

学良は日満政治経済の全面的合意、満鉄（日本側）と満州四鉄道（学良側）の合併、満鉄付属地の撤廃（付属地とは長春～大連間の鉄道線路を中心にして幅62mの帶状地帯が、行動の自由が認められていた）を条件とする日満合作を提案し、その工作費として四億円を要求してきた。

一方、この間に蒋介石は学良の周辺にドルをばらまき、執拗な懷柔工作を続け、同時に学良に対し国民政府への服従を迫った。やがて学良は日満合作の中止を通告し、蒋介石から東三省（奉天、吉林、黒竜江省）の東北辺防軍司令官に任せられ、日本と決別して国民政府になびいた。

その後の学良は対日態度は強硬一点ばかりであった。このような態度を見た当時の日本の田中首相は、学良が蒋介石に服従したとみて、学良の説得工作に当った。しかし遂に満州の天地に国民政府の青天白日旗が翻った。

昭和3年末に突然、学良は中ソ管理下にあった東支鉄道の権利を強制回収したのを契機に、翌4年前半にかけて中ソ関係は悪化の一途を辿り、7月に国交を断絶して8月から武力衝突となった。

紛争の結果、ソ連極東軍の優勢のうちに双方の間で戦闘の中止、東支鉄道の現状復帰などを申し合い、モスクで正式会議をもった。

しかし支那側による東支鉄道買収問題をめぐって双方の意見が対立し、翌年9月には満州事変の勃発を迎えた。

(右の写真は若き日の張学良)



満州事変は拡大して満州各地は日本軍の手に陥り、東北辺防軍司令官の学良は、奉天を失ってから錦州（奉天～山海關の昼間）に仮政府を設け、対日反抗の拠点とした。

関東軍は錦州を爆撃すると同時に、対日暴動事件が起った天津軍（支那駐屯軍の日本軍の通称）の救援を名目に、錦州に向かって遼河を渡河した。錦州を通過する北寧鉄道は、奉天と北京を結ぶ重要な幹線で、イギリスの利権鉄道であったため、日本に対する国際世論は一段と悪化した。

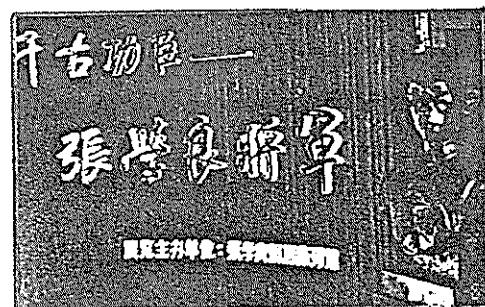
錦州作戦は昭和6年12月に開始されたが、このとき学良は何故か自発的に撤退したから、関東軍は事変勃発後5ヶ月で熱河省（現在の河北省東北部、首都は承德）を除く満州の大部分を占領した。

満州事変後、地盤を失って下野外遊した学良は、帰国して1935年に蒋介石から西北剿匪副司令に任命された。昭和11年12月、蒋介石が共産軍の掃討作戦を督励しに行つたところを、学良は彼を西安で軟禁した。これが有名な西安事件である。

このため学良は解職されて10年の禁固刑に処せられた。支那事変中は貴州に監禁され、1948年、蒋介石と共に台湾に渡って新竹、高雄などに移され、60年に漸く釈放された。本年90歳の誕生日を迎えたと新聞は報道していた。

『居所の状況』

博物館の正面に3階建・煉瓦造りのスマートな建物があり、遼寧省文物考古研究所と考古学会とになった。その建物の右の方に「千古功臣—張學良將軍業績展覽」と掲げて学良の展示室となっている。



部屋の入口に学良の胸像が据えてあり、此處でも「千古功臣—張學良將軍」の表示が目に留まった。一体誰に対し功臣だったのか、中共の歴史は眞実を伝えているのか、甚だ疑問である。（上は胸像と表示）

室内は写真の展示ばかりであった。彼の学生時代、副司令時代、それに蒋介石個人の写真までがあり、特に注視させたものは西安事件の蒋介石と並んだ写真である。

西安郊外の華清池は、唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛した温泉で有名である。この地の貴妃池の傍に、学良が蒋介石を幽閉した「捉蔣亭」が、開放後に建てられた。

私も此の地を訪れたことがあり懐かしい所だ。蒋介石を幽閉した西安事件が起らなかったならば、支那の状態、日支関係、世界情勢にも変化を来たした事は確実で、中共は支那を混乱させた事を功臣と称賛しているのであった。

驚いたことには、「張学良將軍の90歳の誕生日を祝う」と題した数枚の書が掲げてあった。奉天出身と云うだけで祝辭を書いた訳ではあるまい。西安事件を契機に第二次国共合作が成立したが、日支戦争では日本軍は蒋介石軍との戦闘が主体で、共産軍との戦いは極く一部であった。又、国共両軍同士も交戦していた。

終戦後の内乱で共産軍が天下を制したことと、西安事件とは直接には無関係であり、千古の功臣とは蒋介石を誹謗するための擬装手段に過ぎないようだ。

学良を非難中傷するものは一物も見当らず、私としては嘆息を呑むばかりであった。元来、学良は蒋介石に隸属し、満州を去った彼は蝸牛角上の争いであった共産党とは、氷炭相入れない仲であり、共産軍とは戦闘を続けた敵対関係にあった。

「虎を例外成らず、反って狗となる」と云われた学良を、こうして賞賛する魂胆は、蒋介石憎しの何物でもないだろう。邪を挫き正を助ける侠勇の血を受けた学良は、満州を取られた現在、何のような心境であろうか。

日本には「死者に鞭打たず」という思想がある。支那の儒教的な考え方では、あばいて遺体を鞭打ったことは、歴史の中に数多く残っている。最近では文化大革命にも其の例が多い。

日本では死者は凡て仏様だ。死者には相応の敬意を表し、それを辱める言動は堅く禁じていることは、日本人一般の通念である。それを考えると、黄泉の人となった蒋介石を憎み、反面教師のように張学良を功臣とする思想は納得できない。

ひっそりとした物音一つしない静寂の中に、無限の幽咽のように展示されている学良の不運に対し、一掬の涙を流す心地で室を出た。（写真撮影禁止は残念であった）

皇姑屯駅と張作霖爆死の鉄橋

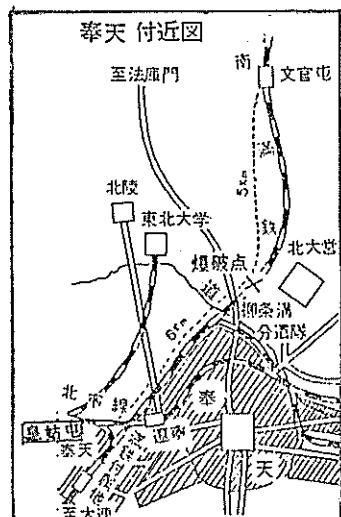
午後の観光予定は自由市場と舍利塔の見学であった。私には何ら興味はなく、同室の石田晋一氏を誘って単独行動をとり、皇姑屯駅の張作霖爆死地点、柳条溝、東陵の3ヶ所を訪れ、懐古の旅としたのである。

ホテルを後にしたタクシは南進すること約2km、瀋陽駅北方の皇姑屯駅前で停車した。姑は「しゅうとめ」の意であるから、何れかの皇帝の姑が棲んでいた由緒ある所かも知れない。

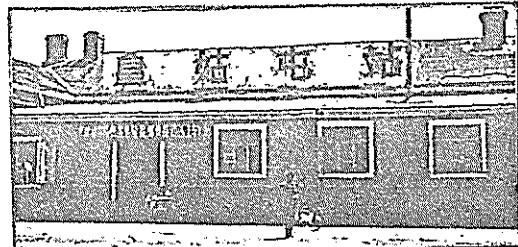
北京から張作霖を乗せた特別列車が奉天駅西方、満鉄線（新京～大連）と京奉線（北京～奉天）の立体交叉する地点を通過した瞬間、関東軍の一部将校の陰謀によって爆破され、張作霖は即死した。

時は昭和3年6月4日午前5時23分（1928）であった。世界を驚嘆させたニュースは昭和初年の大事件として、小学生であった私の脳裏にも記憶されている。（上の要図の下西側が皇姑屯駅）

この爆死事件の発生した交叉点の駅が皇姑屯駅である。姑息な手段を使った破天荒の謀略事件は、当時は一般に関東軍の仕業とは公表されず、後日になって其の秘密が暴露された。（詳細は後記する）



慨世憂國の志士と云われた人達の行動は選民思想の最たるもので、何が壯挙であろうか。今ここに眺める皇姑屯駅は既に半世紀を過ぎ、惨酷だった過去を忘れたように、人影もなく悄然として寂しく面影を留めていた。（右は小さな皇姑屯駅）



駅前の直ぐ左手に見えたのが爆破された鉄道橋である。ガード下は舗装された一般道路が走り、分厚いコンクリートの橋脚は不気味な姿を現わし、無言の証言のように立っていた。これが時代の分水嶺となつたかと思うと幽憤せざるを得ない。

紅蓮の焰を吐いた鉄道橋、それが哀しく陽に照り出されて胸が詰まる想いがする。運命の神は時には残酷と云うべき無謀な悪戯を許したのであろうか。（右は爆破された鉄道橋と私）

しばらく眼を血走らせ、頬の筋肉を引き付けて凝視しなければならなかつた。

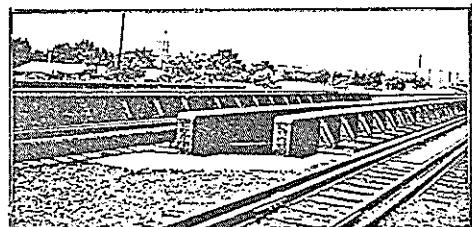
思わず唇を引き締めながら雑草の茂った土手を這い登つた。青い空の拡がつている中に複線になつた四条のレールが一直線に伸びてゐる。静寂また静寂我れも周囲も声なく、薄氣味の悪い想いを抱きながら、血の氣のない顔をしてぼんやりと立つてゐた。（右は現在の線路）

昭和初期といえば世界恐慌の余波が、うねり寄せてゐた時代であった。歴史という魔物は新天地に活路を求めさせ、満蒙の風雲は窮迫を告げた。慌ただしい緊張した空気が満州を鉛板のように圧迫し、遂に威望赫々たる奉天大元帥の張作霖を爆死させてしまった。



これ以来我国は戦争という滻壺に、まっしぐらに飛び込んだことは多言を要しない。矛盾と葛藤に満ちた人間社会、特に第一線の戦場に立つた心境は、一種の野獸性を帶びることは事実だ。然し乍ら國の大事は、結果が問われるこども忘れてはならない。

日本の運命を決した此の事件から早や6年を経過した。この機会に張作霖の生い立ちから、爆死事件に就いて記述することにした。



張作霖の生い立ちから北京入城

満蒙の最高権力者になった張作霖は1875年（光緒元年、明治8年）、時の奉天省海城県の遼河西方の片田舎で呱々の声をあげた。

祖父は支那本土の漢族である。当時の支那は麻の如く乱れ、離合集散の常なき軍閥抗争の時代で、支那本土から關外（万里の長城外の満州、蒙古）への流民が多く、祖父は満州に渡り、運命を開拓しようとした流民の一人であった。そして鍼を握つたまま窮死した。



作霖の父も亡父の志を継いでよく働いた。彼は文字を知らなかったが、気概だけは満人に対して子供の時から一歩も負けていなかった。関内からの流民を見下げる満人に憤怒を覚えていた父も、旅先の知人の家で頓死した。そして棺桶も買えない貧乏な暮らしであった。（前頁の下の写真は張作霖）

三男であった作霖の悪戯は大人も度胆を抜くほどで、小児の智恵では出来ない悪戯小僧であつたらしい。作霖は満州で生まれた三代目であったから、「三代目は土地っ子」という諺もあり、満州人と云えるが血筋は漢人であった。

父は早死にして母は同じ村の獸医と再婚した。その時、母親は子供達に向かって「祖父も父も優れた気性の人だった。人々のために隨分と骨を折った。お前達は張家の名譽を汚さず、偉い人になるように自重せよ」と言ったという。この母にしてこの子ありである。

作霖が16歳になった時、余り用事のない義父の家で無為の日々を送ることが苦痛になり、近村の旅人宿に奉公することになって20歳まで辛抱した。この間に彼は文字を習い本を読んだ。他日、20世紀の偉傑としての人間学は、出入りする旅人の口から教えられたと言う。

日露戦争後、彼が巡防隊統帶から27師長へと矢のような速さで出世したのも、人間生活の機微に達したからで、これらは旅人宿での体験の賜物であった。

作霖は自分も機会を待って馬賊になろうと思うようになった。だが彼が馬賊集団に身を投げるにはクッションを置かねばならなかった。それは日清戦争の勃発である。

支那では常備軍のほかに臨時傭兵が始まった。とりわけ満州では手近ということから、青年は殆ど強制的に軍隊に徴集された。又これを機会に出世の糸口をつかもうとして気概のある壯丁が応募した。作霖青年もこの部類の壯丁である。

それに月給は命を的の仕事だから3円であった。彼は片田舎の旅人宿の番頭の職を投げ捨て、鉄砲をかついで飛び出した。彼は馬に乗れるから馬隊に編入された。

馬賊の親分であった馮麟閣は、日本なんか問題ではないと豪語していた。しかし小国の中でも日本が支那に勝ってしまったから、義父の家にかえって放心したように、ぶらぶらしていた。

彼はやがて、人間の仕事は考えているより実行が先だ、実行以外に運命の開拓はないと考え、彼は決心して馮麟閣を訪ねた。そして決心が決まったから馬賊に投げる手引きを願い出た。

紹介された董大虎は遼西一帯にかけた馬賊の大頭目で、初対面の作霖に「銃殺四ヶ条」の厳しい掟を示したが、即座に彼は厳守を誓った。やがて作霖は吉林省を根拠とした馬賊の頭目「李治生」の部下となり、李治生が死亡すると繩張りを拡大して頭目を受け継ぎ、彼の馬賊あだ名の「白馬張」は全満に轟き渡った。

彼は東三省總督に認められて榮進したが、日露戦争の際、ロシア側に情報や物資を提供した疑いで、日本軍に逮捕されたことがある。運命は不思議なもので銃殺寸前のところを、時の大本營參謀・田中義一中佐（後の太將・首相）によって助命された。

作霖は生れながらにして馬賊生活の条件を体得していた。克己と忍耐と勇気と質実とを、精神的にも肉体的にも刻み込んでいた。彼は他人の難儀や喜びに赴くことを忘れないかった。こうして広く世の中に交際を求めて行ったのである。

満蒙の野を駆け巡った彼は、風雲に乗じて天下を料理する氣概を持っていた。彼は

広寧県の中安堡という所に根城を構えた。住民の信望を集めて地域一帯の用心棒的な存在になり、彼がいる限り他の馬賊が襲撃することができないと、土民から隊長としての取扱を受けた。

作霖はこの土地で最初の結婚をした。相手は土地の富豪の娘で、この第一夫人から長男の学良が生まれた。長子誕生で張一家は万々歳であったが、当時の国家はロシアに一杯食わされた格好であった。

満州を中心とした北方の天地は風雲ただならぬものがあった。この動乱を巧みに縫った張作霖は上昇の一途を辿った。そして馬賊から足を洗い、名実ともに満蒙の王者として君臨することになって行く。

清朝が滅んで袁世凱の帝政運動が表面化した時、彼は難局をくぐり抜け袁世凱の死後、着々と東三省（満州）の統一を成し遂げた。そして彼は更に「隴を得て蜀を望む」式に閥内（万里の長城の内部）に野望を抱いた。

清朝復活反対派の直隸派と、清朝復活はの安徽派との戦い（安直戦争）を利用して、作霖は直隸派と提携しつつ万里の長城を越え、閥内の支那本土に進出して1920年（大正9年）に北京に乗り込んだ。

しかし、ほどなく奉天派の作霖と直隸派の提携は分裂し、1922年に第一次奉直戦争が起った。袁世凱の死後、日本政府は清朝復活派を援助して日本勢力の伸張を図ったが、安直戦争によって清朝復活派の没落後は、張作霖を援助して満州の特殊権益（日露戦争後の権益）を確保しようとした。

野心満々であった張作霖は満蒙地区の支配権だけでは満足せず、1924年の安直戦争の時を利用して大軍を繰り出し、復活反対派の直隸派の討伐を企図した。そして直隸派の馮玉祥が奉天派に寝返ったことから直隸派は潰滅した。

張作霖は北京に威風堂々と入城して実験を握り、意気天を衝いたのであった。

北伐と張作霖爆死事件

北京の実勢力を完全に手中におさめた張作霖は、1926年（大正15年）12月、北京に於いて大元帥就任式を挙行し、安国総司令として南方の蒋介石の率いる国民革命軍との対決となった。支那における軍閥の勢力争いは満州事変まで続くが、戦禍を受ける民衆こそ、全く迷惑至極であった。

孫文は1920年（大正8年）の秋、廣東に国民党の軍政府を再建してが、軍閥の反撃にあって上海に逃れた。1923年1月、国民党は再び廣東を回復したが、孫文の指導のもとに支那共産党と共同する革命的同盟に変わって行った。

廣東の革命政府は愛國の精神に燃える反軍閥的軍隊の指揮官を養成するため、新進将校の蒋介石を校長とし、共産党の周恩来を政治主任とする黄埔軍官学校を創設した。

1925年3月12日、孫文は北京に於いて肝臓癌で死亡した。「・・・現在革命は未だ成らず」という有名な遺言を遺した。

孫文の辛亥革命は蒋介石によって継続され、当時、袁世凱に代わって張作霖が北京に大清皇帝の夢を抱いて蟠居していた。日本の田中義一内閣の対支政策は、蒋介石を助けて張作霖を満州に引き戻し、保境安民、日本の傀儡満州王として安んじさせようとした。

蒋介石を総司令とする国民革命軍は1926年7月、勇躍して北伐の途についた。この機会に北伐に協力して組織の強化を狙った共産軍は、党員を各地方に潜伏させ、33歳の若き毛沢東も湖南で農民の組織化に努めていた。

北伐の国民革命軍は破竹の進撃を続けた。その北上に備えて日本の田中内閣は、現地居留民保護の名のもとに青島に出兵した。これが第一次山東出兵である。これに対し蒋介石の南京政府も張作霖の北京政府も抗議した。

国民革命軍内では右派の蒋介石と共産党とは水と油であり、蔣は革命司令部を南昌に置き、一方の左派は武漢を根拠とした。ここで蒋介石ら右派は南京に反共右派の政府を樹立したから、南京、武漢の両政府が併立した。その後、北伐を一時中止して蒋介石は下野した。

然し乍ら、南京政府と武漢政府の合併が成立して蒋介石の霸権が確立し、国民革命軍総司令に復職した蔣は独裁的な指導体制を強化した。そして1928年（昭和3年）4月、北伐再開を決行して全軍に総攻撃を命じた。

北伐の主眼は北方の実権を握り、北京政府におさまっている張作霖を打倒することであった。北伐にあたり蒋介石は外国の干渉は内戦を長引かせるから、外国が北方軍閥を支持しないように呼び掛けた。

ところが田中内閣は居留民保護の名目で、第一次山東出兵の時よりも大兵力を派遣した。北伐軍が山東などの華北地方に勢力を及ぼすことは大きな脅威であり、満州にまで影響するからであった。進撃してくる北伐軍の北上を少しでも鈍化させ、張作霖軍の立ち直りの機会を与えることが、山東出兵の狙いであった。

山東省の済南において日本軍のために北上を阻止された北伐軍は、迂回作戦をとらざるを得なかった。しかし「打倒日本帝国主義走狗的張作霖」「打倒封建軍閥張作霖」などの旗を掲げながら、北伐軍は北京を目指して進撃した。北伐軍の優勢によって奉天派の軍は敗退し、張作霖の失脚はもはや時日の問題となった。

田中義一内閣は奉天派の敗退に際して重大声明を発表した。「満州に於ける日本の権益を擁護する必要上、戦乱が満州に及ぶ場合には日本政府は満州の治安維持のため、適当にして且つ有効な措置をとる」と。

これと同時に、奉天軍の北京撤退と満州確保とを張作霖に勧告した。又、奉天軍が満州に敗走する場合には、奉天軍のみならず、国民革命軍も共に武装を解除する。武装して長城以北に入ることを許さずと申し入れた。

当時、日本の対満政策として懸案となっていたのは鉄道問題であった。張作霖は日本の在満権益駆逐の手段として、奥地居住の日本人の駆逐、商工業の妨害などの方法をとつていたが、中でもアメリカの後押しで満鉄包囲作戦を進めていた。

張作霖の満鉄包囲政策は、満鉄を彼等の新設する並行鉄道で包囲し、満州の特産物を其の並行鉄道によって葫蘆島（錦州の西南）に運び、大連の繁栄と満鉄の利益を奪おうとするものであった。

日本は並行鉄道敷設に抗議したが、張作霖は日本の抗議を顧みず、一部は1927年（昭和2年）に開通した。このような鉄道問題が遂に張作霖爆死にからんでくる。

昭和3年5月15日、北伐軍の北京攻略が旬日に迫っていた時、満鉄総裁が北京に乗り込んだ。それは日満経済連盟と日満攻守同盟の二項目で、張作霖は日本に対する疑心暗鬼を一擲し、これに同意した。

即ち支那を閔内と閔外とに二分し、閔内を蒋介石の国民党に、閔外を張作霖に統治させようとした。「分離して統治する」と云うことは、帝国主義諸国が東亜を侵略する課程における戦術であった。

支那は人口が多く資源が豊富で、これらが統一したら大変な国力になる。隣の日本としては分離している方が望ましい。甲という政治勢力が強いと見た時には、乙を援助して甲を叩く、このような戦略であったようだ。

張作霖にとっては奉天に引き揚げることは不本意であったが、戦況の現実と日本の堅い決意をみて、もはや北京残留是不可能と悟り、昭和3年6月1日午後、彼は諸外国の北京駐在使節を招いて別離の言葉を述べ、3日早朝最後の大元帥としての威儀を整え、軍楽隊の吹奏するうちに特別列車で北京を後にした。

張作霖爆殺計画の直接の指導者は、関東軍高級参謀の河本大作大佐である。彼は「張作霖頼むに足らず、政府の遲疑逡巡は国策を誤るもの」と断じて、計画を極く少数の腹心にだけ打ち明け、其の実行方法を工夫していた。

即ち、工兵隊をして極秘裡に爆薬を陸橋脚上に仕込ませる一方、あらかじめ用意していた支那人二名を、現場附近において「拳動不審」と称して刺殺しておいた。二人の懷中には手紙をひそませ、彼等は南方側（蒋介石）に關係あるもの、即ち張作霖爆殺は南方便衣隊の仕業であるように工夫したのであった。

河本大作参謀の爆殺計画に就いては、関東軍司令官や参謀長らが何の程度か判らないが、閑知していなかったと言われている。兎に角、日本側の謀略であったことは事実で、ごく少数の者のみが閑知していた。

張作霖と同じ列車に乗車していた奉天特務機関の儀我少佐さえ、突然の轟音に訳も分からず飛び降りて命拾いをしたという。

現場における爆破作業の手際は鮮やかだった。狙いは誤らず、張作霖の乗った展望車とこれに続く食堂車の中間に爆薬を破裂させ、火災を引き起こした（右上は爆破の瞬間）。

展望車は車輪と床だけを残して屋根や窓は飛び散り、一見難破船のような惨めな姿であったという。

しかし爆破時の列車速度が10km以下の緩速だったため、車両は横倒しもならず、後車が乗り上げることもなく、やや西南に傾いただけだった（右下は爆破された車両）。

張作霖は即死に近い重傷だったが、素早く身柄は城内に引き取られ、単に負傷と発表したのみで、19日の死亡公表までは一切の他人を近づけなかった。それは此の事件が日支両軍の衝突を誘発することを恐れて、奉天省長のとった機敏で賢明な処置であった。

当日、奉天駅には張作霖を出迎えのため、日本軍人の率いる奉天模範隊と黒竜江軍が対峙していたほか、奉天側の警戒兵は暫くであったが機銃を盲射した。

関東軍は各方面から疑惑の目で見られたが、あくまで爆殺の犯行を否定した。しか



し偽装用の支那人浮浪者のうち一人が逃亡したことは、関東軍にとっては痛かったようだ。こうして関東軍の頬かぶりは次々と剥ぎ取られて行った。

同時に第三国の非難の声が高まり、議会でも内閣の責任が鋭く追求され、遂に天皇もこれに関連して田中首相不信の意を表明し、田中内閣は総辞職した。

田中首相は日露戦争の時（当時は中佐参謀）、張作霖を銃殺から助け、彼の支持者だった田中首相は其の意に反し、張作霖爆殺事件によって失脚したことは皮肉である。

事件後の昭和4年5月14日、責を負った河本大作大佐は退役処分となった。確かに爆殺の直接の責任は河本大佐であった。しかし、それが関東軍全体が主張した奉天軍の武装解除、張作霖下野策の代案のように考えると、関東軍全体のみならず、日本政府の責任とも言えるだろう。

若し政治が健全で優れていたならば科学技術を極度に振興し、狭い日本列島でも国民が生きられる方策をとっていたかも知れない。これが出来れば張作霖爆死事件に起因した満州事変も、起す必要がなかったのではないだろうか。歴史は魔物である。

柳条溝と北大営の跡

陽ざしを照り返すコンクリート道路と建物、街路樹の深い陰り、その市内を皇姑屯から逆戻りするようにタクシは北に向かった。悠然と移動して行く夏の雲が空一面を覆っていた。

通訳の路鵬さんは柳条溝の爆破地点に案内する告げた。昭和13年の渡満時に車窓から眺めた記念碑が想起され、胸の鼓動は激しく高鳴り始めた。根元から三条に分かれ軌条のように見えていた記念碑、これは完全に取り除かれているだろうと、手に汗を握り車内で足踏みしていた。それほど深い感動であったのである。

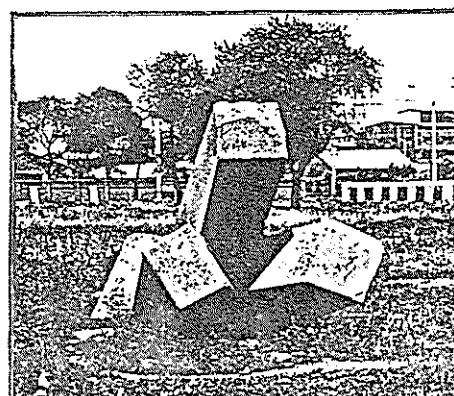
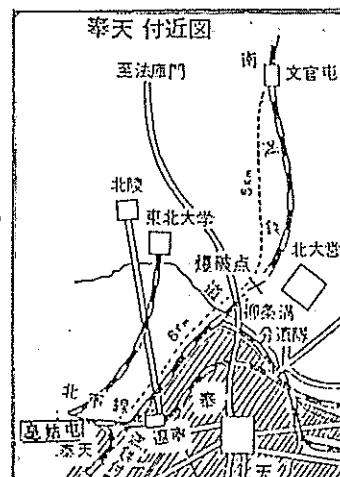
瀋陽郊外の幽寂とした街を進み、立体交叉した道路を潜った直ぐ左手に広い原っぱが見えてきた。白いコンクリートに鉄条網で囲んだ所で、通訳は「此処です」とドアを開けて降り立った。

愕然また愕然、寂寥とした草っ原の中に巨大なコンクリートの塊が遺っていた。悲愁に満ちた記憶の深層から鮮やかに蘇ったあの爆破記念碑だ。

ひっそりかんとした門前雀羅（羅は雀とりの網）を張ったような原っぱ、誰も寄り付く人影もない。（右は横倒しになった記念碑）

悲風千里より来たる、私が直立して立ったあたりは寂しく、我が心も悲しみで一杯だ。もの悲しい風は遙か遠いところから吹いて来て、懐古とは悲しいものである。

全く真実を知らされず、一途に希望に満ちた当時が走馬灯のように脳裏を掠めていた。



武威堂々として仰々しく立っていた記念碑、哀れにも今は南に向かって横倒しになっていた。眼を向けた一瞬、肺腑をえぐられるような思いであった。

「一鳴驚人」というか、雌伏していた当時の日本が、奮い立って世界を瞠目させた柳条溝、今では世界を見抜く慧眼と卓見が問われるかも知れない。しかし才氣縱横とした当時の我々にとっては、五臘六腑から喝采を呼び、自己陶酔するように虚驕の気が、全国民に拡がって行った記憶は鮮明である。

人生70年を体験した今日、人生は博打だと思うようになった。石橋をたたいて渡る慎重な態度、性質であっても、一生に何度かは目をつぶって未知の世界へ突進する決定的瞬間はあるものだ。同様に国家にもあったのでおろうか。勿論これは此の事を肯定するものでなく、事件から得た私の人生訓に過ぎない。

記念碑の塔の前に『遼寧省瀋陽市文物保護単位—柳條湖「九一八」事変—炸弹碑』と書いた石碑が立っている。来年には此の広場に記念館を建設する予定らしい。

(日本では柳条溝と云っているが、支那側では柳條湖である。地図を見ると直ぐ近くに柳條湖があり、湖が正当である)

爆破した後、北大営を攻撃した川島中隊は、鉄路の東側の深い溝に遭遇し、渡ることが出来なかったと記録されている。しかし現在は上の写真のように埋め立てられ、立派な鉄道線路とアパート群が、過去を忘れたように姿を一変していた。

なんとなく胸をつく別離の情は纏綿として尽きない。硝煙の臭いが未だ残っているような錯覚に懐旧の想いを抱き、再び相見えることもない柳条溝よと、心の中で一條の涙を流して立ち去った。

『北大営』

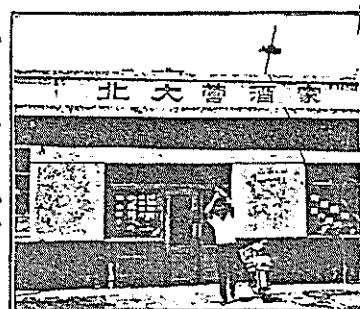
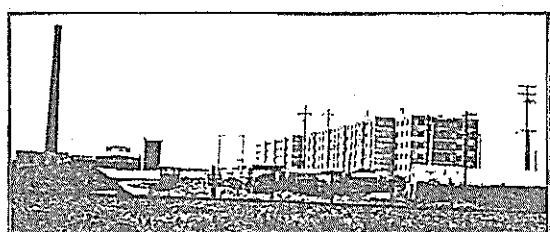
通訳に依頼して北大営の旧兵舎を見たいとタクシを廻した。前頁の地図にあるように爆破地点とは指呼の間である。記念碑のある広場の直ぐ北側の角に「北大営酒店」と書いた看板が眼に留まった。

間違ひなく北大営の兵舎は近いと判断し、遲疑逡巡することなく凹凸の激しい田舎道を進んだ。地理不案内の運転手も通訳も初めてらしく、自信のないまま私の言う通りに走った。

時折、兵隊の姿も散見され、日曜日の外出だと意を強くして更に前進を続けた。しかし、北大営〇〇倉庫などと北大営を表示した看板は見えるものの、一向に兵舎らしい建物はない。凡て汚い田舎の倉庫ばかりである。

行けども行けども兵舎は見えず、時間が経過するばかりで引き返した。帰路、初めに見えた「北大営酒店」の前で停車し、記念にとカメラを向けた途端、酒屋の主人は忿然として眼を爛々と光らせて大声を発した。

若い主人は事変の経過を知っているのか、読心術で私等の腹の底を読んでいるのか、怒り飛ばした。何とも言えない衝撃であった。通訳の話では無断で我家を撮影した事が原因で、私等も反省すべきである。(右の写真)



北大営酒店では後味の悪い思いであったが、今の我々は決して中国人を見縊る心は毛頭ない。若しも彼等自身が自分たちを卑下しているのであれば、その心も一掃して貰いたいものだ。ここに柳条溝爆破事件を懷古してみる。

柳条溝爆破事件

昭和6年頃の日本では「酒は涙かため息か」の流行歌が歌われていた。

支那では「日本製品手にとるな、いつまでたっても手にとるな、日貨を売るやつは売国奴、日貨を買うやつに唾かけろ、日貨にいっさい振り向くな、取引やめれば痛がるぞ、排日のききめは大きいぞ、ゆくすえ永く縁切りだ」といった排日歌が歌われていた。

昭和6年5月に万宝山事件（後記する）や中村大尉事件（支那興安屯墾軍によって殺害された）が生じたが、それほど排日運動が盛んであった。これらの問題は日本の奉天総領事と張学良との折衝や、政府間の交渉に移された。

しかし、支那の世論は憤激の度を高めた事は勿論だが、日本の中にも「軟弱外交」攻撃的となって交渉の進展が阻まれ、刻一刻と緊迫の色は濃くなって行った。

その間に関東軍は着々と具体的な準備を進めていた。奉天城や北大営を攻略するために巨砲が必要なことは、今までの偵察から明瞭であった。そこで中央と折衝の挙句、24cm榴弾砲二門を内地から極秘裡に運ぶことになった。この巨砲が後日の北大営攻撃で、どれだけ威力を発揮したか計り知れない。

5月の半ば頃になると奉天はもう夏である。北大営の支那兵は食事を終えると、兵営の西側を走っている鉄路の上に夕涼みに出る。軌条の上に一列に腰をかけて緑色に浮き上がった北陵の森を眺め、恰も電線に止まった雀のようであった。

満鉄の保安区員が通りかかると彼等は罵詈をあびせ、兵営に引き上げる時には必ず軌条の上に石を並べた。或は電柱と電柱との間にひいてある銅線をはずし、店に売付る者さえ居たという。

満鉄（付属地は鉄道を中心に62m幅の地帯）側では線路の巡回を間断なく実施して、未然に事故の防止を計る以外に手段はなかった。巡回は保線区員と守備兵とが協力して警戒していた。

一組は二人で編成され、柳条溝を出て軌条沿いに文官屯（35頁地図参照）の南方にある県境まで歩いて行き、そこで先方の保線区から来た別の組と巡回表を交換し、また引き返して来る。それは昼も夜も繰り返すのだが、北大営の近くになると危険で仕方がなかった。

軌条の上に雀のように並んだ支那兵は悪口を云い、悪戯をしたり、石を投げたりした。軌条の堤防の下に降りて歩いても結果は同じであった。前年中の満鉄の被害は、運転の妨害、運転中の列車から貨物の抜き取り、鉄道用品や電線の盗難などを合わせた合計は189件に及んだ。

関東軍の青年将校たちは、3年前の張作霖爆殺の不手際に就いていろいろと反省しながら、満州國樹立の計画を秘かに練っていた。張作霖暗殺の謀略は、その後に続く行動が乏しく足並みも乱れていた。大体、暗殺遂行に支那人浮浪者を利用したことが間違いで、これが露見の原因となった。

今度は日本軍人が直接遂行する爆破の合図と同時に、奉天駐屯軍の24cmの巨砲をもって北大営の支那軍兵舎をたたき、東大営の奉天軍部隊を急襲して占領する。爆破工作は張作霖暗殺の場合と違って列車転覆の必要はなく、満鉄の走る列車には被害を及ぼない程度でよからう。

高速列車は片方のレールが一寸切断されても、少し傾くほどで通過できるから、あらかじめ爆破部分の適当な寸法を調べて使用爆薬量を定めた。(実際、爆破後の急行列車は無事に通過している)

昭和6年9月18日夜(1931)、虎石台の独立守備隊第二大隊第三中隊では、中隊長の川島大尉が先に立って夜間演習を行っていた。20日には第二大隊の後期入営兵が第1回の検閲を受けることになっていた。

検閲課目に夜間演習も入っていたから、各中隊では夜間演習を繰り返していた。

この夜間演習の中には、鉄道線路巡察の演習も含まれていた。川島中隊長の命令で夕方から演習に出たのは河本中尉である。月は既に高梁畑に沈んで全天は降るような星空であった。

河本中尉は部下6名をつれていたが、そのうち4名を斥候として前方を行進させ、中尉はあとの2名を伴って線路の上を北から南へと静かに歩いていた。北大営の直ぐ横にきたのは夜の10時前であった。

「若し何か事件が起きたら直ちに携帯電話機を持ってくるのだ」と、足下を指差しながら2人の初年兵を教育した。「電話機を線路の各所にあるジャック・ボックスに接続すれば、南は大連から北は新京まで連絡がとれる」。お前たちは常に第一線に立った覚悟で任務に邁進しなければならない、と教えていた。

河本中尉は紫紺の空を見上げると星はチカチカと輝いていた。その瞬間、後方で爆発の大轟音が起った。(爆破は小規模であったと伝えられている)

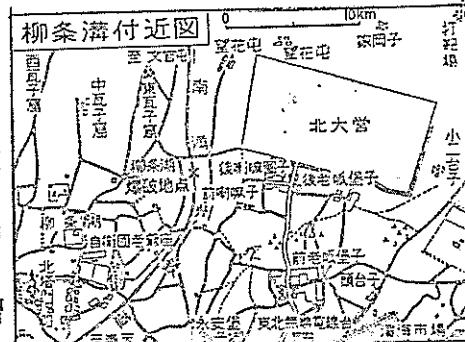
「斥候帰れ」と中尉は声を振り絞って叫び、爆破の方向を指差して一気に駆け出した。2名の部下も後につづいた。河本中尉は爆破が成功した事を携帯電話で、大隊本部や特務機関に連絡した。

爆破地点の軌道は曲がって跳ね上がっていた。息をきらして引きか返った斥候を加えた6名の兵は、傾斜面に伏せて射ちまくった。鉄道守備隊の兵は常に警備用として30発の弾丸を携帯していたのである。

河本中尉は決死の伝令を走らせ、4km北方にある文官屯の中隊長に事の急を知らせた。川島中隊長は大隊本部へ報告が終わるが早いか、演習を中止して兵を集め、先頭に立って南下した。

北大営の西南近くに来ると、その一帯にある高梁畑から猛烈な射撃を浴びた。追撃しようとしたが深い水溜りに妨げられ、北へ引き返して北大営の西北角を目指して突撃を敢行した。戦闘は非常に苦戦に陥ったが、前記した24cmの巨砲の弾丸が北大営に射ち込まれて威力を發揮した。

川島中隊長が突撃した際、剣道の達人という評判の「今田新太郎大尉」は、雄峯会



と称する御用浪人団の連中を引き連れ、日本刀を振りかざして營内に斬り込んでいた。

柳条溝の鉄道爆破を口実に独立守備隊第二大隊は北大営を、第二師団歩兵第二九聯隊は奉天城を攻撃し、例の巨砲が砲門をひらいて翌19日午前6時までに両地ともに占領した。

引き続き稍々苦戦の後に長春も占領し、營口、鳳凰城の支那奉天軍を武装解除した。こうして満州事変の火蓋は切られた。政府の不拡大方針の訓令に拘らず、事態は関東軍の手で逆の方向に進んで行った。

「今田大尉」は事件発生と同時に、かねて買収しておいた匪賊や、急ごしらえの御用馬賊をけしかけ、満鉄沿線各地で爆弾を投げさせて治安の攪乱を図った。即ち日本領事をして治安不穏の理由で、軍の出動を要請させるためであった。

これには先に甘粕正彦予備大尉や和田勤予備中尉を潜行させていた。そして附近の警戒や連絡に使用するため、喰い詰めた浪人や青年達を統率し指導していた。

関東軍は常に政府より先回りして、その政策を既成事実によって先取りし、前進して行った。関東軍の戦果が目覚ましくなるにつれて、世論も其の宣伝に躍らされるばかりで、若槻内閣は同年12月13日に倒壊して犬養内閣が誕生した。

今日では周知の通り、柳条溝鉄道爆破は、正しくは満蒙問題解決への熱情に溢れる「今田新太郎大尉等」一部軍民によって決行され、日支両軍の衝突にまで拡大したのである。

一説では謀略の企画者は石原で、責任者は板垣であり、実行者は今田大尉及び河本中尉ら川島中隊の2、3の将校だつたと云われるが、今田大尉を除いて真実は不明である。中隊長であった川島大尉は私が陸士在学中、戦術教官として勤務していたが、事変当初の話は聞いたことはない。

当時の本庄関東軍司令官が翌年の9月8日、凱旋復命の際、天皇陛下の御下間に對し、「一部軍民の手によって謀略が行われたことは聞き及んでいますが、本職並びに関東軍として計画したものではありません」と奉答している。これは確信をもった明答であったと推察する。

『満州事変勃発前の彼我の兵力』

①「関東軍」 ポースマス条約の結果、日本がロシアから譲り受け支那側も承認した満州の権利の中に、鉄道警備、居留民保護のため「南満州鉄道831kmに12、471名、安奉線275kmに4、137名、合計16、608名の兵員を駐屯する権利が含まれていた。これが関東軍の独立守備隊である。（兵員数は満たない）この固定的な独立守備隊と、2年交替で内地から派遣されたる師団（5、400名）の兵員を合わせても、条約で許された総数とは6千人以上も不足していた。

②『張学良の軍隊』 張作霖の爆死後、学良が其のあとを継いで東三省保安司令となつたが、正規軍だけでも25万人に達していた。又、飛行機も100機ばかり保有し、重爆撃機も15、6機あったようだ。

延々と続いた鉄道を根こそぎ破壊し、20数万人の居留民がいる各地の付属地に、支那軍が雪崩込んだで来た時には如何すればよいのか、関東軍の僅か1万の兵力では防ぎ切れるものではない。その上、北大営の支那兵は三日に一度は付属地の境界線まで挑戦して來た。隠忍に隠忍を重ね、骨髓まで食い込んでいたものが、一気に爆発したのが柳条溝爆破事件であろう。第一線の心理は私も理解出来るような気がする。

満州事変

第二次大戦の前史をなしている日本と支那との戦争のうち、1931年（昭和6）の柳条溝事件以来、37年（昭和12年7月7日盧溝橋事件）の全面戦争突入までの、日本軍の満州占領をめぐる日本側の戦争の呼称である。

1930年頃から、日本の支配階級によって「満蒙の危機」が叫ばれ、満蒙は日本の生命線だと強調された。それは支那に於ける民族運動の高揚により、日本の満蒙支配に対する支那民衆の反日運動と、世界恐慌の波及によって、日本の満蒙からの利益が減少したことが影響している。

又、大恐慌によって破局的状態に陥った日本の資本主義が、新たな対外進出で切り抜けようとする要求も強く、軍部の対ソ作戦基地としての満蒙の比重上からも、軍事占領によって独占的なものにしようとしたのであろう。

関東軍は自らの手で柳条溝附近の線路を爆破し、これを支那軍の行為だと宣言した。自衛の行動と称した関東軍は、その日のうちに長春、奉天、四平街を占領した。

予め周到な準備と計画から、僅か1万の兵力で25万の支那軍を奇襲攻撃して成功させ、鉄道沿線を占領した関東軍は更に奥地に向かって行動を続けた。9月21日には朝鮮軍の一部は中央の命令を待たずに、越境して戦闘に加勢した。

在満州の支那軍は張学良の軍隊であったが、殆ど抵抗せずに長城線内に避難したため、日本軍は31年中にほぼ満州の全域を占領、32年1月には錦州地区を占領、さらに内蒙古の熱河省まで占領して関外を確保した。

若槻内閣は国際関係を考慮して不拡大方針を唱えたが、現地軍を制止することは出来ず、戦費支出を承認して既成事実を次ぎ次ぎと認めた。国際連盟は支那の提訴で問題を取り上げたが、リットン調査団の派遣を決めただけであった。

米国は日本の満州占領によって市場の一つを失ったが、折からの国内の大恐慌が深刻で、単独で武力行使する余裕がなく、強硬に抗議するだけであった。英國は日本の行動が揚子江沿岸に及ばない限り黙認し、むしろ対ソ牽制の役にたつ事を期待した。

このため日本の行動は国際的には有利な情勢の中で開始された。支那の情勢も同様であった。蒋介石の国民政府は、このとき江西省の共産軍を攻撃しており、満蒙の失陥にも直属の軍隊は一兵も動かさず、事件発生後も総力をあげて共産軍を総攻撃し、専ら対日妥協を図っていた。

32年2月、戦火が上海に飛び火すると、米英などは自己の帝国主義権益の集中している揚子江沿岸に、日本の軍事支配が及ぶ事に強硬に反対した。（第1次上海戦）一方の蒋介石の国民政府は依然として戦争回避に努めたが、労働者、市民、学生などの抗日運動が激烈となり、第一線に立つた19路軍も勇敢に戦った。3ヶ師団を派遣した日本軍は軍事的成功を収めることが出来ず、5月に停戦協定を結んで撤兵した。

しかし此の間に満蒙支配は着々と進められ、32年3月には関東軍の指導の下に、満州國が成立した。初め軍部の行動に多少の心配を感じていた支配階級も、満州支配に積極的になり、議会は満州國承認決議案を可決して9月15日、正式に承認した。翌33年3月には国際連盟を脱退し、国際的孤立と戦争への道に踏み切ったのである。

満州事変は革命であった。日本国内の政治の腐敗、経済の逼迫、国民生活窮屈の打開策であった。私は満州事変と国内革命とは同根に咲いた異色の花だったと思う。

東陵 (位置は21頁地図参照)

乾坤一擲であった柳条溝の狂気の発火点を見て感じたことは、十八史略の「四知」であった。いくら極秘裡に行っても「天知る、地知る、君知る、我知る」の教え通り、必ず露見するものである。

厳肅な不幸の臭いを感じながらタクシに東陵へと依頼した。再び雑踏する市街を通り抜け、一直線に伸びる東陵路に進むと車や自転車の洪水も稍々閑散となった。タクシはトロリーバスを追い越しながら心地よく東へと駆進していた。

通訳の路鵬さんは宇都宮大学に留学した経験があり、東京の新宿や原宿を見た感想を語り出した。乗客の私等は日本人であり、運転手は日本語を解しない密室ということもあって、溜飲を下げるよう胸の中の不平不満をぶちまけた。

昨年6月4日の天安門事件を想起させるように、自由と民主を日本から学んだと若者らしい意見を述べていた。しかし一方では、日本の若者の行き過ぎた自由に疑問があると忌憚のなく語り、理路整然として正鵠を得た意見には同感であった。

中国の歴史を語り合い、将来を荷負う若者が立ち上がるべきだと激励すると、我が意を得たりと流暢な日本語で答え、頼もしい青年と楽しい会話を続けていた。自由を求める熱情は自由圏に生活する者に優り、確かに中國青年は変わった。

市街から東約11kmにある東陵までの所要時間は小一時間であった。清朝の始祖ヌルハチと皇后イエハナラ・フチャの陵は、正式な名称を「福陵」と称し、前に渾河、後ろに天柱山を控えた要塞の地に築かれていた。山腹を利用した陵の周りは松の古木が繁り、風格のある雰囲気が漲っている。

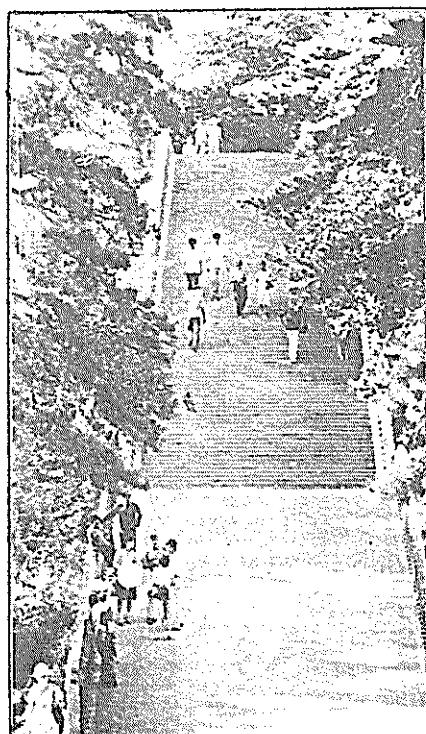
この福陵は1629年から23年の歳月をかけて1651年に完成した。面積は20万m²で昭陵、永陵と共に清朝の関外の三陵と呼ばれている。

神氣の満ち溢れる淨域の広場では、ヌルハチの艱難辛苦を知らない若者が野外ダンスに熱狂し、酔いも一度に醒めるような驚きであった。滿州民族の熱誠溢れる仰慕の地を弁えず、不謹慎極まる光景を目にし、儒教の廢れたことを嘆くばかりであった。

中國の青年は変わったと感じながら福陵の石橋を渡ると、上の写真のように108の石段が森の上に向かって伸びていた。これは仏教の108の煩惱を意味しているのだろうか。ヌルハチは仏教信者だったのかも知れない。

「古を懷いて英風を欽う」という神々しい氣高さが肌に感じ、ヌルハチの琴線に触れるように襟を正して一段一段と石段を踏んだ。

老松の生い茂る境内は北陵（昭陵）に比べて稍々小さく、建物の形姿から配置に至るまで全く相似形をなしている。二代目のホンダイジは自分の陵を父である始祖の陵

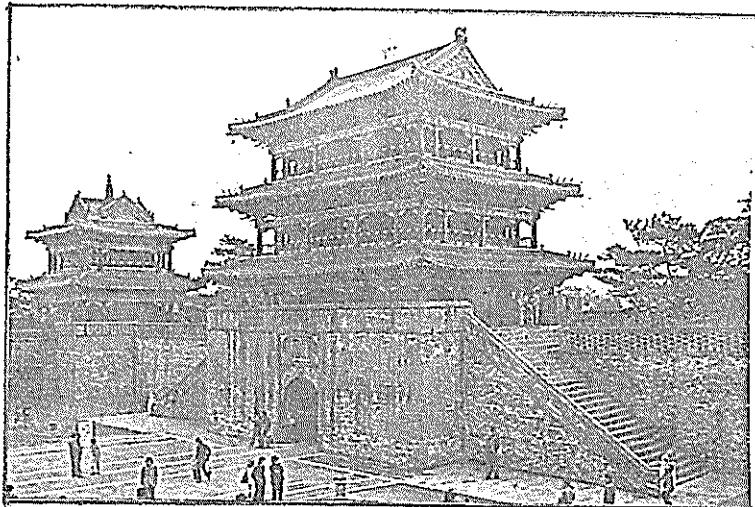


に真似て、父を慕ったのであろう。しかし鬼気迫る莊嚴さと耽美壯麗さは父親の貴祿を示している。

正門を入ると碑亭があり、其の後方の「正紅門」の上に三層の「大明樓」が燐然として聳え、祭事の行われる主殿「隆恩殿」が其の奥に建つている。

(右は大明樓の威容)

東陵は小型の性であろうか、神の鎮まる綠豊かな鎮守の森の感じが強い。



「一簞の食、一瓢の飲」の清貧の生活から身をおこし、壯士慘として驕らず、遂に清朝を興したヌルハチの偉業は、永久に支那の歴史に輝いている。最奥に祀られた陸墓を拝して心中に閃いたことは、「水は湿に就く」と云う言葉であった。

同じ土地であっても水は湿気の多い所に流れるものだ。その人の人格や素質、その才能は自からの人の運命を開き、民百姓が仁政に下に赴くことは、恰も急流の逆巻く水が深い谷に赴くのと同然である。

金城湯池に構える福陵の拝観も一巡し、城壁上から眺める陵の黄瓦は、赫々として陽を照り返していた。それは天子が下界を支配する力を表現しているようである。彼の将来を洞察した炯眼に対し、陶酔しながら感服するばかりであった。

再び日中両国が骨肉相食むことのないようにと祈願し、幽堂の地を去った。

ヌルハチ（奴兒哈赤）

清朝300年の創設者のヌルハチは1559年（嘉靖38）、満州の撫順の東、渾河の支流である蘇子河畔の盆地の中心地に（遼寧省新賓県老城で旧名は興京）、女真族の武将の子として誕生した。（在位1616～26）（次頁地図参照）

廟号は太祖、姓はアイシンギョロ（愛新覺羅）である。愛新覺羅の由来は27頁に伝説として記載した。

当時、満州地方に住むツングース系の女真族は、建州女真、海西女真、野人女真に大別され、ヌルハチの一家は建州女真族の一酋長に過ぎなかった。（右はヌルハチ像）



明朝は女真族を部族ごとに分割統治する政策をとり、建州女真に対しては永楽年間（15世紀初）に先ず建州衛を、次いで建州左衛を設けて、それぞれに頭目を置いて指揮をとらしていた。

蘇子河流域は土地が肥沃で農耕に適し、漢民族の土地に接近していたから、彼等の先進的な経済、文化を摂取するのも便利であった。一般に明朝の辺境近くに居る建州

女真や海西女真是、朝貢と交易を通じて明朝と密接な関係を保っていた。

当時の女真族の社会は戦国時代の真っ只中にあった。建州女真も五部に分れて争い、「満州実録」によると、

「各部蜂起して皆王と称して長を争う。互いに相斬殺し甚だしくは骨肉相殺す。強はは弱を凌ぎ、衆は寡を暴す」と書いてある。

1583年（明の万暦11年）、ヌルハチ25歳の時に初めて兵をあげ、数年の間に附近の諸部を統一して、殆ど全建州の地を合併した。

ヌルハチは1587年（万暦15）に初めて城を築いた。これが旧老城と通称されるので、第二次の居城である老城に遷るまで、実に16年間の永きにわたり、彼の根拠地はここにあった。（老城は上図の新賓附近である）

ヌルハチの日の出の勢いは他の諸部族に恐怖をもたらした。建州女真の興起を怖れた海西女真の諸部らは、所謂、九国の兵をつらねて1593年にヌルハチの根拠地に大挙して来襲した。

この一戦でヌルハチは敵兵四千を殺し、馬三千頭、甲冑一千を捕獲したうえ、長白山麓の二部をも併合した。正しく此の一戦こそ建州女真族の興廢の運命を決したものであった。これより女真方面に於けるヌルハチの前途は大きく開けたのであった。

当時にあって建州女真軍が一万五千の精兵を擁したと云うことは、近隣諸国にとっては一大脅威であった。ここで興味のあるのは、朝鮮の宜祖王の使者がヌルハチを訪れた際、ヌルハチは壬辰の倭乱（1592年、文禄の役）の時、日本軍の侵略に苦しむ朝鮮のために、援軍を送る用意のあったことが知られることである。

この頃のヌルハチは対明関係の面では恭順の態度を守り続け、既に1589年（万暦17）に明朝から都督に任せられ、1595年には竜虎將軍に封ぜられた。

以上のような権勢を背景にしてヌルハチの民族意識は高揚した。其の顕著な表れが民族文字の作成である。これまで女真族には文字がなく、文章を作るのには蒙古字、蒙古文で書くしか方法がなかった。

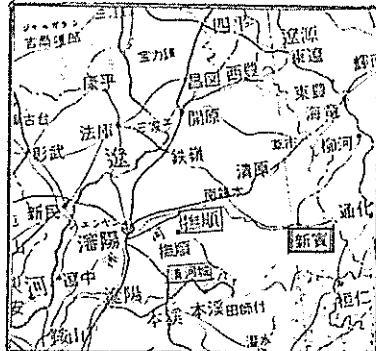
1599年、ヌルハチは文人に命じ蒙古文字を参考にして、初めて「満州文字」を作らせたのであった。これによって女真族は自らの言語と文字により、記録を残せるようになった。

1603年（万暦31）、ヌルハチは都を旧老城から新老城に遷した。因に彼は都合七回も遷都したが、最晩年には奉天（瀋陽）が都であった。

新しい根城を得て、ヌルハチの征服事業は急激な発展を遂げた。即ち他の女真族を併合し、海西女真四部のうちの一部と、遙か遠方にいる野人女真族の若干を除き全女真族がヌルハチの支配下に帰した。

1616年（万暦44）1月、ヌルハチは全女真族に号令するためにハン（汗）の位に就き、建州國ハンと称した。その前年の1615年に八旗制度が完成した。一旗は七千五百人からなり、八旗で六万の軍勢であった。八旗制度は兵農一体の社会組織で、単に軍事のみならず行政、生産の職能も兼ね備えていた。

ヌルハチはハン（汗）の位に就くや、直ちにこれまで続けてきた明朝への朝貢を廃



止した。財貨、土地、人民を掠奪する対象が今度は一転して、明朝の漢民族居住区へ向けられた。初めヌルハチの巧みな術策に欺かれて警戒しなかった明朝も、次第に其の恐ろしさを知り、女真族の反ヌルハチ派の一部を後援して、ヌルハチの勢力を抑えようとした。

1618年4月（万曆46）、ヌルハチは明朝に「七大恨」をつきつけて宣戰布告すると同時に、兵二万を率いて撫順城を攻め落とし、捕獲した人畜三十万を諸軍に分配した。次いで7月に清河城を陥れた。（前頁地図参照）

この期に及んで明朝は漸く事態の重大さを悟り、征戦の準備に入った。1619年2月、戦備が漸く整い、明兵八万八千余、朝鮮兵一万三千余の約十万の大軍が編成された。明朝はこれを四十七万の大軍と号し、四方面に分かれて老城に向かった。

明軍の主力は西方からの三万の部隊であった。ヌルハチは情況を正確に判断して各個撃破の戦法を避け、自ら六万の全兵力の殆どを西方の明軍に集中した。

会戦は3月1日、蘇子河畔の「サルフ山」で行われ、衆寡敵せず、明軍は一日のうちに殲滅された。此の後、別の戦線に移ったが既に大勢はこの一戦で決したも同然であった。結局、明軍は3月4日までに四方面のうち三方面で敗れ、僅かに一方だけが戦わずして退却したのであった。世はこの戦いを「サルフの戦い」と称して有名である。この会戦の結果は明清興廢の分かれ目の契機となった。

サルフ戦の大勝の後、ヌルハチは女真族の統一の業も成し遂げたのを期し、同じ1619年に「後金國皇帝の帝位」に就き、年号を「天命」とした。後金の国号は嘗ての女真族の建てた金国（12～13世紀）に因なんだもので、ヌルハチは金朝の末裔であると自負していた。金国の再興を念願していた彼は、金国の繼承者の意味から後金国と名付けたのである。（金国に就いては哈爾浜の項で記載する）

サルフ戦以後のヌルハチの活動は騎虎の勢いであった。遼東の開原、鉄嶺、瀋陽、遼陽を陥落させ、遼河を渡って遼西地区を席巻し、1626年1月、支那本土の関門である山海關を攻めるため、先ず北方の寧遠城を攻撃した。

しかし天は彼に味方せず、寧遠城から放ったポルトガル製の砲弾のために重傷を負い、これが致命傷となってしまった。療養先の清河の温泉から瀋陽城に運ばれる途中、瀋陽から23km地点で息を引き取った。時は1626年8月11日未の刻（午前1～3時）、享年六十八歳であった。

ヌルハチの死後、スレ汗と称していた八男のホンダイジ（皇太極）が位を継いだ。後の清朝第二代皇帝の太宗（在位1626～43）である。

『満州の名称の由来』

太宗の天聰十年（1636）になり、国号を改めて「大清」と称した。そして又、以前に「後金国」と称したことも抹殺し、それまでの「国号」は「満州」と言っていたことにした。これが「満州」の名の由来である。

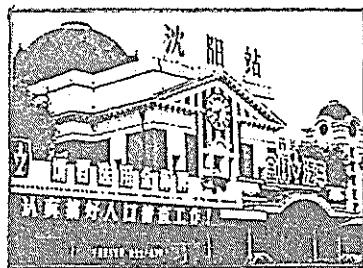
『女真族』

支那東北部に居住したツングース系民族で、女真人の名が史上に現われたのは10世紀初期である。多くの部族に分かれおり、主として南西方の遼と、南東方の高麗に服属していた。金国を建設したのち遼を滅ぼしたが蒙古に敗れた。豊臣秀吉の朝鮮出兵を契機に、女真族に対する明朝の統制がゆるみ始め、蘇子河上流の建州部族の酋長ヌルハチが、女真族を統一して清國の建国となった。これが概要である。

6月18日 (月) 快晴 潘陽～長春

潘陽では単独行動によって張作霖爆死の皇姑屯や、満州事変発端の地の柳条溝、清祖ヌルハチの東陵を懷古できた事は望外な成果であり、生涯の想い出である。

ラッシュ時の難踏の中を潘陽駅（右上の写真）に向かった。駅前から放射線状に伸びる界隈のロシア建築や日本人町、見納めかと思うと後髪が引かれる想いだ。



9・00にホームを離れた車内で、小学校時代に日本人の先生に教えを受けたという車内販売主任は、親しく話しかけてきた。「輔車相依る」べき関係の両国は過去の相克を忘れなければならず、胸襟を開いて話し続けた。

「金失瀋」には10・20に停車した。私が戦術を学んだ時代には何時も鉄嶺の地名が出てきた。山あり平野あり河のある地形は、戦術問題には必須の条件だったのである。しかし其她们は古い思想である。

日本軍のような劣勢な軍隊の戦場の選定は、優勢な敵戦力の発揮困難な地形を選定すべきで、我が戦力を過信していた証拠である。歩・砲・戦車・航空機の発達した近代戦を戦った私には、満州平野の戦術研究は殆ど役に立たなかつたと思っている。重要視すべきは世界戦史の研究であろう。

鉄嶺は唐代には富州、明代には鉄嶺街と呼ばれ、遼河の水運の便もあって昔から発達していた町である。そのため唐や明代の遺跡も多く円通寺の白塔は有名だ。

次ぎに停車した駅は「開原」であった。鉄嶺と同じく戦術問題で耳にタコができるほど聞かされた懐かしい町だ。遼河の支流を南にひかえた景勝地で、漢代には遼東郡、唐代には黒水都督府、元代には開元路と称し、農産物の集散地である。

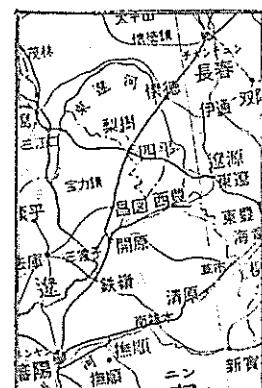
昼食時に「四平街」に停車したが駅名は「四平」と変わっていた。昭和13年に渡満した際、新京から齊々哈爾に赴任した時、一泊した想い出の地だ。遼寧省と吉林省の省境の街は死の街のようで、樹木も少なく寂しい感じがしていた。

四方が一望千里の平原だから四平と名付けたのである。1906年にロシアが鉄道を敷設した後に造られた街で、内蒙ゴに最も近く内蒙ゴとの畜産物の集散地である。

長春近しと告げる「公主瀋」に着いた。一水河の両岸にまたがる此の地は、日本が満州を支配した時代は軍都として栄えた街であった。

遠くは公主靈、格格靈とも呼ばれたが、人家の少ない寒村に過ぎなかった。20世紀の初め、ロシアは遼陽、瓦房店と共に東北地区南部の三大駅として、又、軍事上の要地とするため大規模な鉄道付属地として、機関庫、病院、教会、劇場、ホテル、製パン工場、兵営などを建設した。その面影は今日もなお残り、農産物の集散地としても栄えているようであった。

北に進むにつれ昏々と死んだように拡がる無限の曠野、そこには心に止まる戦跡もなく、無聊を慰める景観もなし。退屈も漸く解消されて列車の旅はおわり、14・00に長春駅に滑り込んだ。



長春（新京）

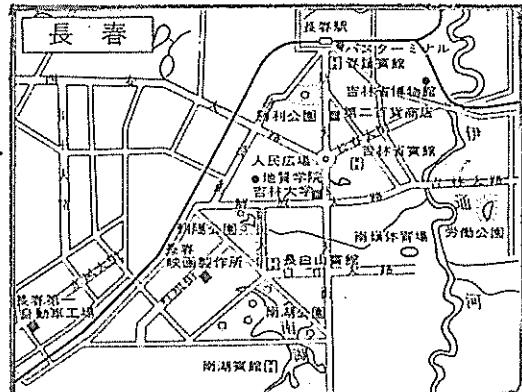
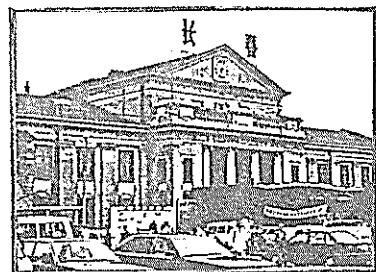
頭の中に埋っていた微かな記憶を蘇らせながら、興味津々として駅前に立った。（右は長春駅）

あの時から52年を経過した現在、すっかり変貌して昔日の面影を残す一物も眼に写らない。年老いた私自身と時の流れを感じさせるだけであった。

白樺の林が一面に拡がっていた駅前の眺めは、高層建築で遮られてしまっていた。一直線に伸びる道路の向こうに見えた関東軍司令部、今は其の威容を眼にすることは出来ない。鮮明に想い起していた夢は敗れ、万感胸を打っていた。

車窓一杯に盛りの青葉が眼にしみる森の都、バスの中から記憶の糸を手縫っても、天も地も全てが生まれ変わった新世界だ。

凜然としていた静かだった街は騒然と雑踏と化し、その繁華な町並み眺めて南湖を瞰下する長白山賓館に着いた。（右地図）



長春の概要

長春は歴史の浅い都市である。清朝の1800年に長春堡（現在の新立城）に行政管理機構として「長春府」が設置された。これが長春の名称の始まりであった。一説では、この一帯は春になると金せん花（支那では長春花）が咲き乱れるからだと云う。

この時に初めて清朝は、此の地方にも本土の漢民族の移住を認め、東北北部の農業地帯開発に乗り出した。

帝政ロシアは1896年の条約により、ロシア本国とウラジオストクを結ぶ鉄道敷設権を獲得し、さらに遼東半島との連絡鉄道敷設権をも追加獲得した。1898年に建設に着手して1901年に全線が開通し、これが東清鉄道または東支鉄道である。

日露戦争で勝利した日本は東清鉄道のうち、長春以南を南満州鉄道として経営することになった。長春以北の東清鉄道は1935年、ソ連から満州国に売却されたが、長春は両鉄道の乗換駅として交通の要地であった。

1932年3月、満州国が成立して首都を長春と定め、同年11月に正式に「新京」と改名され、その後満州国の政治の中心となって発達した。

第二次大戦の終結に伴ひ、長春は國府軍と中共軍の争奪の的となった。即ち、戦後長春に進駐していたソ連軍が1946年3月、撤退を開始したのに続いて中共軍が同年4月、完全に長春を占領した。しかし同年5月には國府軍が再び奪取した。

中共軍は其の後、第五次攻勢（1947年5～8月）によって同市を孤立状態に陥れ、第八次攻勢（1948年5～6月）で遂に西郊飛行場を占領した。第九次攻勢で

は（1948年9月）長春守備の國府軍第六十軍が中共軍に寝返ったことにより、9月18日に完全に中共軍の占領するところとなった。

現在は吉林省の首都で人口は200万（市内は100万）。松花江の支流である伊通河沿いにあり、交通の要所となっている。中国では唯一で最初の自動車工場が新設された所でもある。一躍最新の工業都市として浮かび上がり、トラックタ、車両、紡績等の工場も建設され、活気溢れる産業文化都市として躍進中である。

偽皇宮（旧満州皇帝の皇居）

関東軍の鉄道爆破を機に満州國が建設され、長春は新京と改められて以来、この町の発展の基礎を作ったことは論を俟たない。詳しく地図を調査すると満州國時代の政府機関は殆ど大学に生まれ変わり、文教都市を形成していた。（右は皇帝時代の溥儀）

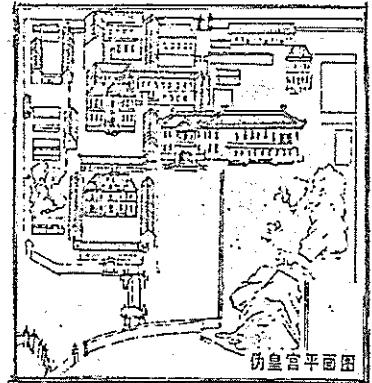
満州國皇帝の皇宮は吉林省博物館（駅の東南）、大和ホテルは春誼賓館（駅前）、関東軍司令部は吉林省党委員会（駅前を南下するスターリン通りの第二百貨店の南側）、満鉄ビルは中国鉄道局、吉野町は長江路、新京神社は幼稚園と、それぞれ変貌している。（前頁の地図参照）（右は偽皇居の平面図）



我々一行は長白山賓館で小休止後、最初の観光は旧満州國皇帝の皇居跡であった。現在は偽皇宮と呼んでいる。これも不思議だ。北京の紫金城を故宮と改名したが、なぜ偽故宮と命名しなかったのであろうか。

「塞外の春城」の名に恥じない街は濃い緑で覆われ、市の面積の30%は緑化されている美しい町並みだ。

渡済した当時、我々は先ず関東軍司令官植田謙吉大將に申告をした後、夢を抱いて皇居を遙拝した。その時の情景は脳裏に深く記憶されている。若き血潮は躍り意氣天を衝き、天下國家を論じていた時代である。



偽皇宮に近づくにつれ、皇居の鐵扉の門を飾っていた黃金色の蘭の花模様（満州國の国花）が、燐然と輝いていた光景が瞼に浮かんでいた。

然し乍ら、日本の宮城と比較して雲泥な差のある劣悪さ、実にお粗末な皇居に哀愁と憐憫の情を覚えたことも、記憶の中に克明に刻まれていた。

バスは偽皇宮の前で停車した。眼光炯々として人を射るように凝視したが、黃金色の蘭模様が網膜に写らない。静かに石の門に歩み寄ると鐵扉は共産党色の赤一色に塗り潰され、憐れにも其の中の蘭の模様まで赤化されていた。

國破れて山河あり、見るもの全てが心を痛め、嗚咽にむせび泣きしたい心境であった。（次頁写真中央の石柱右側の鐵扉は明瞭でないが、黃金色の蘭模様があった）

清朝の再興に一縷の望みを託し、奇蹟的な起死回生を成し遂げた満州皇帝、高い木の枝のように上に祀られただけの存在だった溥儀、一転して奈落のどん底に陥された彼の心中を察すると、歴史の悲曲のような啼きが私の肺腑に聞こえてくるようである。

暫く門の前に立って眼を虚空に遣りながら冥想に耽り、天なるかな、命なるかなと

長い嘆息をしながら宮廷内に入った。皇宮は表朝廷と裏朝廷に分かれている。表朝廷は皇帝の政治活動の場となっており、裏朝廷は皇帝・愛新覚羅溥儀と家族の日常生活の場所である。(右は蘭模様のあった正門)

裏朝廷に入ると東西に二つの庭があり、西庭には緝熙樓が建ち、東庭には同徳殿が建っていた。中和門の外側が表朝廷となつておらず、其處に勤民樓、懷遠樓、嘉樂殿等が並んでいる。

皇帝らの日常生活をした緝熙樓には質素な調度品が並び、書斎や憩いの場所は幽窮な感じがしていた。嘗て北京の紫金城で世界最高の中で養育された人も、悲哉、人は時の流れに抗し切れない天命があるのだ。

政務室を覗いて「勤民樓」へと進んだ。ここは謁見の間であった。中央に玉座が設けられ、両側は滿州國花の蘭の彫刻で飾られていた。(右は勤民樓)

建物は当時のままだが、内部を飾った装飾品、調度品は全て複製品である。それにしても至極質素であることは驚嘆の至りで、建物内部は撮影禁止であった。

御學問所や事務室を見学して饗宴場に入った。そこには即位式や溥儀皇帝の日本訪問時の天皇陛下との謁見、靖國神社参拝などの写真等が展示されていた。何れも私達には想い出の深いものばかりである。

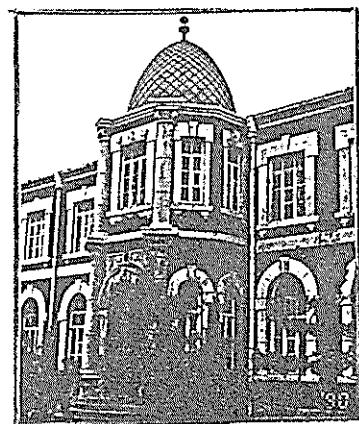
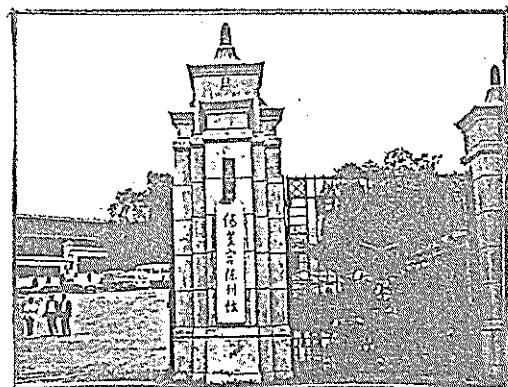
数奇な運命を背負った溥儀皇帝の生涯は、「雀が海中に入って蛤となり、山芋が海に入って鰻となった」故事に似て、世界にも類例のないことであろう。彼のナポレオンでさえ再起したものの、三日天下で終わっている。

思えば天津の日本租界で失意の生活を送っていた清朝の廢帝溥儀を、滿州事変勃発直後から、閔東軍は新国家の首班とする構想をを決めていた。天津事件で北京・天津の治安の乱れを契機に、土肥原は溥儀を説得していたのであった。

天津の暴動から身を守という理由で昭和7年11月12日、夜陰に乗じて天津を脱出して営口に上陸した溥儀は、翌年3月1日に執政となり、昭和9年3月に皇帝に即位して、国号を滿州帝国、年号を康徳と改めた。

運命は魔物である。日本が大雪崩のように崩壊すると同時に滿州帝国は解体した。皇帝溥儀は終戦の8月16日、日本に向おうとして奉天飛行場に着いたところ、ソ連軍に捕らえられ、ソ連に抑留されてしまった。

一巡して見学が終了すると、近年上映されたラストエンペラの情景が想い浮かんだ。彼の靈魂は鳥になって、時々この偽皇宮を訪れているのではないだろうかと、哀愁の込み上げてくる中を偽皇宮を後にした。



長白山賓館と長白山

偽皇宮から駅前通りのスター・リ・ン通りを真っ直に南下し、勝利公園や児童公園を眺めて開放路を通過し、医科大学の角を左折して長白山賓館に帰館した。

ホテルは市内最大の南湖公園に臨み夕暮れ時の景観は旅人を慰めていた。西に傾いた夕日の淡い光は湖水を照らし、延安大路は一直線に伸びている。（上は南湖の夕暮れ風景）

13階の客室からの俯瞰は、「春宵一刻、直千金」と形容するに足る眺めである。回想してみると満州入りしてから今まで、過ぎた刻一刻は人生を充足させてくれた旅であった。又、満足感に溢れた懐古の旅でもあった。

夜を迎えて湖面に映る月は金色に躍り、湖水の静けさは壁を沈めるようで、長白山を空想しながら美景に陶酔していた。長白山賓館の名前に因み、長白山に就いて若干記述する。私が渡満した時代は長白山は馬賊の蟠居地帯で懐かしい思いがする。

満州馬賊の巣窟は吉林省と朝鮮の国境をなす長白山であった。満州は清祖興隆の地で、康熙十六年四月（1677）、封禁の地域となった。従って長白山の鉱山も森林も手を付けることが出来ず、豊かな富源として封鎖されてしまったが、馬賊の巣窟として何処からも手の出せない、馬賊にとっては安全地帯であった。

夏から秋にかけての長白山は文字通りの森林が鬱蒼として、ここに隠れたら最後、幾千幾万の搜索隊を派遣しても無駄であった。冬は雪と霜の極寒で近寄ることも出来ず、更に猛獸までが出没していた。

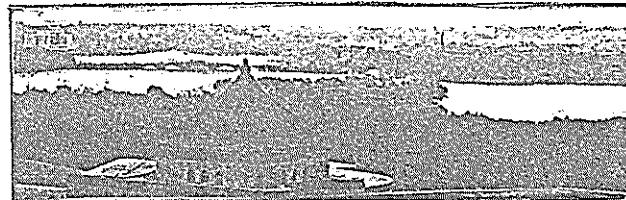
この長白山を根拠として多数の馬賊の頭目が頑張っていた（北朝鮮の金日成も一派であろう）。丁度蒙古の興安嶺に似ている。ただ興安嶺は蒙古人が主で、長白山は支那人が主であった。

馬賊を専業としていた者の内でも、長白山中の大巣窟に棲んでいる者は、特に凄い勢力を持っていた。この巣窟には二万人入っても尚、余裕があったと云うから、ここに潜り込んだ馬賊の数は驚くべき数であった。

正統馬賊は仁侠の徒でなければならない。馬賊は草賊とか匪賊ではない。昔の緑林という言葉に当てはまる。「緑林」というのは戸外を意味し、野外を意味している。如何にも豪壯で自由奔放、その前には王侯も貴族もない。天地の間に枕して死生を矢弾の中に曝す集団であった。空巣狙いや、こそ泥棒とは全然違うのである。

長白山は阿片の密造の好適地であり、長白山麓はアヘンの元である白芥子の大花園であった。白芥子の花園は緑の森林が保護している格好であった。完成された阿片は土地で消費される外、ウラジオストク、吉林、哈爾浜、長春、北京、大連などに運ばれ、それが煙となって支那人の生命を磨滅させた。

阿片の密造場所は大樹が鬱蒼と茂り、栄養不良の官憲の眼では朦朧として見えず、見付けても賄賂を貰って知らぬ顔をしている状態であった。恰も大幕の垂れた森の中で官憲が保護しているようで、「アヘンと馬賊は満州の花」と云われていたが、長白山麓のような阿片栽培の盛んな地は、他に類を見なかった。



6月19日 (火) 快晴

ベランダに出て早朝の清々しい空気を胸一杯に吸い込んだ。薄い靄が煙のように迷いながら消えて行く。南湖の水面を渡ってくる風は緩やかで波一つ立たず、「上下の天光、一碧万頃」といった景観であった。

広い湖の上は天、下は水、その光が公園の樹木に反映して緑一色、万頃の広さに続いている。(頃は広さの単位) 流石に森の都の最大の公園、南湖に面した佳麗な俯瞰は自ずから徘徊を誇っていた。

清静で美しい幽勝の地は無言のうちに人を寄せ、公園内は太極拳ならず、熱狂して野外ダンスを興じる群衆で埋め尽くされていた。老若男女の体を寄せ合う数は百組を越し、今まで眼にしたことのない光景だ。

6・4事件以来の民主化運動弾圧に反抗して自由化の波に乗り、ダンスで鬱憤を晴らしているようで、驚きの一語に尽きる朝の一時を味わっていた。

長春映画撮影所

本日の最初の観光はホテル西方1kmにある長春映画撮影所であった。正式名は長春電影制片廠である。

先ず所長の挨拶と全般の説明が、暗い部屋の中で長々と続いた。1937年に日本が創建した満州映画株式会社を引継ぎ、1946年に設立している。

嘗て李香蘭も活躍していた所で、現在の総人員は約2千7百名、そのうち俳優は170人、カメラマンは70人、脚本家は30人、年間製作本数は25本、その他マンガ映画、テレビドラマを作り、外国映画の翻訳は年間約20本、日本映画の翻訳数は現在までに101本に及び、北京、上海と肩を並べていると云う。

7つのスタジオを所長自ら先頭に立って案内するサービスぶりは、嘗ての満映時代に、彼の有名な甘粕大尉が理事長であった因縁であろうか。(甘粕大尉は後記する)

特に眼に留まったものはラストエンペラに使用した「歯籠馬車」で、雨曝しになつて捨てられていたが、極めて簡素なものだ。(上の写真がそれである)

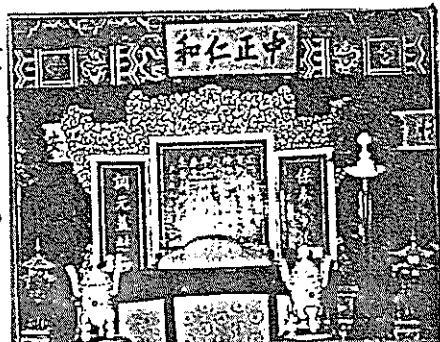
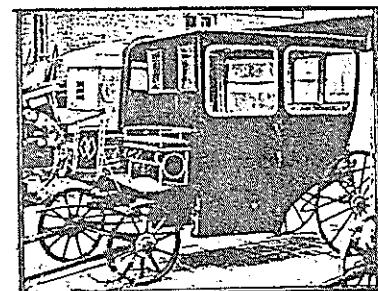
中には「松屋旅館」の看板を掲げた宿屋があったが、台湾との合弁映画に使用した日本旅館のセットであった。古いものでは明時代を現わしていたセットも幾つか残置されていた。

矢張りセットながら絢爛豪華に見えるのは北京の故宮(紫金城)で、本物そっくりである。

しかし何れも紙とプラスチックと木材造りで、煉瓦や瓦などは一切使っていない。

28万m²もある広大な撮影所は短時間では見ることは出来ない。概ね素通りの駆足の見学であったが、規模の大きさだけは驚嘆に価した。

(右は故宮内のセットの一部でプラスチック製)



甘粕大尉

満映理事長であった甘粕正彦大尉を語らずして満州を語ることが出来ないほど、重要な人物である。以下、彼の経歴と神出鬼没、変幻自在な活躍の一端を記す。

日露戦争で大國ロシアを相手の相次ぐ勝利に感激した彼は軍人を志し、明治45年陸士24期生として優秀な成績で卒業した。陸士では東条英樹中尉（当時）の訓育をうけている（区隊長）。甘粕正彦の従兄弟である甘粕重太郎少将（後に中将）は、私の陸士予科時代の校長であり、特に強い印象が残っている。

彼は昭和4年9月、陸軍戸山学校に入学した。ここで彼の生涯の転機となる事件が起った。落馬とも、鉄棒から落下したとも云われる怪我のために膝関節炎となり、遂に歩兵としての前途を諦めなければならなかった。

甘粕は教育家になろうと退職を願い出たが、彼の才幹を惜しむ聯隊長は憲兵になれと奨めた。軍の中では憲兵は特殊な兵科であり、思い迷った彼は陸士の恩師・東条英樹に「憲兵も軍人ですか」と尋ね、力強く肯定されたことから転科を決意した。

大正12年9月1日関東大震災が起った当時、甘粕は社会主義者の行動は国家に有害だと考えていた。大震災の混乱に乗じて彼等は不逞行為に出る疑いがあり、国家の害毒を除こうと決心していた。

当時の無政府主義者の巨頭であった「大杉栄」と妻「伊藤野枝」及び子供を、甘粕は逮捕して憲兵隊本部で殺害した。このことは周知の通り有名である。

大正12年12月8日、懲役10年の判決が言い渡されたが、大正15年10月9日、仮出所となり、8ヶ月後にフランスに出発し、3年後には彼の華やかな後半生の舞台となった満州に渡った。

昭和4年から満州事変勃発直前までの甘粕は、服部正男と名乗って奉天憲兵分隊構内の軍属官舎内に起居していた。彼が何をしたか不明だが、軍の邪魔者を押さえることが、彼の重要な仕事であったことは確かである。

昭和6年9月18日、柳条溝の爆破の際、今田新太郎大尉（前記済）等は北大営に突入した。その時の甘粕大尉の行動は39頁に記述した通りである。

事件勃発の直後、甘粕は哈爾浜に潜入した。そして工作員を駆使して夜半の哈爾浜市街でピストルを乱射させ、横浜正金銀行支店などの建物に、次ぎ次と爆弾を投げさせた。市内の治安が極めて不穏であるという印象を作り出し、治安維持を名目に軍を出動させるためであった。これは筋書き通りに進行した。

昭和7年11月12日、清朝の廢帝溥儀を天津より連れ出し、14日に営口に安着した際にも甘粕大尉が出迎え、旅順に落ち着かせる等、軍の黒幕として暗躍していた。

甘粕は表面に出たがらない男で、「縁の下の力持ちでありたい」と公式の場には殆ど顔を出さず、写真も撮らせなかった。

しかし満州国建国と同時に甘粕の名は一躍知れ渡った。彼は警務司長となり、次いで宮内府諮詢となった。だが、それまでの「影の世界」から完全に抜け出した訳ではなかった。

甘粕がむき出しに出てくるのは協和会入りの昭和12年からである。昭和12年4月、彼は協和会総務部長に就任した。「建国精神作興による国民の統合」「官民の融和」を目的にしたのが協和会で、名誉総裁は溥儀、名誉顧問は関東軍司令官であった。

それほど重要な役職に就任したのである。

盧溝橋事件が起ったのは、甘粕が協和会入りから3ヶ月後の昭和12年7月7日であった。約2週間後の8月13日、戦火は上海に飛び、日本軍は大兵团を杭州湾に上陸させ、11月13日には国民政府の首都・南京を占領した。

この勝利に日本国中が湧き上がり旗行列と歓呼の声が全国を埋め尽くした。関東軍は協和会に対し旗行列と祝賀会の開催を指令し、新京の満人、漢人たちは小旗を持って行進させられた。

甘粕は此の時、「支那の古都・南京が日本軍に占領されたことは、満州にいる4千万の漢民族にとっては悲しいことである。この悲しい時に漢民族をひっぱり出して、祝賀の行列をさせることは間違いだ」と批判した。

甘粕が大衆の感情を察し、関東軍のやり方や行政のあり方を批判したのは、珍しいことではなかった。戦争が長期化すると判断した甘粕は、それが満州国に及ぼす悪影響を思い、怒りと悲しみで心が占められていた。

昭和13年7月末、満州国外交使節団副団長兼総務部長として渡欧した。満州国を承認したドイツ、スペイン、イタリアへの答礼で、事実上の団長であった。このときヒットラーと会見している。

昭和14年春、協和会総務部長を辞した甘粕は大連の自宅にくつろいでいた。情報収集と謀略のために肩書の有無は関係なく、甘粕には閑日月はなかった。彼は再び「影の世界」に潜んでいた。

甘粕正彦の名が再び表面に現われたのは14年11月、満州映画協会の理事長就任からである。「右翼浪人が満映の社長になるのは、さすがに満州」「軍部の独裁専横の人事」「最も非文化的な人間が満州一の文化機関を支配するとは」「甘粕は人殺しかも知れないが一流の文化人だ。適材適所」などと、意見は様々であった。

満映と呼ばれた満州映画協会は、資本金500万円の株式会社で、政府と滿鉄が半分ずつ出資していた。映画統制法によって外国映画は満映の手で輸入され、それを満州全土の映画館に配給して料金をとり、その利益で映画を作製するのが此の会社の目的であった。

それまで映画製作は一向に実績が上がらなかった。その上、日系官吏の収賄事件が起った。満映を改革しなければならないと云う声が起り、役人には満映のような特殊会社の監督は出来ない。会社の理事長にはしっかりした人物をという結論になった。

そのとき後日、総理になった岸信介らが甘粕正彦を推薦し、反対者をしりぞけて彼は理事長に就任した。これは関東軍が特別に口を出したものでなく、彼の力量が高く評価されたからであった。

甘粕は日系官吏に「民心の動向を左右する映画の重要性」を説き、外貨の割当を得た。大きいばかりで能率の悪いスタジオを整備し、就任3ヶ月後、長年惰眠をむさぼっていた満映は、鞭を打たれた馬車馬のように全速力で走って行った。

昭和20年8月9日、関東軍司令部は牡丹江の第1方面軍から「ソ連軍は攻撃を開始」との報告を受け、次いで「敵の空襲を受けつつあり」との悲報が入った。民間人の中で甘粕は誰よりも関東軍の実力を知っていた。そして「子供の頃から軍人を志望し、戦いにも行けずに終わった寂しさ」を述べたという。

甘粕は11日にはソ連軍が新京（長春）に雪崩込んでくると予想し、満映の家族を

南方に疎開させるための列車を手配し、12日の午前中、新京市長公館で諮詢会が開かれた。

議題は「全市民を動員し、ソ連を迎撃つべし」という軍命令への応じ方であった。甘粕はそこで「関東軍は新京を捨てた。こういう状態で防戦し、市民を犠牲にするのは間違いだと宣言し、初めて自決の決意を口にした。

天皇陛下の放送が行われた8月15日の午後、甘粕は満映が無傷のまま次ぎの支配者に引き継がれ、満系職員によって映画製作が続けられるように配慮した。彼の意図は彼の死後、全職員によって見事に生かされたという。ソ連の占領下で日本側は「満映は満州人に返す」と宣言している。

8月20日朝6時、彼は青酸カリを飲んで自決し、数奇な生涯を終えたのであった。

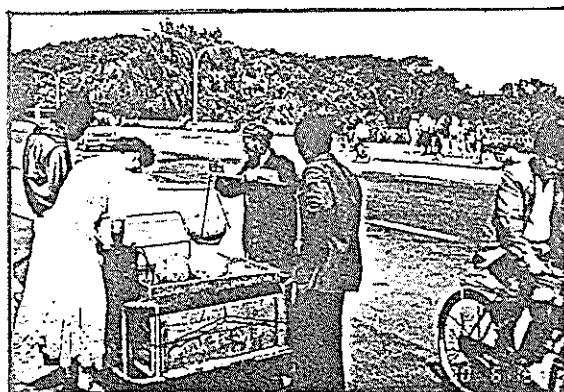
南湖公園、清真寺、関東軍司令部跡等

長春映画撮影所から長白山賓館の前を通り、南湖公園の中央にかかる南湖大橋の袂で停車した。長春市全体が緑に彩られた公園である。其の中では南湖公園が最大規模で、国内では北京の頤和園に次ぐ大公園だという。湖水は清く、取り巻く樹木は青々と繁り、視界に映る眺望は素晴らしい、羨望の至りであった。

30種以上の木々が6万本も植えられている公園、其の80%は人工の湖水で占められている。

淡水魚の養殖場と共に夏は天然プール、冬はスケート場となり、市民の憩いの場には散策する人影、のんびりと大公望を楽しむ老人などが見えていた。

これらの客を相手にした行商人は商魂たくましく、リヤカーを引いて西瓜を売った。西瓜一個の値段は四毛錢（約15円）というから驚きであった。



自然環境の優れた公園の周囲には大学が集中している。市内の学生数は約40万、全国から優秀な青年が集まる有数な学園都市ということであった。私が見た長春は駅前的一部分を除けば、都会化された農村の感じがしていた。

バスは幅50m、長さ10kmのスターリン通りを北進し、偽皇帝近くの清真寺に向かった。朱塗りの墙壁は一際引き立っていたが、山門は閉鎖されて参観は許されず、写真撮影に終わったことは残念であった。（右は山門と墙壁）

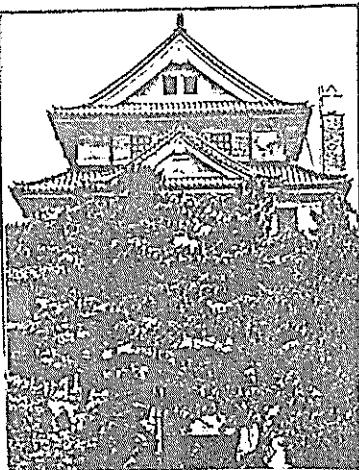
墙壁には弥陀の称号である「南無阿弥陀」が書かれてあり、一礼して合掌した。文献によると開山和尚の倓虚が十万衆林常住院と名付けたラマ寺院である。全国の重要文化財に指定された此の寺も亦、文化大革命では破壊された。長春市では資金を捻出して元の姿に修復し、現在では市の文化財として保護している。



清真寺から上海路を抜けたところに聳え建ち、他を睥睨している三層四階の天守閣が旧関東軍司令部であった。現在は中国共産党吉林省委員会（省政府）となっている。私が初めて渡満した当時、植田謙吉軍司令官に申告した想い出の建物だ。駅前から一望できた地は今では街の中心地となってしまった。

「人生は白駒の隙を過ぐるが如し」「人生は原是れ一つの傀儡なり」と言う故事が脳裏に浮かんでいた。

勿論、敷地内には脚を踏み入れることは許されず、口惜しいことだが写真撮影だけで我慢しなければならない。雄壯巍然とした威容は往時の面影を遺し、万感胸に迫る思いを抱いたことは当然であった。（関東軍に就いては後記する）（右は旧関東軍司令部）



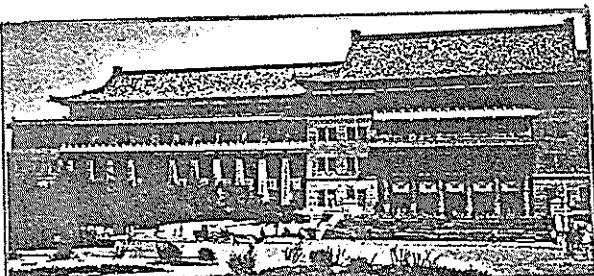
古き良き時代の香りが漂う薔薇とした樹木、世界に万丈の気を吐いた本陣の天守閣、敗戦このかた唾棄すべき唯我独尊の元凶と罵られた牙城、それは未だ稟々とした森の中に幽恨を遺すように建っていた。

黙然と考えながら余韻嫋々とした戦乱興亡の時代を回顧し、「創業は易く守成は難し」という言葉を嗜み締め、紅潮した顔を更に紅潮させながら去らねばならなかった。

バスは再びスターリン通り（斯太林）から新民大街の「地質宮」へと進んだ。

皇帝溥儀は狭くて貧弱な皇居に飽き足らず、新皇宮の建設を計画し、この広大な地を選んで基礎を造った所であった。

清朝末帝として紫金城（現故宮）の絢爛豪華、広漠な宮殿で育った彼が、あの狭隘陰鬱な住居では威儀上からも、当然不満だったと思う。



しかし基礎の時点で敗戦を迎えた。天空には灰色の靈魂が覆って夢は実らず、幽囚の人となった彼は、如何なる星の下で生まれたのであろうか。

そのような因縁の基礎の上に建てられたものが、上の写真のように民族色豊かな建物で、現在は長春地質学院となっている。前の広場は50万人の集いが出来る広さで、日本の皇居前広場に憧れて計画した新皇宮、肺甲斐なくも敗れて彼の亡靈が彷徨っている思いがする。嗚呼悲哉。（昔は今の北京の天安門広場はなかった）

長春市内の観光は終了し、昼食は駅前近くの長江路（旧吉野町）にある日中合弁レストラン「聯誼餐厅」であった。

昼食後、長春動物園に入園して大きな東北虎を見惚れていた時、「山雨来たらんと欲して風樓に満つ」の詩の通り、天も地も一瞬のうちに暗黒と化し、沛然とした豪雨は雹を混えたスコールであった。

逞々の体でバスに戻ったところ、排水の完備していない長春市街は道路に水が溢れ、川のようになって流れる中で、人も自転車も自動車も立ち往生、小1時間ばかり待機して長春駅に急いだ。

関東軍

戦中派以前の人達には、関東軍について「独走するもの」という印象が強い。一つの組織体の中にある部門が、周囲の意向を無視して独走した場合、「ああ、あれはウチの関東軍だ」と批判された事があったぐらいだ。関東軍に痛め付けられた過去を持つ支那さえも、関東軍をこれと同じく比喩に用いるそうだ。

関東軍の「関東」というのは、山海關の万里の長城以東、即ち奉天（遼寧）、吉林、黒龍江の3省に対する名称である。換言すれば満州の別称のようなものだ。

「関東軍」というのは、日露戦争直後から大東亜戦争の終期まで満州に駐屯し、日本の対支政策の尖兵的な役割を演じた軍隊である。しかし此の軍隊は初めから関東軍という名称を持っていた訳ではない。

かなり広範囲な地域に対する名称を、その一部にしか当らない遼東半島に「関東州」と名付けたのは、1898年以来ここを支那から租借していたロシアであった。

日本は1905年、日露戦争の勝利の結果、この租借権をロシアから譲られる同時に、支那側の抵抗を斥けて、この誇張的な呼び名をそのまま踏襲した。そして又、満鉄付属地として長さ430km、幅は鉄道線路を中心に62mの帯状地帯を入手した。

やがて租借地に根拠を置く駐劄1ヶ師団、独立守備隊6ヶ大隊、合計約1万の兵力を持つ日本軍にも「関東軍」という名称を与えた。時は大正8年であった。

関東軍は終始一貫してロシア（ソ連）を仮想敵国とする「北向きの軍隊」で、この軍隊の基本的な性格を形成していた。日露戦争後、日本はむしろ北方の脅威から次第に開放された。

一方、関東軍の鼻先の支那では、辛亥革命（1911）が発生し、それから蒋介石の北伐完成（1928）までは、内戦に次ぐ内戦であった。それを見た関東軍は支那の内戦に干渉し、それを通じて予てからの満蒙進出の夢を実現しようと計った。

満州事変の結果として作った満州國（1932）は、そうした意味では唯一最大の成果であった。そして此のような「北の守り」を忘れたような行動も、実は満州を手に入れ、ソ連に対する備えを固めることが究極の目的であった。又、この行動に伴う関東軍の謀略も、この軍隊を特徴付けるものであった。

1936年、関東軍は本来の北の守りに立ち帰った。それは満州國建国以後、関東軍が此の国の軍權を握り、漸く極東の軍備を固めつつあったソ連軍と直接、国境線で向い合う事になったからである。

以後「ノモンハン」事件が代表する国境紛争事件、打倒ソ連軍を目指して行われた「関特演」という名の大兵力集中など、一連の対ソ事件を引き起こした。

第二次大戦末期になり、ソ連軍の進攻の前に打つ手もなく完敗し、関東軍は其の40年の歴史を閉じた。「泣く子もだまる関東軍」は将に「北の守り」の任務の中で、永遠の眠りに就いたのであった。

終戦時の「無敵関東軍70万」は頭数を揃えただけの軍隊で、実質の戦闘能力は2ヶ師団に過ぎなかったと言われている。南方戦線の悪化に伴い、関東軍の主力20ヶ師団は南方各地に引き抜かれ、大砲、戦車、重火器から飛行機、弾薬の多くが南方に転送されている。

このような関東軍70万とは朝鮮人、満人、支那人を含んだ数字で、小銃さえも

5人に1挺がやっとだったという。竹槍や鎌で武装（？）しただけの実態では、団体ばかり大きくて戦闘力は皆無に等しい。正に満州馬賊に劣る戦力であった。

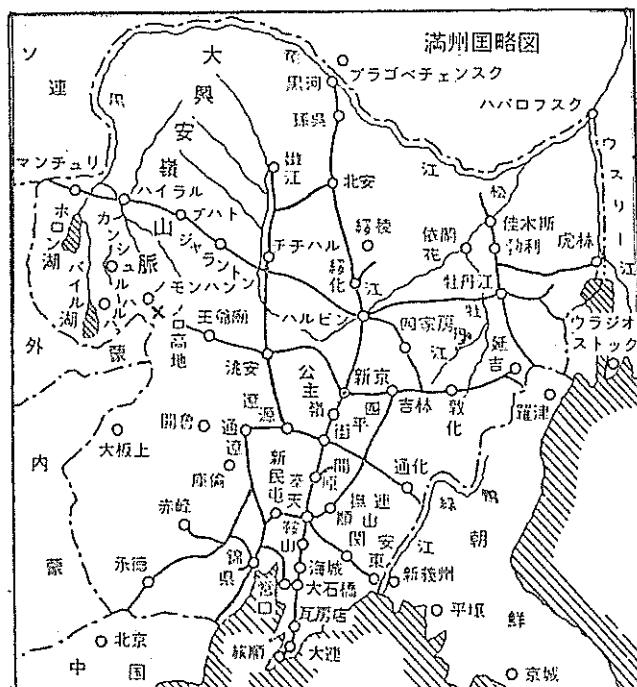
関東軍は其の行動の中で、屢々中央部に背いて独走したと言われている。

作戦要務令の綱領第五条に「凡ソ兵戦ノ事タル独断ヲ要スルモノ頗ル多シ而シテ独断ハ其ノ精神ニ於テハ決シテ服従ト相反スルモノニアラズ常ニ上官ノ意図ヲ明察シ大局ヲ判断シテ状況ノ変化ニ応ジ自ラ其ノ目的ヲ達成シ得ベキ最良ノ方法ヲ選ビ機宜ヲ制セザルベカラズ」と書かれている。

関東軍の独断専行も機宜を得たものもあれば、反対に得なかつたものも多いと判断される。所謂、独断は結果が良くなければ独断ではない。結果が悪ければそれを専恣と言う。即ち我儘であつて非難されなければならない。ノモンハン戦は特に独断による失敗戦で、専恣と言うべき戦闘であった。

関東軍のような大軍を擁すると、高級幹部ばかりでなく下級幹部に到るまで、力を背景にして唯我独尊の選民思想が強くなり、その結果として排他的な意識が高揚され、遂に悪夢的な発想に結び付くのではないだろうか。その点は戦闘遂行中の軍では考えられず、生と死の戦闘中は余念が生じる暇がない。

高級幹部の心理は経験のない私には判断できないが、戦功に焦ることは考えられる。彼のマッカーサー元帥の、朝鮮戦争時の独走と独断専行は好例ではないだろうか。反撃に成功して中国領域にまでも進攻せんとした際、トルーマン大統領は直ちに首を切った。戦争は政治の延長であることを、常に第一線指揮官は忘れてはならないと戒めたのであった。



長春～哈爾浜

長春駅を14・30に発つた客車はクーラーではなく、天井の小さな扇風機の微風だけでは暑さを凌ぐことは出来ない。満州の六月は日本の真夏の温度、終戦時に手の平を返したように難民と化したの日本軍民の苦勞が偲ばれてくる。

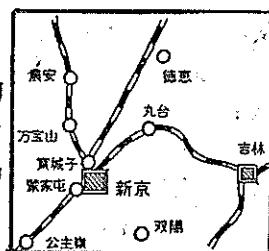
大雪崩のように崩壊した日本の陰に、不運な生活を強いられた皇帝溥儀一族、特に皇帝の弟である溥傑氏には深い印象が残っている。実に懐かしい。私が陸大再審の時には同じ班員であった関係から、親しく会話を交わしたのであった。彼の階級は満州國軍の大佐であったと記憶しているが、所謂、留学生であった。

時の流れとはいへ惻隱の情は抑え難いものばかりで、列車が発車すると長春近郊で発生した万宝山事件が想起されてきた。

『万宝山事件』

昭和6年5月、長春北方約24kmの万宝山附近の荒地に、約200名の朝鮮人農民が入植し、支那地主との間に小作契約を結び、日本領事館の許可もあったから、彼等は用水路を掘り出し始めた。

(当時の朝鮮は日本に併合され、朝鮮人は日本国籍であった)



5月24日の朝、突然、伊通河の岸に百騎余りの武装支那兵が現われ、工事の中止を迫った。用水路が完成すると、その水源である伊通河（長春市内を流れる）に氾濫が起る危険があるということから、支那農民がこれに反対した事が原因である。

7月1、2日の両日にわたり、万宝山一帯の支那農民1千名が大挙して襲撃し、工事阻止のために実力行使に出た。殊に2日には支那人達は銃を発射したが、日本側警官も機関銃3挺を据えて発砲した。

支那側では更に其の10倍の武装公安隊を繰り出し、危険は刻々と迫った。日本側の隠忍自重で交戦だけは辛うじて避けられたが、事態は重大化していった。

6月3日、支那公安局長が自ら日本警官の撤退を要求している時、暴民が押し寄せ、2名の朝鮮人に皮膚を剥ぐような暴行を加えた。4日に至って数百人の暴民が獵銃を持ち出して示威運動を行い、日本警官に数発発砲した。

9日、日本警官は武力に訴えても、水路の開発を続行しようとする意気を示したため、支那側も折れて公安局長は部下を率いて長春に引き上げた。

しかし、此の事件の最大の問題は現地の紛争よりも、これを理由として、朝鮮に住む支那人に対して朝鮮人が行った報復行為であった。

騒ぎは7月4日仁川に始まり、京城、元山、新義州に広まり、5日夜には平壤に波及し、事態は最高潮に達した。彼等は手に手に凶器を持って支那人家屋を襲撃し、掠奪、破壊、放火など、ありとあらゆる暴動を働き、支那人で殺された者109名、負傷した者160名以上に達した。

この朝鮮人の行動は、万宝山で多くの朝鮮人が惨殺されたという、朝鮮日報の事実無根の記事に触発されたものであった。朝鮮日報は支那・朝鮮両民族に謝罪したが、支那では排日運動が盛んになった。

こうした情勢下で、参謀本部作戦課勤務の中村震太郎大尉（陸士31期）が興安嶺地区で殺害される事件が発生し、日支間の緊張感は高まり、柳条溝爆破に連動した。

地球という星の上で争いが絶え間のなかったことを思い浮かべながら、蒼茫とした大陸の広野を眺めていると、第二松花江の流れが見え出し、停車した駅は「陶賴昭」であった。（右地図参照）

17・35に省境の蘭陵を通過して、18・00に「双城堡」駅に停車した。双城堡駅の屋根には大きな竜が飾付けられ、皇帝に関する由緒ある地に違いないと直感した。通訳に尋ねると帝政ロシア時代の王族の都だったと答えていた。

帝政ロシア時代に竜の飾りは納得できず、文献で調査したところ、「金国」（1125～1234の間、存続したシングース女真族の王朝）の始祖である太祖の誓詞の地であった。

「女真文大金得勝陀碑」が有名で別名を扶余とも云うが、金国に就いては後記したい。（右下は双城堡駅の看板）

地名は近くの東閏双と西閏双に因んで名付けた。清朝の半ば頃に封禁の制が解かれて漢民族が入植し、街は発展したといわれている。車窓から眺める町並みは赤松で覆われ、金国の発祥の地をみたことから、歴史探訪の意欲が燃え上がってきた。

地形は北に進むにつれて稍々変化が見えて出し、懐かしい放牧の光景が展開していた。馬の多いことは彼等は蒙古系民族であろうか。同じ黒竜江省の齊々哈爾に勤務した時のことが、彷彿として瞼に浮かんでいた。齊々哈爾は内蒙古との省境に位置している。

列車は延着して哈爾浜到着は18・55であった。朝鮮人テロリストによって、哈爾浜駅頭で暗殺された「伊藤博文」の銅像は、終戦時までは厳然と立っていたが、どこに眼を遣っても其の姿の見えないのは寂しい感じがする。ここに若干、伊藤博文に就いて記述し偲ぶことにする。

『伊藤博文』

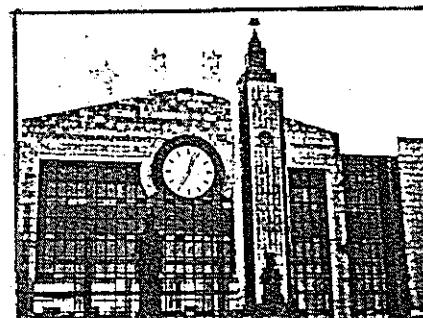
伊藤博文は日露戦争当時の総理大臣で明治の元勲である。戦争後の伊藤博文が身命を賭し、朝鮮統監として日鮮合併を推進したのは、植民地化を意図したものではない。日本の貴族と朝鮮の王族の婚姻を奨めたのは、親族関係的に交流を図りたい心の発露であつた。

英國がインドを300年近くも植民地とし、そこで栽培した阿片を支那に密輸して、半植民地化を企てたような侵略行為と、同一に譯るべきではないと考える。（右は哈爾浜駅）

伊藤博文は松下村塾の吉田松陰の教育を受けた人で、長州藩の農家の生まれでもあり、朝鮮人を奴隸のようにしようとしたとは信じられない。

しかし誤解した朝鮮人テロリスト「安重根」によって、彼は哈爾浜駅頭で暗殺されてしまった。誠に痛恨の至りである。

昨年完成して新装なった哈爾浜駅頭に立つと、直ぐ前に旧大和ホテルが見えていた。東南に走る中山路を通り、天鵝飯店に落ち着いて二泊することになった。



6月20日 (水) 快晴 哈爾濱の概要

哈爾濱 (H A - E R - B I N) という地名は「網を干す場所」という意味の「滿州語」である。

現在「ハルビン」と呼称されているが、日本の占領時代は「ハルピン」（日本語読み）であった。現地の通訳の話ではどちらも通用すると答えていた。

松花江の右岸に拡がる此の町は約800年前、満州族の祖先にあたる女真族が住み着いたのが始まりで、支那本土に進出して「金国」を創建したのも、哈爾濱附近を根拠とした女真族の「阿骨打」であった。

(全国に就いては後記する)

18世紀までは小さな漁村に過ぎず、阿片の原料である真っ赤な芥子の花が、一面に咲き乱れていたという。

1898年、帝政ロシアが此処を東支鉄道（東清鉄道）建設の根拠地として買収してから発展し、ロシア風の新市街を建設した。（右は哈爾濱地図）

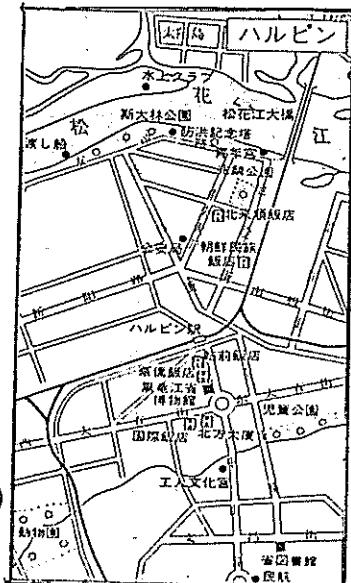
第一次大戦後は清国の勢力下に戻り、満州事変後から第二次大戦終了までは日本の支配下にあった。

東北では瀋陽に次ぐ大都市だが歴史は浅く、五本の鉄道の交差点であると共に松花江の水運の中心地である。又、東北北部地方の商工業の中心として発達し、消費都市から大工業都市へと生まれ変わっている。

市街地の人口は160万、郊外を含めた市の人口は370万と云う。私が在満した当時は浜江省の省都であったが、浜江の名は哈爾浜の別称である。一方、ロシア語では「キタイスカヤ」と呼び、現在もキタイスカヤ通りは最大の繁華街で、ロシア建築が建ち並んでいる。

長春と同じく新しく造られた街は、濃い緑に覆われて美しい町並みが続き、「白鳥の首に掛けた真珠」の城だと云われている。冬は札幌の雪祭と同様に「哈爾濱冰雪祭」が行われ、又、広州、上海と共に中国三大音楽祭も行われる街である。

哈爾濱西方にある中国最大の油田「大慶油田」は全国生産量の33%を占め、松花江北方平野が米穀の主産地となったことも、哈爾濱発展の原因のようにも考えられる。



スターリン(斯太林)公園と松花江遊覧

8・30にホテルを発ったバスは中山路を北に進み、駅前の旧大和ホテルの角を右折し、鉄道線路を横切って陸橋を渡った。右手向こうにロシア正教のドームが眼に映った。現在は信者もなく哀れにも倉庫となっていたが、宗教と雖も時代の流れを扼止することは不可能であった。

中央神社のあったロータリーを通り、北に延びるキタイスカヤ通りは中央大街と名を変えていた。このキタイスカヤの北端が、松花江南岸のスター・リン公園であった。

ソ連ではスターリンの名の付くものは消え去ったが、満州やモンゴルでは其の名は未だ生きていた。理由は何であろうか。

臨む松花江は「清風徐ろに來たりて水は興らず」という静かな流れだ。公園入口の高い「防洪記念塔」は他を睥睨し、天空を衝かんばかりに聳えている。(右の写真)

1957年の松花江の氾濫では二千人の死者を出し、市民の協力によって洪水を防いだ事を記念した塔だと、通訳は説明していた。しかし、これは直接水防に成功したのではなく、洪水後に50kmに及ぶ堤防の完成を記念したものである。

中共は総てを変えてしまった。支那では古代から治水の神様として夏の禹王を祀る習慣があり、全国至る所に禹王廟が建っていた。今やその習慣までも葬ってしまったのであろうか、実に寂しい感じだ。禹王の治水の根本は水の本性に従ったのであった。低きにつく水にさからわず、流すべき所に流した。その神を祀る慣習は、国家の伝統文化として保存してほしい。

松花江の南岸に沿った幅50m、長さ2kmの公園は、大樹が陰をつくって涼風を呼び込んでいる。水上クラブやレストラン、スポーツセンターなどがあり、対岸の太陽島が一面に拡がっていた。

薄い茶色に濁った松花江の流れは、我々日本人には汚い感じがする。しかし現地の人達は泳いだりして水遊びに戯れ、釣りやボートに興じていた。中には髪を洗い、身体に石鹼を塗って水浴する姿まで見受けられ、衛生面では昔ながらの未開の国だ。

公園の各所に楽器を持ったロシア人少女の像が立っており、哈爾浜を開発したロシアの名残りを留めている。その一方、日本の神社そっくりの建物が建っていた。日本の占領下時代に祖国を偲んで建てたものであろう。今は中国人の経営するレストランに改造され、我々の心境を何と表現したらよいのか、其の言葉も知らない。

丹頂鶴の格好をした帽子を被り、揃いのユニホームを着た中年女性の一団が眼に留まった。1年の3分の2が冬で夜の長い北満、日光浴を楽しんで松花江の河畔を散策しているのであろう。

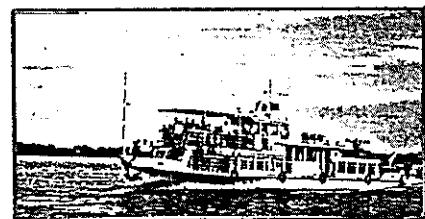
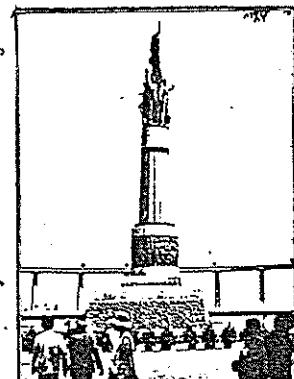
日本から飛来してくる丹頂鶴や白鳥は、4、5月まで松花江で羽ねを休めているらしい。それから北のシベリアの奥地に飛び立つ渡り鳥、彼女達には国境はなく、人間世界にも早く其日の到来を期待したいものである。

バスに乗車して松花江遊覧の乗船場に移動した。快適な空間をつくった大河は緩やかに流れ、生命力を象徴する豊かな水量、クルーズは優美な夢物語りだと一行を誘っているようであった。

遊覧船は上流に遡航してから反転し、下流の鉄道橋へと滑るように走った。対岸に見える太陽島は平坦な低い中州で、避暑や保養地となっている。洪水の時には沈没するような感じだが、恐らく帝政ロシア時代から開発していたのであろう。

(右は遊覧船と遠くに見える太陽島の島影)

デッキに立つた私の頬を軟らかな風が撫でていた。自然の河風の味は実に心地よく、満州入りして以来、初めて心の緊張感が解けたようである。



我々年代の者では悪名の高い「馬占山」を知らない人はいないだろう。その馬占山が馬賊の頭目として頭角を現わしたところは、哈爾浜北方の「海林」であった。その後、齊々哈爾の主となったが、太陽島を眺めている時ふと頭の中に浮かんだ。

馬賊出身の彼は僅か13年の寿命しかなかった幻の帝国、「満州国」の軍政部総長の地位にまで出世している。

馬占山と同じく馬賊出身で義兄弟の盟約を結んだ仲の「弓長景惠」も、哈爾浜出身であった。彼は満州国の第二代國務總理になっている。清朝末期時代の満州の青年達は、出世の足掛かりとして馬賊を選んだ。群雄割拠の中での出世は武力に頼らねばならなかつたが、その時代の懐かしい歴史を遊覧船上で懐古していた。

松花江遊覧を終えた一行は、キタイスカヤ通りの松浜飯店で昼食をとり、午前の観光は終了した。

『松花江の伝説』

昔、黒竜江地方に美しい蓮の花の咲き乱れる蓮花湖という湖があった。この湖に何時の間にか小白竜という獰猛な竜が住み着き、湖の中で暴れ回ったために蓮は枯れ、魚や貝は死んでしまった。

東海を治めていた竜王はこれを聞き、大黒竜をつかわして小白竜を懲らしめようとした。しかし、大黒竜が湖にもぐると水が真っ黒に濁ってしまい、2年間かかっても小白竜を捕らえることが出来なかつた。

2年目の夏、地上では松の花が一齊に咲き、その白い花が湖に散って水面が真っ白になつた。それまで濁っていた水が澄んできて、湖の底に潜んでいた小白竜の姿が見つかった。それで大黒竜は遂に小白竜を捕まえることが出来た。

小白竜を捕らえて懲らしめた後、大黒竜はばらばらになつて山や河を並べ変え、3本の長い河を作つた。これが現在の黒竜江、ウスリー江、松花江である。

嘗て美しい白い花を咲かせていた松の木が、花を付けなくなつたのは此の時からだと言われている。

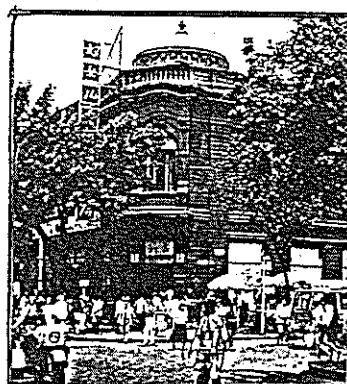
キタイスカヤの散策

哈爾浜はロシアそして日本の統治という歴史が街を興し、歴史が浅い性か観光資源は少ない。美しい自然は古来、山と緑の濃い樹木、清い水によって支えられて來たから、この地に美景を求めるることは酷である。

大樹の緑の中をそぞろ歩いた河畔は旅情を幾分慰めたものの、次の観光は沸騰するような渦中の人混みのキタイスカヤであった。

キタイスカヤのロシア語の由来は判らないが、四世紀以来、東モンゴルのムレン流域に遊牧していた「契丹」(キッタン)を「キタイ」と呼んだことから、キタイスカヤと命名したのではないかと、牽強付会というか、勝手に想像していた。(右はロシア建築)

百貨店や専門店、銀行、食堂樂街が並ぶキタイスカヤは、躍動的な雰囲気が漂つてゐた。



一行の中には哈爾浜や其の近郊に居た人が多く、彼等は全身の毛穴から冷たい汗を吹き出すように、心は様々な想いで錯綜していたことだろう。

繁華街の主な建物はロシア建築が多く、私は特に感傷に浸ることもなく写真撮影に耽っていた。ところが、街の中を歩いている若い娘達に、別嬪の多いことに驚いた。

昔は蘇州美人と騒いだが、今では哈爾浜が全国第一ではないだろうか。何代にも亘るロシア人ととの混血の天恵を受けているのであろう。

通訳は語った。哈爾浜は美人の街だと。昨年、北海道から5人の青年が嫁搜しに此の地を訪れ、何と4人の縁談が成立したと言う。日本の農家の青年諸君よ、嫁搜しは東南アジアばかりでなく、別嬪さんを希望する者は眼を哈爾浜に向けるべきだ。気候的にも東北、北海道は最適である。

飛ぶように売れているアイスクリームを口にしながら、徘徊している美人も眼の保養であり、人混みに連れられるように「地段街」へと脚を運んだ。第一百貨店や新華書店などの並ぶ此の通りも、活気に溢れて殷賑を極めていた。しかし、それらの大建築物は全てロシア建築である。（上の写真はロシア建築の第一百貨店）

地段街の一角に百十一軽工市場があり、食料品、家具、軽工業品（織物が主体）の三部門に分れている。松花江でとれる珍しい魚や野菜は、市民の生活を知る上で興味のある場所であった。

しかし臭氣芬々として希望と現実が混同し、右顧左眄することなく倒置の民のように抜け出した。そこへ太陽の熱射が待ち構えて、招かれざる客のように昼食時のレストランに飛び込んだ。

春秋時代の越の「西施」に優る美女の街を散策したのち、一旦ホテルに帰館して小休止となった。

15・30に再びホテルを発ち、華僑友誼公司の現地人用デパートに案内されたが、食指が動くような品もなく、福寿樓で夕食を終えて今日の観光は終わりとなった。

6月21日 (木) 快晴 関東軍

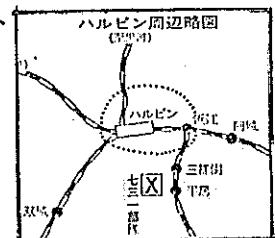
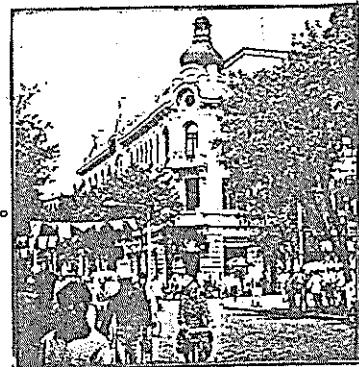
第731部隊（細菌）跡

同氣相求める旅人の間には近親感が湧いてくる。静岡より参加した秋山、内田、平野、松下君の壮年の諸君とは、年齢を度外視した膠膝の友となった。肝胆を碎くように第731部隊見学の意見が一致し、前日、通訳にタクシの手配を依頼した。

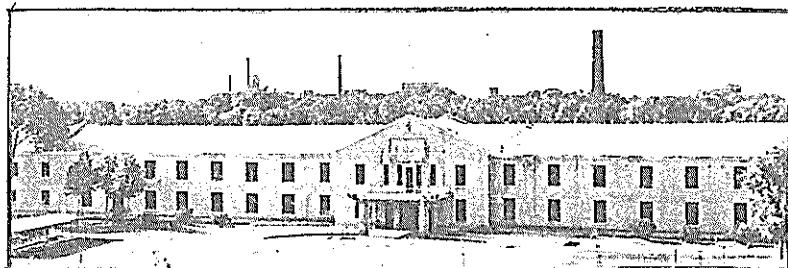
幸いに通訳も同行して一行5人は8・00にホテルを発って、哈爾浜東南20kmにある平房の第731部隊跡へと駆進した。

静かな離れた幽絶の地に向かう街道は、哈爾浜～長春～瀋陽～北京に通じる幹線道路であった。

郊外の医科大学を過ぎた頃から車両の数は減り始め、車窓から大平原を眺めて快走した。タクシは突然右折した。そこは哈爾浜市第17高級中学校であり、即ち第731部隊跡であった。



校長は案内もなく訪れた我々を発見して飛び出してきた。通訳は一行の主旨を説明し、資料展示室の参観の許可を与えてくれた。



車中で老子の名言

『天網恢々疎にして漏らさず』の意味を噛み締めていた。天は大きな網を張っている。その網の目はあらいよう見えるが、何んな小さい事でも漏らすことはない。必ず悪事は露見するもだ。（上の写真は第731部隊本部。現在中学校校舎）

昭和20年8月9日未明、不可侵条約を一方的に破棄したソ連軍は、150万の兵員と5,500台の戦車、5,000機に及ぶ空軍機、それに多数の海軍艦艇をもって、雪崩のように国境を越えて対日戦争を開始した。

間髪を入れず第731部隊は、直ちに各施設を杯盤狼藉のように破壊すると共に、捕虜全員を青酸加里で毒殺して証拠隠滅を図ったらしいが、上記の言葉のように、天は漏らさず暴露して醜態を晒したのであった。

第731部隊本部のあった校庭に生えている僅かな木は、嘗てここに居た人々や、無惨な死を遂げた捕虜のことは少しも知らず、春が来れば春の花を、夏が来れば夏の花を依然として咲かせているのだろう。

校舎の右に廻って裏手から校舎内に入った。その校舎一階の端にある二部屋が第731部隊の資料室となっていた。玄関に掲げた「原日本關東軍第731部隊遺跡」（原=現）「日本軍国主義侵華罪証」の看板は、私を指弾しているような感じがする。

戦争を知らない若い三人の中国女性は笑顔で我々を迎えてくれた。これは正しく「君子は人を陥に困めぬ」という故事の通りで、人の心の苦しみを苦しめないようにといった心遣いであった。

最初の資料室は凡て写真の展示であった。当時の支那全土に渡った日本軍細菌部隊の配置図によると、北は孫吳から南は広州に至るまで、11ヶ所に配置されていた。このことは、戎衣をまとった時代の私には全く知らないことであった。

多くの展示した写真の中で目立ったものは、大きく引き伸ばした第731部隊長「石井四郎陸軍軍医中将」の写真だ。

千葉県出身の彼は四高、京大医学部卒の逸材で、運命の魔物に左右されて悔いを千載に遺すことになったが、何し申してよいか辞を知らない。（右は展示されていた石井中将）

各部隊長及び幹部の合同した時の写真も中将の横に展示し、官氏名まで詳細に掲示されていた。彼等は各大学医学部の錚々たる一流学者達で、生体実験の出来なかった内地の医学者は軍医として、或は軍属として第731部隊に招集された。そして細菌の研究から生体実験へと歩んだことは、軍の制度上から、受難の歴史であったと云わなければならぬ。



生体実験現場を写した十数枚の写真の前に立つと正視することに耐えられず、亡靈に取り付かれて末期の声が聞こえてくるような気がする。

その冷酷さは不愉快を通り超して眼をそけたくなるばかりか、挽歌が聞こえてくるような錯覚に陥るのである。（右は生体実験の写真の一枚）



幽靈のように落ち込んだ眼、生ける屍といった酸鼻な光景の写真を見た時、死戦を体験した私と雖も平常心に戻った現在では、骨の髓からお詫びしたい心境になってくる。

実際のところ、戦場心理は考えられないほど平常心を喪失するものだ。又、筆舌では尽くせない本能と抑圧の葛藤の場のために、人面獸心になることも真実である。

木端微塵に粉碎してしまった部隊跡に、このような資料の写真類が遺っていたと感心していたところ、これらは戦後、日本から寄贈されたものであった。2500名近い部隊員の中には苦悶の心情から開放されたいと、懺悔の心を込めて寄贈したのであろうか。

心を鎮める暇もなく次ぎの資料室に移動した。ペストやチフス菌などを増殖するための各種の鼠、鼠を捕獲する鼠捕籠が展示されていた。（右の写真）

ペストなどの病原菌を伝播する有力な媒介物として鼠と、鼠に寄生する蚤を研究していたのであった。

鼠と蚤を病原菌で汚染して人体に接触させ、或は敵地に大量の鼠と蚤を散布する。この難問を解決するため、捕虜を使って生体実験したのであった。

勿論、細菌戦は小動物や昆虫だけではない。井戸水や飲料水に混ぜれば立派な新兵器となり、これらの生体実験も行われていたという。

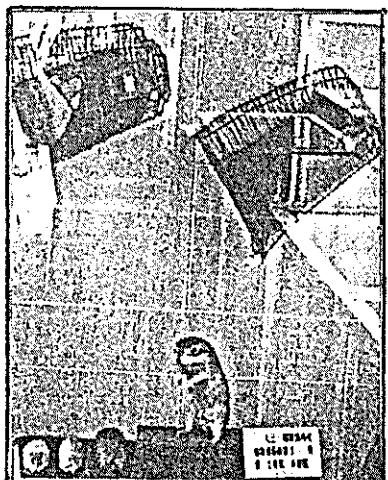
人間性の一片も認められないのが戦争である。「己の欲せざるところを人に施す勿れ」と諭した孔子の言葉は、戦争では秘術を尽くして逆の行動をとらねばならない。その為にも最高の医学の知識を要求するという矛盾が生じる。根本原因は戦争にあると言わねばならない。

その展示室の一角にペストなどの細菌を入れて飛行機から投下した、幾つかの細菌弾が展示してあった。それには美國製（美国は米国のこと）と標示されていた。

ベトナム戦争で投下した枯葉剤のものか不明だが、このような細菌戦の研究は日本軍のみならず、世界各国では研究に没頭していて事は疑う余地はない。

人生は幾度か過去のことを痛み苦しむことは常だが、声もなく此の世から消えていった被生体実験者たちのことを思うと、幾重にも低頭して懺悔しなければならない。

【右は米国製の枯葉剤弾（？）か細菌弾（？）】



若い管理人の女性はノートを差し出し、見学をした感想を記載してくれと依頼してきた。



曠野の中から無念の叫び声が聞こえてくるような心理に陥りながら、ペンをとった。「旧日本軍の数々の悪行をお詫びすると共に、本日この地を訪れた機会に心を新たにし、生涯を通じて日中友好親善に尽すことを誓う」という主旨の、簡単な感想文を記載して署名した。

静岡の四名諸君も名を連ねて署名し、時間が切迫して去らなければならなかつた。(右も前頁と同じく米国製の化学弾の一種)

運命の浮き心のよう空はコバルト色であった。宙の一点に眼を据え、当時の状況を想像しながらタクシに乗車した。しかし余韻は永く尾を引いて、何処までも続く細糸のようであった。

第731部隊の正式名は、「関東軍防疫給水部本部」である。戦争が酣となつた頃の内地の部隊でさえも、通称号が使用されたように、野戦部隊では秘匿上、当初から通称号を使っていた。しかし正式な名称ではない。関東軍防疫給水部の通称号が満州第731部隊である。

防疫給水部は野戦軍には必ず編成され、防疫や給水が任務であった。

私も黄河沿線の戦闘では、黄河の泥水を飲用することは出来ず、防疫給水部の厄介になつたことは屢々であった。恐らく当初の第731部隊の任務は同じであろう。

第731部隊が極秘のうちに細菌部隊にとつたのは満州國成立の翌年、昭和8年であった。哈爾濱南方20kmの平房に、約6km四方の特別軍事地域を設定し、常時80~100人を収容する監獄、大小多数の医学研究室、2500人及ぶ隊員と家族が起居する宿舎があつたと云う。

関東軍は支那戦線で捉えた捕虜、ソ連兵の逃亡者やスパイ、憲兵隊や特務機関などで捉えた敵性者を、第731部隊に送付した。そして彼等は細菌戦の研究や実験の生体材料となつた。

石井軍医中将を長とする多くの医学者や研究者が軍属として配置され、あらゆる種類の伝染病を研究した。

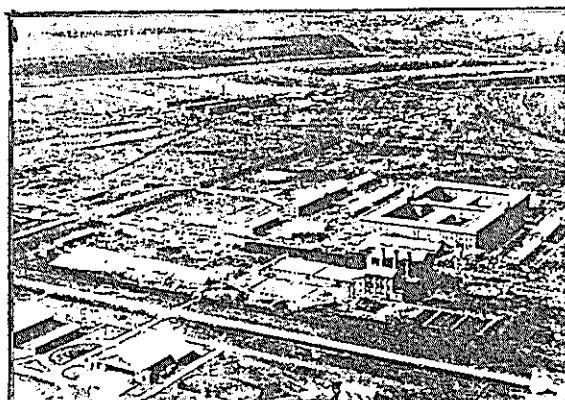
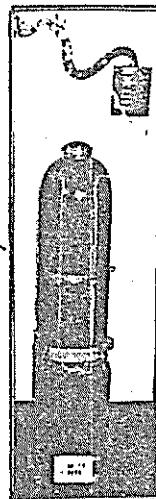
ペスト、コレラ、チフス、赤痢、結核、ライ病、梅毒などの大規模な細菌製造工場が設置され、多種多様な細菌の培養が進められた。(上は当時の全景)

第731部隊では送り込まれた捕虜を、2日に3体のペースで生体実験の材料とし、その数は3000人にも達したと云われている。対ソ連、対支那、対米国を想定した細菌戦の研究は、終戦直前まで研究されていた。

細菌戦の実態は千変万化であろう。敵地内に侵入して細菌をばら撒く攪乱謀略戦術、航空機や砲弾で細菌を散布して汚染する戦術など、医学専門者だけでは考えられないことも、多かつたと考えられる。

戦後、石井中将以下の幹部に対し、戦争犯罪の責任は追求しないということで、第731部隊の細菌戦の研究資料を米国に引き渡したという噂もあるが、我々には知る術もない。ただ当時の石井部隊の研究は世界最高だったことは事実のようだ。

旧陸軍では防疫給水部の他に、野戦軍には兵站病馬廠という部隊があつた。軍馬の



防疫と入院治療を主たる任務としていたが、関東軍では此の部隊にも家畜や植物を対象とした細菌戦を研究させていたという。

旧陸軍の習志野学校は昔から毒瓦斯の研究機関として知られている。防毒関係からイペリット、ルイサイト等の麻痺瓦斯、戦車及びトーチカ攻撃に使用するチビ弾（青酸）等の研究が主目的であった。（陸軍では瓦斯とガスとを区別していた。ガスとは毒煙の催涙ガス、くしゃみガス等で、致死的な猛毒瓦斯は漢字で書いていた）

戦場に於いて麻痺瓦斯のイペリットを使用した経験者は僅少であろう。私は中隊長時代に寡兵を以て衆敵と戦うため使用した一人で、眼に見えない犠牲者にお詫びすると共に、懺悔している。（拙書「両忘」に詳しく述べてある）

生か死か、それが戦場である。戦闘では勝たねばならない。殊に死地の激戦場となると、常道手段では犠牲が多くて任務の達成が出来ない。任務の重圧に耐えかねた指揮官は自然に詭道手段を使用する。それが死闘戦場の実相であった。

そこでは平常心では考えられない戦場心理が作用し、或る種の野獣性というべき、人間性を喪失することが常であった。その心理状態は白骨戦場の体験者しか理解は困難であろう。

米軍はベトナム戦争では5万5千トンの枯葉剤を使用した。全国の32%が被害を受け、森林の5分の1が禿野原となり、遂に奇形児が生まれる原因となった。悲しいことだが、狂気にならなければ戦闘遂行は不可能であったのであろう。

これらは死と対決した私の貴重な経験からの結論である。満州、支那事変、大東亜戦争に於て、外地に出征した人は3百万にも達しているが、本当に戦友の屍を背負つて激戦した人は僅少であり、だから戦争反対を唱える心は人後に落ちない積りだ。

新聞報道によると、北朝鮮は生物化学兵器の実戦配備が終わり、イラクも亦、使用的可能性が濃厚だと伝えている（平成2年8月15日現在）。宇宙戦争時代に突入した現代戦を考えると、惨たらしい細菌戦の準備は何れの軍に於ても、秘密裡に実用化しているのではないだろうか。

第一次大戦の1915年、ドイツ軍がイーブル戦場で初めて毒瓦斯を使用した。その毒瓦斯の悲惨な状況を観た各国は1925年、毒瓦斯等の大量虐殺兵器の使用を禁止するジュネーブ議定書に調印した。

然し乍ら米国大統領トルーマンは、大量虐殺兵器である原爆を広島、長崎に投下し、一瞬のうちに数十万人の非戦闘員を殺傷した。一方のスターリンはポツダム宣言を履行せず、武装解除した55万人の将兵をシベリアに抑留し、4万6千人の命を奪った。この暴挙は憎んでも憎み切れない。

第731部隊や私を含めた残虐行為は許し難い行動であった。しかし同じ戦闘行動でありながら、トルーマンやスターリンに対する非難の声が聞こえない事は、憤慨に耐えない。

小人数を殺傷した者は罪悪と罵られ、何万、何十万の大量の人命を奪った者は偉大な英雄と尊敬された戦争は、誠に矛盾していたと謂うべきである。

私に謂わしめれば世界戦争史上、最高の戦争犯罪者の第一号はトルーマン、第二号はスターリンだ。勿論、この言葉は石井軍医中将以下の第731部隊を擁護するものではない。それは軍の総組織の一部であり、責任問題となると全軍の問題だ。運命の悪戯から、其の任務を与えられた者のみを非難する事は、的外れと謂うべきであろう。

黒竜江省博物館と張学良

第731部隊の跡を見学した我々はシーアーの人達と合流し、10・30から市内観光に発った。再びキタイスカヤに案内され、第一百貨店と自由市場を見学した後、昼食は「華梅西餐厅」となった。西洋料理という前宣伝に期待していたところ、中国料理をナイフとフォークで食べるに過ぎないが、中国人には之が憧れのようである。

バスは黒竜江省博物館へと進んで下車した。「道冠古今」と書いた朱塗りの門は、博物館らしくない構えをしていた。右手に眼を遣るとモンゴールで見たラマ教寺院そっくりの門が立っている。

「道は古今に冠たり」とは儒教の言葉だと考えながら進むと、「櫛星門」となっていた。先年、山東省曲阜にある孔子廟で見た櫛星門と瓜二つ、この博物館は孔子廟だと直感した。

更に足を運ぶと「徳配天地」、徳は天地に配すという孔子の教えを、張学良が1931年に書いた碑文が立っていた。ところで哈爾浜と孔子は何のような関係があるのかと、通訳に尋ねてみた。

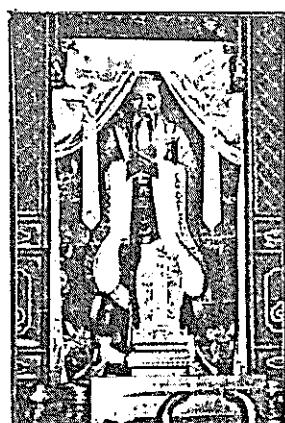
1898年頃から白系ロシア人が哈爾浜一帯に進出し、その数は人口の4分の1を占めるようになった。支那人がロシアかぶれする状態を嘆いた張学良（27頁参照）は、支那古来の儒教思想を呼び興すため、1926～29年にかけて此の孔子廟を建立したという。流石に漢民族の血を引く張学良である。

最奥に建つ清朝建築の大雄宝殿（本殿）には孔子の像が祀られていた。掲額の「道哈大同」という意味は、道徳が遍く拡がるという意味で、学良が満州支配の上善の策として着目した言葉であろう。（右は孔子像）

孔子像の横には日本人にも馴染の深い「修身齊家治国平天下」の垂れ幕が吊るされていたが、彼の国民精神作興の熱意が窺える。そのために博物館の字の前に民族という字を挿入したのかも知れない。

孔子は論語の「陽貨篇」で諭している言葉である。身を修め、家をととのえ、国を治め、天下を平らげ、天の道を地上に行うことを行ふことを理想とした。

孔子は、そのためには人には厳しく自己を律し、仁徳を積み、実践していくことを教えた。そして徳を積むためには不断の努力が必要だと諭している。.



児童公園

通訳の触れ込みでは、児童公園の電車は小学生が運転するから、寄付をする積りで乗車して欲しいということであった。然し乍ら、一昨日よりソ連、北朝鮮の高官が哈爾浜で会合し、其の一行が乗車するから一般人の乗車は禁止となった。

がっかりしたのは通訳である。そこで柳絮の花が舞う光景を眺めている時、暮れかかった空は紫色に染まり、遂に沛然とした豪雨に見舞われ、道路は渦流が渦巻く状態となった。小1時間ほど待機した後、60km西方の哈爾浜空港へと駆進して行った。

金国の概要

清朝（当初後金国と称す）を遡ること5百年、満州族の女真族が支那本部に進出して「金」を建設した。戦時に宋の都の汴京であり、金時代の南京と呼んだ「開封」（河南省）に駐屯した私は、金に关心を持つようになった。

支那の長い歴史では100年程度の国家の文献は少なく、始祖の阿骨打（アクダ）は哈爾浜近郊の出身ということだけは知っていた。

今回の満州紀行では金に就いて調査したいと思っていた。長春の偽皇帝宮に展示された系図から、阿骨打の出身が「阿城市」である事を知り、（上図参照）胸の高鳴りを覚えたのであった。

前記した第731部隊跡の見学の際、通訳に金に関して質問したところ、地図を示して阿城の事を話した。哈爾浜とは目の鼻の先で、距離にして20km程度であった。

長春～哈爾浜の列車では「双城」（58頁参照）に於て金の歴史の一端を知り、更に阿城に足跡を残したい一念であったが、時間的に不可能であった。しかし金の歴史の概要を知り得た事は、大成果と云わねばならない。次ぎに金国の概要を記載してみる。

ソングース族系の女真族によって建てられた金王朝（1115～1234）は、北満州の原住民であった。12世紀の初め哈爾浜附近のアシオ（阿什河、阿城）流域を根拠としたワンヤン（完顔）部を中心に、その部長アクダ（阿骨打）の指導下に金朝を建国（1115）した。（上の下段の図は金朝の系図）

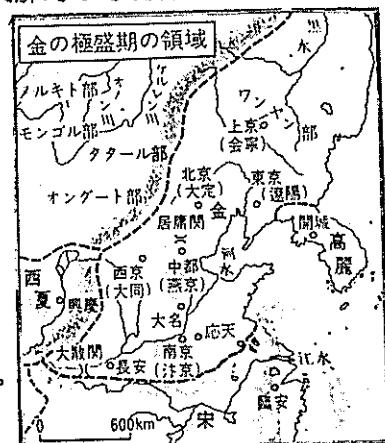
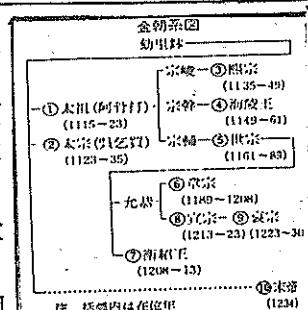
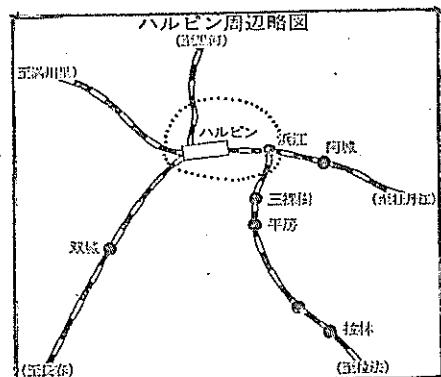
金朝は宋と結んで「遼国」を滅ぼし（1125）、続いて宋の首都・汴京（ベンケイ）を包囲して1127年に占領、宋の2帝を始め数千の皇族、廷臣を捕虜とし（靖康の変）、宋を江南に追い遣って満州、東蒙古、華北を征服して支配した。

第4代の海陵王の時、首都を北満の上京会寧（哈爾浜附近）から中部大興府（北京）に移し、女真族も多数支那に移住させ、国家の体制も支那的な専制官僚国家に組み替えた。

次ぎの世宗は海陵王の政策の行き過ぎを是正し、官吏の肅清、財政の緊縮に努めた。又、支那に移住した女真族に対しては保護政策をとり、更に女真語を奨励し、女真族固有の風俗を興して国粹主義を鼓吹した。

外に対しても平和政策をとり、南宋との国交を回復することに努め、金朝の黄金時代を作った。しかし世宗以後になると放漫政策のため財政は乱れ、国軍の中核をなす猛安、謀克は柔弱放縱になり、社会的不安は深刻化した。その上に北方には蒙古族が勃興してきた。

（右は金の極盛期の領域）



第7代の衛紹王の時より蒙古軍が侵入してきたうえ、南宋及び北西の「西夏」も国境を侵し始めたから、中都（北京・燕京）を捨てて南京（河南省の開封）に避難したが、ここも1232年には包囲された。

金の哀帝は蒙古帝国のオゴタイ・ハン（太宗）に和を請うたが成功せず、首都を脱出したものの宋、蒙両軍の追撃を受けて、逃れられずに自殺した。ここに「金国」は10代、120年をもって滅亡した。

哈爾浜空港と満州開拓農民

18・20発の北京便に搭乗するために空港へと急いだ。しかし中国の制限速度はバスは30km、タクシは120kmのため、往来の少ない空港街道を30kmのスピードで走るのは、日頃運転している我々は苛立つばかりであった。

空港は黒竜江省最大の平野にあり、高粱畑が蜿蜒と果てしなく続いている。空港待合室には中国人に混じって数団の日本人ツアーも見えていた。私の坐った隣人は嫩江（ノンジャン）を訪問してきた人で、懐かしい嫩江の地名は私の鼓膜を刺激した。

嫩江は私が駐屯していた齊々哈爾を流れる川の上流の町で、川の名前と町の名が同じである。凍った嫩江の氷の上で露營した包（パオ）などの想い出は尽きず、二人の会話は限りなく熱がこもっていた。

彼等は15歳で義勇少年団員として入植した人達であった。今回は慰靈目的の2回目の訪問で、週2回飛ぶ齊々哈爾便で齊々哈爾に一泊している。懐かしい齊々哈爾の竜沙公園や、馬占山の本拠地であった市街も全く変化が見られないらしい。

我々一行の人達の大半はソ連の暴虐非人道な仕打ちに遭遇し、怒髪天を衝く忿満遣る瀬ない思いをぶちまいていた。義勇少年団の諸君も同じ気持であった。

8ヶ月以上の有効期間を残した日ソ中立条約を一方的に破棄し、不法な侵略攻撃によって満州、樺太、千島列島の3方面で、約30万人の日本人を殺戮した。

中国残留孤児にしても然り、凡てがソ連の参戦と掠奪、強姦などの暴虐悲惨な犠牲が原因であった。残留孤児の来日の際に我が国の報道機関は、一片のソ連の暴挙を報道したことがなく憤慨に堪えない。このような事では北方領土返還問題は覚束無く、国民の総意を結集するためにも疑問を抱いている。

ここで既に日本人から忘れ去られようとしている、「満州開拓農民」に就いて記述するが、これは日本人の行った大きな大陸への民族移動であった。

昭和7年の第1次移民の渡満以来、32万余人の日本農民が、祖先伝來の田畠を捨て、故郷と別れて繰々と大陸へ渡った。忘れられないことは其の中に、10万余人の開拓義勇隊員がいたことだ。

15、6歳の少年達が眼の前の大平原を望み、胸一杯の望郷の念に耐えながら、学校の先生から教わった「祖国の為」という言葉のため、銃と銃をもって戦ったことは忘れるることは出来ない。

ソ連の参戦は開拓農民十数年の「平和の建設」を根こそぎ崩壊させた。開拓地の小学生の子供達が、煉瓦を手にして暴民と戦って死んだとも聞いている。無限の曠野をソ連の戦車と暴民に追われた母親達は、幼児を背負い、歩ける子の手を引き、日夜、叱りながら高粱畑の中を食料もなく、数十日も南へと歩いた。

目的地の新京や奉天や哈爾浜に着いた時には、背中の子は勿論、自らの生命も蠟燭の灯火のように消えていた。そして未だに一輪の花も供えられないまま、曠野の夏草のもとに眠っている。彼ら義勇少年団員諸君の慰靈の誠は、我々の戦場で亡くなった戦友の慰靈の精神と異なるものではない。

世界の移民史に前例を見ない8万人余の悲惨な犠牲者を出し、遂に満州の開拓農民の歴史は終わった。語るも涙、聞くも涙の悲哀史である。

話に聞くと、日本農民の寒冷地開拓の能力は立派に立証されたのであった。あの酷寒の満州にあって、日本の開拓農民は科学的な寒地生活を築きあげ、農業に於ても米作に成功を見たばかりか、素晴らしい家畜もつくった。

太刀打ちできないと言われていた漢民族の優れた農民よりも、もっと優れた農業経営に成功した。終戦後、数万人の開拓農民と共に難民生活をしていた人の話によると、進攻して来た中共軍の高官から、日本の開拓農民諸君に対し満州に残留して欲しいと依頼されたと言う。

一方、次ぎに進攻して来た國府軍の高官も、同じように開拓農民の残留を希望したと言う。それほど日本農民の開拓は立派に成功し、それを見習いたかったのである。

総てを失った満州開拓史の中で、この偉大な農業の成果を忘れてはならない。其の成果が今日の満州の農業の発展に貢献していることは、この私の眼で直接確認したことであり、誇りをもって絶賛したいのであった。

搭乗機は既に空港に待機していたが、一向に搭乗案内のアナウンスがなく、数多くの中国人は空港従業員に喰ってかかっていた。待つこと2時間余、曠野の遠くの薄靄の中に一台のバスが見え出した。

途端に待合所から拍手が沸き上がった。搭乗機は遅延していた旅客の一団を待っていたのである。彼等は日本人と寸分違わない顔付で、日本人の恥辱だと憤りを感じていた。

しかし、彼等は現在世界一のドル保有国・台灣人ツアーアリ、一応胸を撫で下ろした。遅れた原因は恐らく豪雨のために道路が閉鎖されたためであろう。

20・20に搭乗機は想い出の多かった満州の地を離れた。離別していく哀愁から満州を回顧すると、シベリアのハバロフスクやイルクーツクよりも、物資は豊富で生活程度は数段優っている感じがしいてた。

孟子は「恒産なければ恒心なし」と言っている。國民は先ず喰える状態にしなければならない。満州の四大都市を訪れた感想では、孟子の言葉は概ね成果を上げていた。残る問題は「住」の問題だけであろう。日用雑貨から食料に至るまで、シベリアの都市に勝っていたのは驚きであり、喜ばしいことであった。

機上から眺めた北の空は神秘で感傷的な装いを展開し、茜色の刻一刻と変化する景観は白夜の影響であろうか。

10・00にアジア大会に備えて改裝中の北京空港に着陸し、空港近くのホリディ・インに旅装を解き、就寝したのは翌日の1・30であった。

6月22日 (金) 晴

北京郊外独り旅

昨日、添乗員を通じて哈爾濱から北京国際旅行社に電話を申込み、タクシと通訳を依頼した。

北京は戦中、戦後を通じて20回以上も訪れ、北京市内は言うに及ばず、八達嶺や慕田峪の万里の長城も既に見学済であった。(右は北京郊外地図)

今次旅行の出発前から、半世紀前に足跡した懷古の地の盧溝橋と、八達嶺南方の居庸関の見学を希望していた。

北京国際旅行社から通訳とタクシはOKとの返答があり、意欲満々として欣喜雀躍しながら朝を迎えた。

サーの一行は慕田峪の万里の長城や故宮等の観光に出発直後、依頼した通訳の「楊燕」さんとタクシが私を出迎え、鄭重な挨拶を交わして粗品を贈呈し、先ず〔盧溝橋〕へと向かった。心中には意氣軒昂、全身の血が奔騰するような興奮であった。

盧溝橋は周知の通り支那事変の発祥の地だ。天安門から西南20kmの永定河に架かり、支那最古の大理石の橋である。現在は北京市内に編入されている。

空港近くのホリディイン・ホテルを発った車は空港街道を南下し、北京駅から天壇の北側を西に走った。見覚えのある前方を注視しながら広い高層建築の谷間を通り、盧溝橋路と標示した街道に入ると「豊台公園」が見えていた。

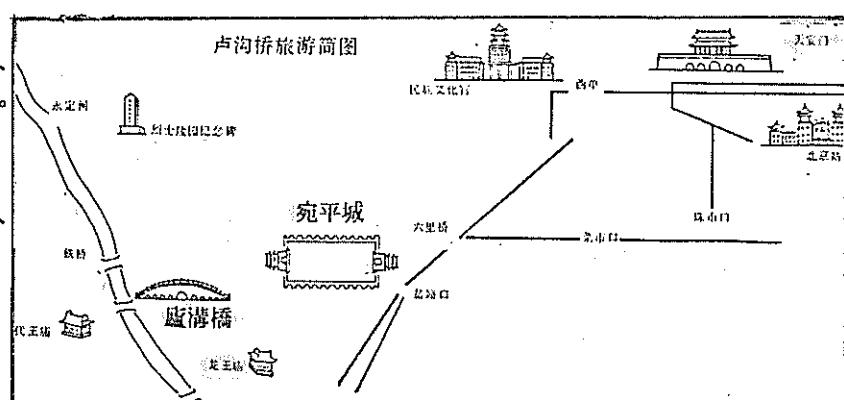
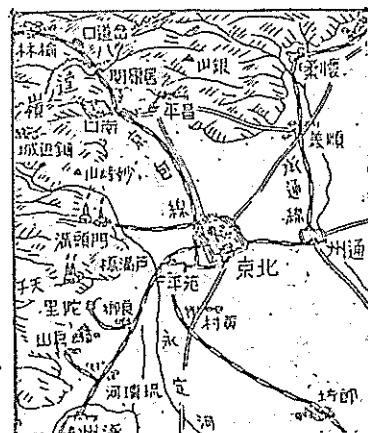
戦時中、北京に出張する時に豊台駅に来ると、車窓には古都の匂いが漂い、「ああ、北京だ」と感じたことが想起されて来る。

走ること1時間足らず、フロント・ガラスに優美な城壁が写って来た。通訳嬢は「宛平城」ですと知らせたが、暫く信じられなかった。古めかしい宛平城しか記憶にない私の眼は疑ったのも無理はない。(下図は天安門からの関係図)

物換わり星移って50年、自然是来る日も来る日も悠然としているが、時の経過と共に事物は変化していたのだ。その時流を察知する才能のない自分が恥ずかしい。

好奇な瞳を凝らしながら下車し、新旧の同居した宛平県城へと歩を進めて行った。

古い城壁は昔の面影を留めず、修復されていた。今の中の人達は無心に城壁下を往来しており、戦争を知らない世代に移り代わって、平和な空気が周囲に漲っていた。



宛平県城

(位置は前頁地図参照)

渴望の的であった宛平城を指差された時は、嬌声を発したいほどの心境であった。事変発生50周年を記念して修復され、禍根を遺す古城は1987年に其の姿を一新した。

宛平県城は盧溝橋の東100mの所にあり、東西640m、南北320mの小さな県城である。昭和12年7月7日の盧溝橋事件から其の名は中外に知られたことは周知の通りで、昔から北京郊外の軍事上の要衝であった。

宛平城の原名は拱极城と称し、唐代に宛平と改称された。事件当時に私が眺めた古城は明朝の崇禎13年(1640)の建造で、小さいながらも堅固な城壁があり、東門を順治門、西門を永昌門と呼称していた。

(右は修復された現在の宛平県城)

事件当時は宋哲元の第29軍、110旅団、219聯隊、第3大隊が駐屯し、日本軍との間に壮烈、鬼神も哭く戦闘が開始された。私の脳裏にも鮮明に刻まれている。

氷の上に瓢箪を転がすような、流暢な日本語を話す通訳嬢の説明に耳を傾けながら、丈の高い楊柳の繁った木陰の下を通って城内に入った。何時の時代も同じように、新しいものと古いものとが入り混じった城内風景は、往時の支那町が思い出される。

城内の最も眼の付く所に新築された「盧溝橋史料陳列館」が建ち、云わざ語らず自然に足は陳列館に向かっていた。

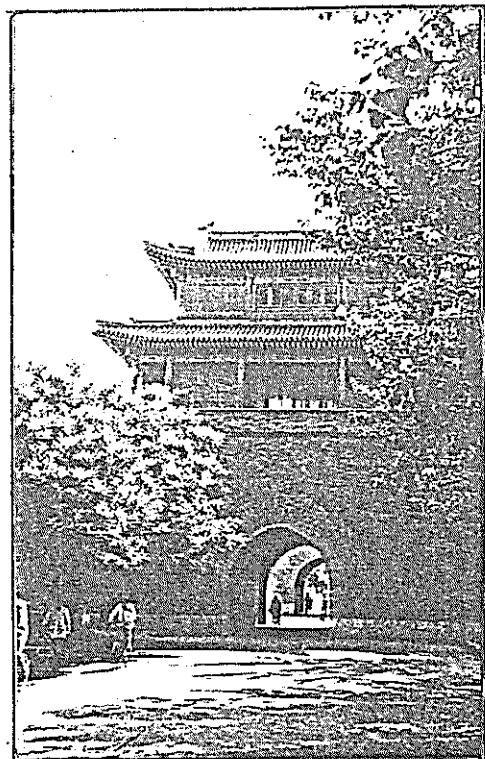
正面中央に第29軍長の「宋哲元」の大きな顔写真が、偉大な英雄として掲げられていた。宋哲元は我々年代の者にとっては忘れられない懐かしい名前だ。館内は殆ど当時の支那軍幹部の写真で埋まり、戦闘状況の写真は全く見られない。

事件当時、日本軍と戦火を交えた支那軍は蒋介石の隸下部隊であり、中共軍とは関係はなく、史料の無いのは当然であろう。

西門の永昌門を潜りぬけ、胸を時めかせながら夢を馳せていた盧溝橋へと歩を速めて行った。

戦争という過去は我々にとっては拔殻に過ぎず、生ける屍となってしまった現在、何故この盧溝橋までも脚を運ぶのかと、人は言うかも知れない。(右は宛平古城の姿)

世の移り換わりは極まりなく、日が経つて月が訪れ、人が去って人が来る。そして過去が現在となる歴史を繙くことが即ち、将来の指針であることを忘却してはならないのだ。



盧溝橋

盧溝橋の袂が見えて来た。何か心が詰まるような気持がする。胸に迫るこの盧溝橋は、一体誰と話し合つたらよいのだろうか。（右は盧溝橋の南面）

此處を訪れた時の同期生は誰一人として生存していない。

太陽は森羅万象を捨てずに運航しているものの、永定河の流水だけが昔の姿を遺すだけであった。

宛平城と同じく事変50周年を記念して橋の様相は一新されてしまった。戦場で生命を燃焼し尽くした私等の想い出の橋、想い出の河は古里のような感じがする。

暴虎馮河の薄氷を履むような危機感をもって盧溝橋を眺め、「散るや万葉の桜花」という万斛の胸中で、第一線の戦場に発った当時が想起されていた。

あの時はと、我が心の中は一時は道を迷ったように、呆然となってしまった。

橋の袂に立っている「盧溝曉月」の碑石、それは新しい大理石の囲いの中に立っていた。

河岸の楊柳の緑が煙り、朝靄が永定河の河面から立ち昇って、橋一帯を絵のようにぼかしている。そこに美しい曉方の月がかかって、まるで夢のような艶やかな景色だ、と詠んだ乾隆帝の詩碑である。

【右は乾隆帝（清）の有名な「盧溝曉月」の碑石】

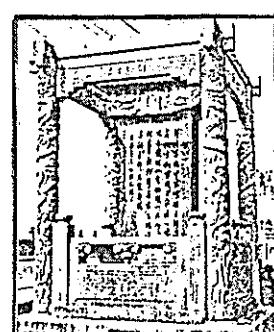
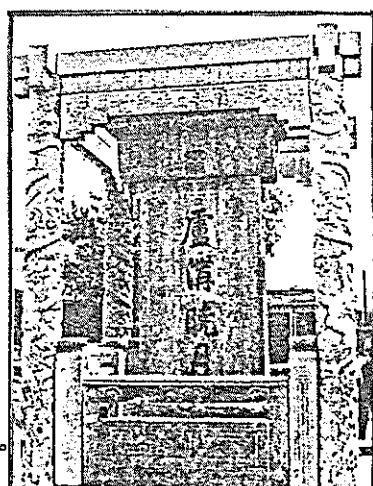
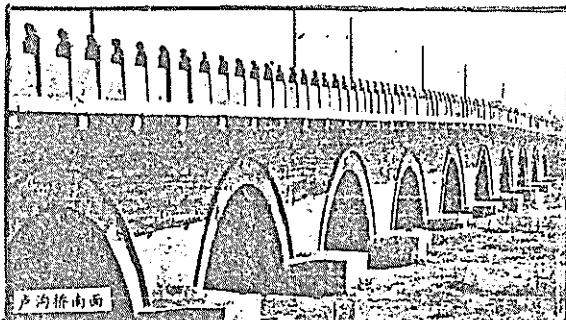
世界に旋風を巻き起こし、狂乱怒濤の第2次大戦にまでも発展するとは、夢想だにしなかった盧溝橋、その橋の窪んだ敷石を踏みながら、往きつ止まりつして渡っていると、運命の歯車を感じるのであった。

橋の上は多くの中国人の観光客で殷賑を極めていた。私と通訳の二人は衆人環視的となり、いつも冷たい視線を背中に感じるようであった。忿懣の罵声を浴びないものの、軍人時代の残光を背負った我が心は、覆水盆に返らずという心境である。

欄干の柱頭に据えられた獅子像までも「愚行」呼びりしているようで、四面楚歌の中を歩いている感じがする。本当に盧溝橋の轍を再び繰り返してはならない。通訳嬢が寡黙となっていた私に声を掛けてくれたことは、氏神様のようであった。

橋を渡りきると橋畔にまた乾隆帝の碑石が立っていた。大理石の囲いの中に「盧溝曉月」の詩文が刻み込まれ、観光客はこれを背景にしてシャッターを切っていた。

あの当時の橋上からの眺望は一面に烟や砂漠が拡がり、視界を遮るものは皆無であった。しかし現在では家屋が建ち込んで展望がきかない。（右は盧溝曉月の刻文の碑石）



一文字山と日本軍が名付けた砂山は何処に雲隠れしたのであろうか。見ることは出来ない。

事件当時、日本軍に水を供給した老夫婦が一文字山の近くに棲んでいた。訪れた人達は老人に感謝の心をこめて、何分かの喜捨をした光景が彷彿として浮かんでくる。

時は流れ古きを捨ててしまった盧溝橋、喜びも悲しみも今では一場の夢のようである。

日本には高すぎる授業料となった盧溝橋、再び見ることが出来たことだけでも、望外な喜びであった。

盧溝橋の歴史は古く、金時代（1125～1234）以前は木橋であった。洪水で流されて一時は浮橋や渡船となっていたが、1189年6月から着工し1192年に完成して石橋となった。当初の名称は「广利橋」と呼び、後日、盧溝橋と改名され、その名は800年も続いている。

史料によると明朝時代には6回、清朝時代にも6回修復している。全長約260m、幅は9、30m、橋脚の数は10個、欄干の数は340本である。

驚かされるのは大理石の欄干の柱頭に489個の獅子像があり、橋の側面部分の獅子像を合計すると、627個という膨大な数である。（上の写真は欄干の獅子像）

神出鬼没とでも表現したい獅子像は一つ一つ名匠の手で刻まれ、同じものが全くないことも亦、驚きである。

特に橋の袂に据えられた獅子像は大きく、他を睥睨している。（右は橋の袂の獅子像）

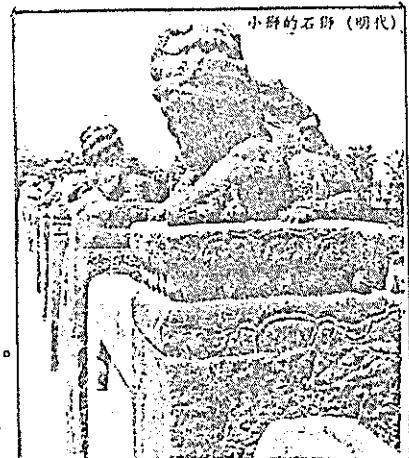
マルコ・ポーロも此の橋を渡り、そのことを「東方見聞録」の中で、世界で最も美しい橋だと記している。

嘗ては西方からの旅人の凡てが此の橋を渡って北京に入った。外国人は難しい支那語の呼び方をせず、マルコ・ポーロ・ブリッジと呼んでいた。

ここ盧溝橋の駅は、京漢線（北京～漢口）

が出来た頃は、京漢線の起点の駅であった。京漢線はベルギーの資本で造られたが、「神聖な帝都に蛮夷の手で鉄道を侵入させることは、許すべからざる冒瀆である」として、北京を起点としなかった。

支那人・中国人は、今も昔も世界一の自惚れ易い民族性を持ち、この話も注目に価するものである。



永定河

永定河は事変当初、日本国中に響き渡った懐かしい河の名前である。

盧溝橋の下を流れる永定河の古称は「盧溝」或は「桑干河」であった。俗称として渾河、小黄河、黒水河とも呼ばれ、水源は万里の長城の南麓に発している。

清朝の康熙年間（1661～1722、第4代皇帝）に氾濫があり、河川改修をしてから永定と命名し、現在に至っている。

戦国時代の七雄の一つであった「燕」の時代に、彼の有名な詩に詠まれた「易水」は、永定河であった。周知の通り「風蕭々として易水寒し、壯士ひとび去つてまた還らず」の詩の河である。

戦国時代の「燕」の太子丹の臣となった男が、この詩の作者で主人公であった人物「荆軻」だ。太子丹が荆軻に「恨みを報じ國難を救へ」と言って、秦の始皇帝を刺し殺すことを頼んだ。

そこで荆軻は生きて再び帰れないと覚悟し、易水まで見送りに来た人と別れる時に朗々と詠んだ詩であった。

盧溝橋事件は此の易水を挟んだ戦闘であったが、日支両軍は荆軻の壮士のような覚悟で戦ったのであろう。

「昔時人已没、今日水猶寒」。昔の人は皆この世を去っていないが、易水の流れは今も寒々と昔の姿を留めている、と詠んだ燕の駱賓王の送別の詩が、又もや私の脳裏に浮かんでいた。

願わくば永定河の字句の如く、世界は平穏であるように祈ってやまない。そして中国でも二度と天安門事件を繰り返さないように、願うばかりである。

盧溝橋事件の経過の概要

昭和12年7月7日、この歴史的な夜は七夕であった。一年の想いをよせて牽牛・織女の両星が晴れて中空に相会する頃、北京第一の月の名所、盧溝橋畔に数十発の銃声が響き渡った。この夜を限りとして日支両国の運命の星は遂に離れた。

この夜、日本の支那駐屯軍の豊台駐屯部隊は、盧溝橋の南方約1000mの竜王廟附近の草原で、夜間演習を実施していた。（71頁地図参照）この地方は演習の好適地で、常に諸部隊が演習地として利用していた。

この夜11時40分頃、盧溝橋に駐屯する支那軍（宋哲元の指揮する第29軍の一部）は、日本軍の演習部隊に数十発の不法射撃を行つて來た。

日本軍部隊は演習を中止して人員点呼を行つたところ、兵一名が不足していることが判明した。直ちに附近一帯を捜索すると共に、豊台の駐屯部隊長に急報したが、まもなく不足した兵は発見されて損害のないことが明らかになった。

急報に接した豊台部隊は直ちに現場に急行すると同時に、盧溝橋駐屯の支那軍に対し交渉を開始した。その最中に竜王廟附近の支那兵は再び不法射撃を行い、今度は迫撃砲弾を交えた数十発を日本軍に浴びせかけた。

ここで日本軍の沈黙は破られた。漆黒の闇を衝き草原を疾駆して竜王廟の敵陣に突入、忽ちにして竜王廟附近一帯の永定河左岸堤防の線を占領し、盧溝橋及び長辛店の

支那軍を監視する態勢を取った。

8日、北京駐屯の日本軍部隊長は事態を重視し、宛平県長と不法射撃に関する交渉を開始すると共に、取敢えず演習のために分散していた北京部隊を集結させた。

9日午前2時、支那側は日本軍の要求を入れ、午前5時を期して盧溝橋にあった支那部隊を永定河右岸に撤退することを約したので、日本軍はその実行を監視することにした。

しかし永定河左岸の支那軍は次第に兵力を増強し、戦闘準備を着々と整えていた。10日夕頃になると迫撃砲を有する支那軍は、前日の誓約を破って竜王廟を占領し、引き続き攻撃して来たのである。

ここに到って牟田口聯隊長は決然として主力を第一線に展開し、出撃して竜王廟を占領、爾後、主力を盧溝橋東方地区及び豊台に集結して状況の推移を見守った。

支那側は「盧溝橋及び竜王廟に駐屯せざること、謝罪及び責任者の処分、将来の保障として排日行為の取締の励行」等の数ヶ条を、第29軍代表が日本軍側に手渡して、一時小康を得た形となった。

しかし支那側は八宝山（盧溝橋北方7km）附近から京漢線に至る間、永定河右岸地区に兵力を増強するばかりでなく、三線に陣地を構築して漸次、日本軍を包囲する態勢をとり、抗戦意識は極めて旺盛であった。

一方の北京では反日感情は熾烈で戒厳令を布告し、内外城門から市内の随所に至るまで第29軍兵士で固められ、交通は遮断された。

13日には城外を通過する日本軍1小隊に支那側は不法射撃を行い、14日には日本軍駐屯部隊の通過に際しても不法射撃を行い、それぞれ戦死者が続出した。

19日午前6時頃、盧溝橋の支那軍は日本軍を射撃して将校1名が負傷した。遂に日本軍はその夜、断固たる通告を支那側に発した。「日本軍は第29軍が再び不信行為を繰り返す時は、20日正午以降独自の行動を探るべし」と。

盧溝橋附近にあった日本軍はこの10日間、はやる胸を押さえて砂山の一文字山を一步も出ず、隠忍の日を送っていたのであった。

20日午後1時過ぎ、宛平県城の支那軍は突如として日本軍に砲撃を開始した。来たるべきものが遂に来た。河辺司令官の命令一下、一文字山の日本軍砲兵陣地からの砲撃を皮切りに、全線の砲口は真紅の火を吐いた。

宛平県城は黒煙蒙々として立ち籠め、一弾ごとに城壁は飛散した。しかし支那側も頑強に抵抗して砲撃をやめず、両軍の猛烈な砲撃戦の応酬が続き、宛平県城の望楼は吹き飛んでしまった。

以上は日本軍の発表した盧溝橋事件発端当初の概要である。この事件が発展して支那事変となり、第2次大戦に移行したのであったが、盧溝橋畔の「盧溝曉月」は何と見ていたであろうか。

『盧溝橋事件を想う』

戦争には戦争になる原因があり、動機がある。この事件の発端となった発砲事件は、支那側は日本軍が不法に発砲して戦闘を仕掛けたと言い、日本側は発砲せず、自衛のために止むを得ず応戦したと声明した。

日支双方の主張が正しければ、戦争はどちら側も正しいことになる。

戦争は何れが正しいか、何れが非であるか、何れが不正義であるかを決定するのは

戦争の勝敗によって決定される。

勝った方が正しく、敗者には正義がないと言う過去の歴史から、敗者の日本は不運と言わなければならない。誠に残念な事件であった。

盧溝橋事件は偶発的か、それとも作為的か、又、尖鋭的な抗日分子か、中共による計画的な策動によるのか、未だに不明である。一寸した駐屯部隊の小競合が世界大戦にまで発展するとは、誰しも予想しなかったであろう。

ここで問題となるのは中国共産党である。当時の蒋介石政権は積極的な抗日戦を行っていなかった。これは事実であった。そこで日支衝突の原因をつくり出し、両方を戦わして漁夫の利を図ったのが、中国共産党だったと言う説が生まれてくる。

中国共産党の劉少奇一派が盧溝橋の日本軍に発砲したと言う説や、CC團という中共色の濃厚なテロ団だと言う有力な説もある。戦争の原因は特に色々怪々と言わざるを得ない。

何れの国の軍人や軍隊も結論を先に立てる習慣があり、外交には不適であったことは確かである。これも盧溝橋事件の教訓の一つであると思う。

香山公園・碧雲寺

四百余州の支那を相手に六十余州の日本が戦った支那事変、その発火点となった盧溝橋は、当時の我々青年将校に対し「人生意気に感じ功名誰かまた論ぜん」と鼓舞していた。流れた光陰の数々の想い出を回顧しながら去る時が来た。

車中では流暢な日本語を話す通訳嬢と中国問題を語り合い、古代史について花を咲かせる楽しみは格別であった。

全く戦争を知らない彼女達には恩讐はなく、忌憚のない会話に熱がこもっていた。挙句の果ては駄弁を弄する私に、大学の先生ですかと尋ねたが、雑学博士の会話は何時までも続いている。(右は香山公園の位置図)

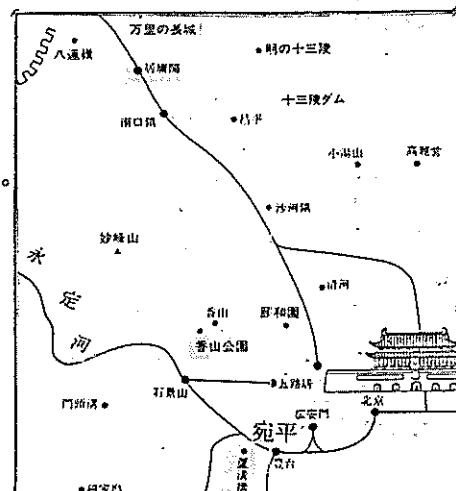
途中、市内の「裕龍大酒店」のホテルで昼食をとった。料理も最後になった頃、持参した「カップヌードル」を提供したところ、運転手と通訳嬢の旺盛な食欲はこれも平らげてしまった。中国人には日本のカップヌードルは筆頭の好物らしい。

右手の樹間から万寿山の高樓が遠望され、タクシはいよいよ西山附近に差し掛かっていた。北京の西郊40kmにある西山は、万寿山、玉泉山とともに有名な景勝地で、北京八景の一つ「西山晴雪」で知られている。

西山の東麓にある「香山公園」は山林公園として静かな緑が覆い、数学オリンピックが行われるほど環境は抜群である。

長江沿岸にある廬山の「香炉峰」に似ているから香山と名付けられた。その冬景色の優美なことから「西山晴雪」の碑が立っている。

金朝の皇帝の行宮所や狩猟場であったが、清の乾隆年間に庭園が大修築され、多く



の寺院が建立された。その中で最も有名な寺が「碧雲寺」である。しかし、ここも例にもれず文革の時に破壊され、漸く修復されていた。

香山公園入口の反対側に建つ「碧雲寺」、曲がりくねった長い参道は老松、老柏で覆われ、古刹の雰囲気が肌に感じていた。特に注目に価したのは「白松」の大木であった。真っ白い木肌に緑の青葉、世にも珍しい松の木である。

規模雄大な数々の殿宇の中で「五百羅漢堂」は有名である。獎められながら拝観すると、金色の百面相の大羅漢群は薄気味悪い面相ばかりで、好奇な瞳を凝らして一巡した。このような豪華莊嚴な五百羅漢の拝観は、私には初めてのことであった。

輪奐の美と云うのであろうか、眼に映る高大な建築美の壯麗なことは、表現する辞を知らない。清朝で最も隆盛を極めた乾隆年間の建造物は、立錐の余地がないほど建ち並んでいる。

再び訪れる事のない碧雲寺、この際、丁寧に拝観したいと静かに歩きつつ、感嘆の眼を配りながら、奥の知れないほど、奥深い寺の中を進んで行った。

前方の山頂にアンコール・ワットを小型にした須弥山が聳えていた。陽を浴びた白大理石の須弥山は、後光のように仏の威光を照らし、最高の靈地となっている。

このインド式の「金剛宝座塔」の高さは35m、側面には仏像や天王、力士、竜鳳のレリーフが彫られていた。

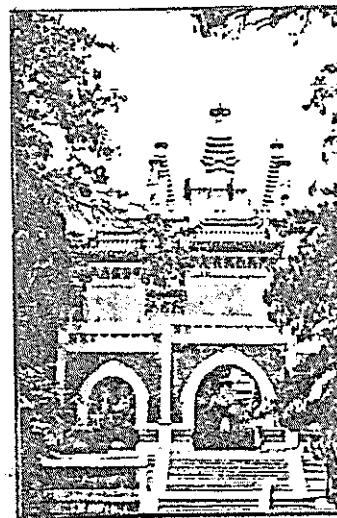
(右は碧雲寺の須弥山の金剛宝座塔)

不抜の信仰によって法燈が護持され、須弥山の彼方のチベットからも遍歴している人の姿も見えていた。釈尊こそ最高の支えだと、梵我一如の境地になり、敬虔な信徒も散見され、私も中に混じって合掌した。

この寺は又、1925年に北京で急逝した「孫文」の遺体が、2年間も此の塔の中に安置されたため、これを記念して境内に「孫中山記念堂」が建立されていた。

乾隆13年、チベット僧がインドの須弥山から持参した模型によって造られ、今では丈高い大樹の青葉が円筒のようにかぶさり、草木は彩りの色鮮やかな花を点じている。

「衆生病むとき菩薩も亦病む」という言葉を思い浮かべながら、国家安かれ、民安かれと、再度拝礼して碧雲寺の山門を出た。(下は羅漢堂の拝観券、撮影禁止)



居庸関

(位置は 77 頁地図参照)

居庸関は北京の西北約 80 km にある元時代からの古い関所で、華北平野から蒙古高原に向かう道路が、万里の長城を横切る所にあり、今は鉄道が通っている。

南口という所から八達嶺までの 15 km にわたり、連山が迫って深い幽谷をつくり、昔から軍事上の要害として有名であった。カガイトウキ

この居庸関を一層有名にしているのは「過街塔基」で、中央にある関門を多角形のアーチ状に造った大理石の雄大な「方台」である

これらは四川省・成都の宝積の僧「徳成」が、元代の 1343 年に交通安全を祈願するために建てたもので、その上に塔があったと考えられている。

元代の唯一にして完全なラマ教芸術の遺物として、又、言語研究の資料として珍重すべきものだと謂れている。

以上の予備知識をもって、鬼気迫る耽美壯麗な居庸関に胸中を躍動させ、今回この地を訪れることにしたのであった。

碧雲寺から頤和園の北方を通過し、明代の行在所のあった沙河鎮を通ると、其処に鞏華城の旧跡が見えていた。

これから昌平に向かった広い街道は内蒙古に通じ、タクシはバスやトラックを追い越してフルスピードで疾走した。

明の十三陵へ行く道路との分岐点である昌平附近から、昨夜の睡眠不足がたたり出し、鷙化して鳩となったように知らず識にず、睡魔の檣となっていた。車は左に急カーブした途端に眼が開いた。其処に長城の威容が展開し、千山は峨々として天に向かっていた。

山は顔の直前に聳えて山中の静けさは特に「山中外事なし」だ。通訳に居庸関かと尋ねると首を縦に振ったが、渺々たる吾が懷いは自然に眼を覚ませたのだ。

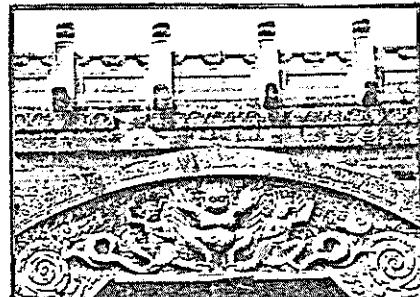
車は人跡の絶えた深山の小径を登り、千仞の谷を爪先を立てて見るよう、周囲の連山を眺めていた。夢を馳せていた居庸関が見えた。タクシは天険に拠った関所の堡壘「過街塔基」の門前で停車した。(上の写真は元代の居庸関と私)

通訳嬢は先ず元代の関門を案内した。大理石で造られた関門の正面上部には、右の写真のようなレリーフが私の眼を引き付けた。

1343 年頃に建てた元代建造物の代表的な関門、その前に立つと歴史の重みがひしひしと感じられ、彷彿として当時の状況が偲ばれてくる。

アーチ型となっている関門内部に脚を運ぶと、予想もしなかった彫刻が壁面を埋め付くし、唯、啞然とするばかりであった。

壁面の下段には梵・チベット・漢・西夏・蒙古・ウイグルの六種の文字で仏典が刻銘されていた。そればかりか、上段下段の各所に千仏像や菩薩像が彫まれ、一つ一つ姿を変えた仁王像のクリーフもあり、胸をときめかせる元代佛教美術の結集が溢れ出



て、詠嘆するばかりであった。（右は閻門内壁に彫刻された千仏像、菩薩像、仁王像）

大理石で造られた閻所の上の「方台」に、額の汗を拭きながら登樓した。この有名な過街塔基の方台から、両山の屏立する谷間に一条の峠道が通じているのが俯瞰された。

現在は八達嶺から張家口、そして内蒙古に達し、この展望を形容すると、「一夫路に当れば万夫も進む能わず」といった隘路となっている。

往時は馬車の往来が続き、人家は約百戸だったという。そして此處に税関が置かれてあったのである。

関城といわれる円形の堡壘が、山脚の迫る一条の渓流の最狭地点に築かれ、左右の山頂に其の羽翼を伸ばしている。小型の万里の長城である。

昔は閻所の通る道路には石畳が敷かれ、閻門の過街塔基のことを土地の人達は、「塔坐児」と呼んでいたという。

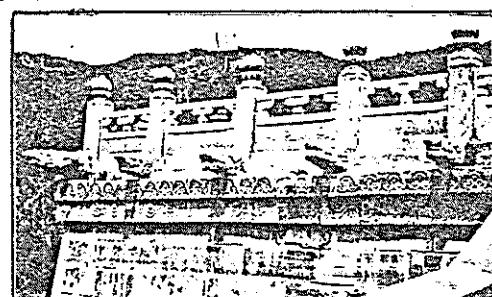
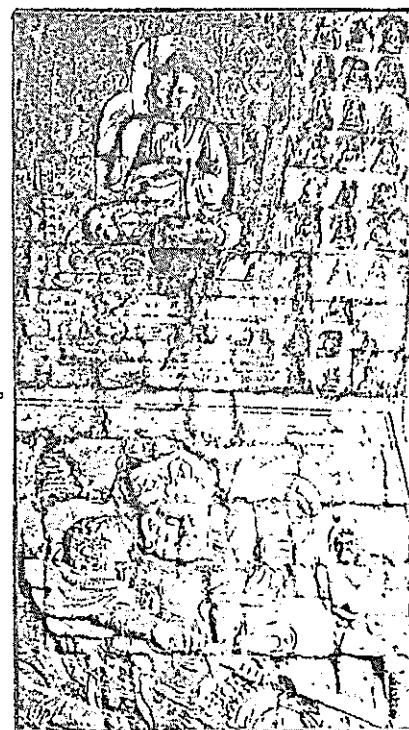
方台の望楼に立った偉観の眺めは飽きることを知らず、胸のすくような爽やかさを味わいながら、降りて行った。（右下は元代の閻所「過街塔基」の「方台」と彫刻美）

続いて清時代の閻所の跡に脚を伸ばした。清代のものは元代の閻所の南約100mの所にあり、年代の差は明瞭に現われて新しく、堅牢である。しかし芸術的な豪華さの点に於ては元代のものが数段優っている。

歴史を繙くと、彼の有名な明の將軍「李自成」は清軍に敗れて北京を去り、西安を西京と称して大順國を樹立し、大順王と名乗った。その後、彼は北京奪回を目指して1644年3月、この居庸閻から北京入りをしている。（その後敗れて明朝は滅んだ）

支那事変では昭和12年8月15日から、居庸閻附近で山嶽戦が展開された。守るに易く攻むるに難き天下の嶮、灼熱のもとに前人未踏の道なき山を追撃した、苦心のほどが窺える。（右は清代の閻所の跡）

苛斂誅求に苦しんだ血涙の跡の居庸閻、北方騎馬民族以来の戦場となった居庸閻は、現在は曉光がさして天下太平であった。少ない観光客を相手にした数軒の露天商も並び、幽僻の地の発展を祈り、タクシは千仞の地に下った。然し元代閻所にあったラマ教独特の奇怪な彫刻は、何時までも忘れられない。



雍和宮

車中で通訳嬢は、時間があれば予定外のラマ寺・雍和宮に案内すると誘ってくれた。その言葉は私の喜びを倍加し、親切心には国境はないと感謝した。雍和宮と聞くと清朝時代だなと直感したが、頤和園のように和の字を好んだのである。

拝観時間の16時に間に合うようにと疾駆した。徳勝門の豪華な高樓が眼底に映り、地図を拡げて雍和宮の位置を確認すると、東單の通りであった。王府井通りの東にある東單通りは、戦時中は酒場が軒を連ね、想い出の街路である。

清い水を湛えた用水路に沿って徳勝門大街を通り抜けると、その街角に黄瓦の屋根と朱塗りの塀壁が見えてきた。これが雍和宮の西北の角であった。

右折して山門に向かったところ、雍和宮の敷地の奥行きは千mもあり、漸く時間に間に合って快々的に昭泰門を潜った。境内には36棟の建物が建ち並び、残念ながら時間をかけて参観する余裕がない。

黄瓦と朱塗りで眼の醒めるような雍和門の天王殿、その金色の額は漢、滿、蒙、西藏の四文字で鮮やかに書かれていた。（上の写真が金色の四文字の額）

八角の碑亭や鐘楼、布袋像や弥勒菩薩像を祀った殿宇、各所に点在する豪華な銅鼎などを眺めながら、急いで奥へと足を運び漸く雍和宮殿に辿り着いた。これが大雄宝殿（本殿）で釈迦三尊を祀り、東西にある十八羅漢像など総てが乾隆年間のものであった。

普通は大雄宝殿が最奥に建っているが、通訳嬢は未だ半分だと告げると急に足が重くなってきた。

次ぎの永佑殿は雍正帝が皇太子であった時の寝殿で、続く法輪殿の屋根はラマ寺院の構造であった。この法輪殿でラマ教の諸行事が行われることから、雍和宮をラマ寺と呼んでいる。

千m近く急ぎ足で歩いた最奥が万福閣であつた。彼女はこれを見せたい一心であったらしく、時間に間に合ったと喜んでいた。本当に彼女の好意には頭がさがるばかりで、感謝しながら殿宇に入った。

途端に度肝も抜くような大仏は参詣者を圧倒し、無言のうちに畏怖されてしまった。

ダライ・ラマ2世が乾隆帝に寄贈した大仏は、一本の白檀の木で彫った弥勒菩薩像で、高さ33m、幅は8m、その偉大さは清艶高華にして「三跪九拝」しなければならない。（右がその弥勒菩薩像）

雍和宮は1694年、清の康熙の時、未だ親王であった雍正帝の御殿だったが、乾隆帝の治世にラマ寺院になったのであった。



北京の旅は終る

楊燕さんという優秀な通訳のお陰で有意義な北京の独り旅は終った。

最後に奇妙な偶然から雍和宮を参観できたことは、旅の締め括りを最高に盛り上げたばかりでなく、旅の続きを夢見るようでのであった。黄瓦に朱塗りの壁の雍和宮、重厚で静寂に包まれたラマ寺院、次回には時間をかけて拝観してみたい。

ツアーの一一行と午後5時に友誼商店で落ち合った。しかし彼等は幸運に恵まれず、期待していた天安門広場は驟雨のために下車できず、挙げ句の果ては故宮は閉門となってしまったと云う。

一行の通訳は代案として「景山」に登り、故宮を俯瞰して來たと告げた。それでは「首吊り」だと私が応答すると、良く知っているねと驚いていた。明朝最後の皇帝「毅宗・崇禎帝」が縊死した所が景山で、縁起の悪い場所である。

最後の晩餐会はホリディイン・ホテルで開催された。しかし外資系ホテルの「お別れパーティ」では、何ら中国の風情が湧いてこない。今では耳に出来ない胡弓の響きは、支那の夜の情緒をたっぷりと味わえたが、特に「支那の夜」の歌は懐かしい。

【支那の夜、支那の夜よ　港の灯り、紫の夜に　のぼるジャンクの夢の船

ああ忘れられぬ、胡弓の音　支那の夜、支那の夜】

唇歯輔車の関係でなければならない日本と中国、今回の旅では北京を始め瀋陽、哈爾浜と単独行動をとった結果、忌憚なく若い通訳達と会話ができた。そこで中国の将来に就いて話し合ったことは、史跡観光に匹敵する成果があったと思っている。

支那4千年の歴史は戦争の歴史であったことは否定できない。しかし現在では地球的に考える時代に移行した。地球はミサイルの格納庫となって戦場は宇宙空間にまで拡大、人類は破滅の危機に立たされている。このような世界情勢の中で中国は狭い殻の中に閉じこもり、井戸の中の蛙であってはならない。

昨年の6・4事件前後から民主の高波は飛沫をあげて全土に拡がった。これは一般民衆が世界を眺めて自覚した証左である。特に通訳はトップクラスの就職先であり、エリート集団と云っても過言ではない。海外生活を体験した彼等の口から直接、中国の民主革命の声を聞き、中国は変わったと肌で感じたのである。

私は通訳の彼等に言った。「権力を愛する者は権力を人に与えることだ。それが民主である」と。希望の灯を民衆の心の中に灯すには、殻を抜け出すべきだと強調すると、吾が意を得たりと相槌を打っていた。

中国の若者は変わった。将来に希望が持てると確信する。十年以上も前に上海の黃浦公園の朝の散歩の時、私と同年配の人が共産主義では発展はないと断言したいた。彼の言葉を通訳に告げると、刺激されたように首を縱に振っていた。そこに頼母しさを感じたのである。

6月23日 (土) 快晴

北京～成田

北京空港10・00発のCA925便の鵬翼は飛翔し、成田空港に14・00に着く。その夜は友人と旅の話に耽りながら、管鮑の交わりを深めたのであった。

あとがき

今回の旅路は景勝無双の地を観賞する事が目的ではなく、運命的な出会いとの懐古、或は回顧の旅であり、「夏草や兵どもの夢の跡」の旅であった。そして旅は又、旅を作る気持で旅をしなければ旅ではないと、痛感したのも此の旅であった。

過去の事を思い出して懐かしい想い、親しみを深める事が懐古、懐旧である。一方、稍々反省を含めて振り返り、過去の事を思うことは回顧であろう。その意味は大同小異である。今次紀行は温故知新の旅であり、懐古の意味が強いかも知れない。

動物は帰巣本能を自然に持っている。しかし懐古、或は回顧という精神作用は人間特有のものであり、人はそれを歌や詩、文章に表わした。その心は年老いて来ると更に強まってくる。

私達が毎年、靖国神社に昇殿参拝して戦友の御靈を慰める事は、懐古の心の発露であり、祖先の靈を祀る仏壇に燈明を灯す事も同じ心理である。

唐の詩人「荊叔」の「暮雲千里 無処不傷心」（國破れて山河あり、時しも夕暮れ雲は千里に流れて、見るもの聞くもの、心を痛めないものはない）と詠んだ詩は、年老いて夕暮れを迎えた現在、古戦場を訪れた私の心境を如実に表現している。

蘆溝橋の宛平古城は「古城非疇昔 今人自来往」（古城に行って見ると、そこには昔の姿はないが、今の人人はまだ無心に城壁の下を往来している）と詠った唐の裴迪の詩も、私の胸中とぴったりであった。

柳条溝や偽皇宫を眺めた時には、「昔時人已沒 今日水猶寒」（昔の人はことごとく世を去っていないが、水の流れは今も寒々と昔の姿を留めていた）と詠った駱賓王の懐古の情が胸を衝き、他の人達とは異質の感想を抱いていた事だろう。

小学校から旧制中学校、そして軍籍に身を投じた歴史の中では様々な戦争が発生し、私自身も身を以て体験した。然し乍ら我々の知る事が出来るものは、記録として残された僅かばかりの外観に過ぎない。歴史の真実は恐らく知る事は出来ないにしても、吾が眼で眺めた日々は刺激的であった。

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と、人生意気に感じた当時のことは、枯れて行く己の心を知りながら、臉に焼き付いて忘却の彼方に追い遣ることは出来なかった。渴望的として残されていた今回の旅路は、残照の我が人生に於ては大願成就、温故知新の最大の喜びとなつた。

これからも楽しいかな人生、何時も好奇の心を以て、何かに挑戦する気構えを持ち続けて行きたい。心豊かに人ととの触れ合いの中で自分の感性を伸ばし、ゆったりとした旅心をもつて老いを愉しみたいものである。そして刻一刻と過ぎて行く一刻を充実させ、無心で自然に順調して天寿を完うしたい。

一気に堰を切ったように飛び出した今回の旅は、阿鼻叫喚の慘禍の跡、怨嗟の的となった数々の地を巡ったが、歴史の空白を埋める意味で今回も亦、拙い紀行文を綴った。これも「人生如此自可樂」、人生を此のようにして自ら楽しむための駄馬の慰めである。

